
贅の血の少女

かずさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

贅の血の少女

【Nコード】

N7397T

【作者名】

かずさ

【あらすじ】

人外が手にすると強大な力を持つ事ができる贅^{にえ}の血を、人間と鬼のハーフである少女が宿す。
常に人外から命を狙われる可能性のあるその身を、自己の血を駆使して敵を屠り、時にその血を以って仲間^{にえ}に力を供給しながら幸せを求める少女の物語…なのかな。

プロローグ（前書き）

結構百合色の高い作品になる予定ですので読む際は気をつけてください。

あとキャラ性格改変のご都合主義な作品にもなると思います。
アンチは少なそうです。

プロローグ

「普通の人間の女って聞いていたんだがな…」

2メートルは超す体躯を持ち、青肌の筋骨隆々に額から一本の角を生やした鬼が少女に言う。

「普通でしょう。人外に見えますか？」

対する少女は目の前の異質な存在に驚きもせず淡々と答える。

少女、羽藤奏は定期的に襲ってくる鬼の存在に既に慣れていた。
はじつかなで

「何が普通だよ。お前、体に流れているそれは『贅^{にえ}の血』という奴だろう。あまり人間には興味のない俺でも確信する前から何故かお前を食べたいと思ってたぜ。気づいたのは血がついた拳を舐めたからだが…。

あのじじいに、どこにでもいそうな人間を殺せって言われた時はふざけんなって感じだったが、意味がようやくわかったぜ。上手く正体を隠してやがるじゃねーか。」

「先代までの技術の賜物です。お話はここまでにしましょう。ここがばれたのでしたら、さっさとここを離れる準備をしないといけま

せん。」

奏は鞘から刀を抜き、鞘をその辺に放る。

「連れないなあ。が、まあいいさ。さっきまでとは違うぜ。少量とはいえ贅の血を舐めたからな、力が溢れるのを感じるぜ。人間なんて数十年は喰ってないがお前は食べるぜ。」

目の前の鬼の気が膨れ上がる。

先程までの状態でも、普通の鬼より比較的強かったのだが、今はさらに力を増している。

奏は目の前の一段と強くなった鬼を見てゆっくりと目を閉じ、頭の中で『スイッチ』を切り替えた。

「おい、てめえ。…その角あ。」

奏の姿を見て鬼が驚く。奏は長い黒髪を後頭部で纏めたポニーテールで、前髪は眉付近で横一直線に揃えたいわゆる姬カットという髪型なのだが、その揃えた髪を掻き分けて2本の10センチ程度の角が前髪の生え際辺りから突き出ていた。

「贅の血が流れる鬼、いや、人間とのハーフか。そいつあ少しばかり卑怯じゃねーのか？」

鬼が奏を見て驚愕と多少の恐怖を隠せないでいる。それは仕方のないことだろうと奏は思う。

鬼は知っているのだから。人間には何の効果をもたらない贄の血だが、鬼が手にすると強大な力を持つ事が出来ると。そして自分は贄の血をその身に宿す…半分鬼。^{ハーフ}

「いったでしょう。お話はここまでです、と。」

奏は独自の技術、贄の血を元に発生させた紅い気を体と刀に纏わせ鬼の背後に回った。

その接近速度は力を得た鬼でも認識できない速度。奏は後ろから鬼の心臓を突き刺した。

「か、体の硬さには少々自信があっただがな…ちっ、なんだよ。その速さにその異質な紅い気は…」

気づかないうちに突かれて驚きながらも、笑みを浮かべながら消滅していく鬼を奏は見送る。

鬼というのは気楽な生き物だ、と奏は思う。

送られてくる中位以上の鬼は、どの鬼も基本的に負けても笑いなから還っていく。本当に戦闘狂極まりない存在だ。

奏は刀を収めて角も隠すと、ため息をつきながら家に戻った。

「おや、おかえりなさい。奏さん。何かあったんですか？ 頬が少し切れていますか？」

「詠春。一人暮らしの女性に家に勝手に入るのは殿方として如何なものかと思うのですが？ 神経を疑わざるを得ません。」

奏が人気のない森の中にある家に戻るとそこには客がいた。
近衛詠春、関西呪術協会の長で昔から世話になっている存在でもある。

「あなたがいつも居留守使うのも悪いんですよ。あなたドアの向こうから穴でのぞいて、私だったら出ないようになっているでしょう。今日はどうしても必要な用事がありましたので無視されても無理に入ったら、本当にいなかったという落ちだっただけです。でもやはり女性の部屋にいない時に勝手に入ったのは悪いと思っています。申し訳ございませんでした。」

「別に見られて困るものが入っているわけではありませんからいいですが…それで今日は何か用なのですか？ 一応、言って置きますけ

ど関西呪術協会の傘下に入るつもりはありませんよ。
寝首をかかれたくはありませんので。詠春には昔からよくしてもらい、とても感謝はしているのですが…。」

詠春には母が生きていた頃からとても厚意にしてもらっており、幼少の頃、父がいなかった奏にとって父親代わりに見ていた時期もあったくらいである。

「奏さん。前々から思っていたのですが、貴方本当に14歳ですか？とてもそうは見えないのですが…」

「今までの人生の内容が少しばかり濃かっただけです。変わらざるを得ない状況になったから変わった、それだけの事です。」

「…そうですか。わかりました。とりあえず今日来た用件の話をしましょう。」

今日ですね、娘、木乃香の護衛を依頼しに来ました。」

「木乃香さんですか。幼少の頃一、二度見たことがあります。母の詠春への用事が終わるまで、彼女ともう一人の女の子と一緒に遊んで待とうとした思い出があります。結局輪に入れませんでした。」

仲のよかった二人を思い出す。

奏もあの中に入って遊びたかったが、ハーフであることがばれるのを当時は過剰に恐れていたので結局母の所用が終わるまで遠くで見ているだけだった。

今は昔と違い、裏の世界で鬼とのハーフである事を自分から進んで話すわけではないが、それでも戦闘になった際、特に隠すような事もしていない。

（贅の血の事は何が何でも隠すよう心がけていますが…）

鬼とのハーフだと知って蔑む人間、恐怖して近寄らなくなる人間、敵になる人間、そういう存在を奏は今は一々気にしない。

友達と呼べる存在なんて現在一人いる程度の奏だが、別にそれだけで十分だと感じていた。

（希望を言えばもっと欲しいですが。）

「一緒にいたのは刹那君でしょう。彼女が今現在、木乃香の護衛をしています。」

「護衛いるじゃないですか。私要らないんじゃないですか？」

「今回貴方に依頼したいのは、木乃香を刹那君と一緒に護衛する事なのですが、私は木乃香の安全だけでなく刹那君の事も心配してるのです。」

彼女は問題を抱えていましたね。彼女の秘密を私が勝手に喋るわけにはいきませんから話す事はできませんが…。

しかし、貴方を護衛にすればそれらの懸念が万事解決する気がする

のです。

木乃香の安全に、刹那君の個人的な問題：それらを解決する切欠になるのは、奏さん、貴方だと私は思うのですよ。」

ずいぶんと自分が期待されていて奏は対応に困る。

詠春の娘の護衛ならばやはり関西呪術協会に属する存在かと思われるが、子供の頃から属しているのなら自分に信を置いてはくれないだろう。

彼らにとって鬼は天敵のような存在だし、鬼は鬼。そういう教え方しかしてないし、そしてそういう考え方しか出来ないだろうと思う。自分の正体を知ったら例え詠春の依頼で護衛に来たといっても、裏切り等を危惧して常に警戒の目を自分に送り、結果木乃香の護衛をスムーズに出来なくなると思われるのだが・・・。

「上手くいくとは思えませんが詠春がそう言うのならいいでしょう。ここで今まで受けた恩を返しておくのも悪くありません。でも報酬はもらいます。」

そして関西呪術協会の組織に加わるというわけではありません。あくまであなたの個人的な依頼を受けるという形でよろしく願います。」

「はい。それでかまいません。」

あと贅の血に関しては気をつけてくださいね。あまりその存在を知られるのは良いことはありません。鬼に多大な力を与えるその血は、人によっては排除しようとするものもいるでしょう。」

「わかっていますよ。今日も誰に召喚されたのかは知りませんが、鬼を送られましたからね。この頬をきったのも鬼によるものです。それに鬼だけというのは間違いです。

母やこれまでの羽藤家の家系では贄の血は、鬼にのみ力を与えていましたが、鬼と人間のハーフである私の中に流れる贄の血は、先代までのそれとは大分異なっているようです。

端的に言えば力を増すのは何も鬼だけではないという事です。

以前魔族に血を吸われてその魔族の力が増しました。

だから少し気になり、裏の仕事で襲ってきた烏族や狗族に血を流して実験したところ、それらの存在も力が増す事がわかりました。

どうやら私の血は鬼だけでなくいわゆる人外、の方たち全てに効力があるようです。

加えると血だけでなく、汗や唾、その他の体液や精気に至るまで血には劣りますが魔力や気、その他の肉体強化などを施します。

それは母のような通常の贄の血を持つ先代までの人たちでもそうでした。」

奏が淡々と実験した事実を詠春に伝え、詠春が驚愕の表情を奏にむけた。

「奏さん…それは…」

「はい。危険性は私が一番知っています。鬼だけでなく烏族や狗族も、もし私の存在を彼らが知ったら拉致してでも捕まえようとするかもしれませんね。

私をレイプでもして血も飲めば、昔母を犯したあの鬼のように鬼神レベルの存在になれるのかもしれないのですから。」

「……14歳の少女がレイプとか言っではいけません。

しかしあの鬼の事は思い出したくないですね。戦闘は終始押しはいましたが、ナギだけでなくみんなそろっている状態だったのにも関わらず、しとめる事ができない存在でもありました。あれから出現情報は一切ありませんが、それでもかの鬼がまだ生きている事は間違いないでしょう。」

詠春が真剣な表情を向けながら奏に言う。

奏はその鬼を恨んではいるが、別にその鬼に母が殺されたわけでもないのに今すぐどうこうしたいという訳ではない。

（まあ相応の報いは必ず私によって受けてもらいますが…）

「英雄と呼ばれている人たち…ですか。彼らでも仕留め切れないほどの力なんて想像したら恐ろしいものがありますね。

まあ、とりあえず詠春に言われなくてもわかっています。血については詠春と一人の友人を除いては喋った事ありませんし、これからも余程の事がない限り他人に話すこともありません。知られる事もないでしょう。」

奏は掛けている首飾りを触る。

大した飾り気もない十字架デザインの銀の首飾りだが、それには血を存在を隠す特殊な力が込められている。

「それで、いつから行けばいいんですか？その学校に。」

「麻帆良学園という所なのだがね、そこ「麻帆良学園ですって!？」
…はい、そうですが?」

「はい、って何故木乃香さんが関東魔法協会の運営する学園に通っているのですか？半分敵地に放り込んでいるようなものじゃないですか?」

(最近関係が急速によくなったという話は聞いた事ありませんが。)

「いえ、義父が関東魔法教会の長でして…色々あるんですよ。ちなみに義父との仲は良好です。」

「……わかりました。私には組織同士の対立は関係ないことですの
で、とりあえず木乃香さんの護衛に専念します。」

木乃香を麻帆良学園に通わせる事でこの義親子は組織の関係改善を図ろうとしているのかもしれないと奏は考える。
奏は向こうの長は見たことないが、立派な魔法使いという存在は今

まで何度も見たことがある。詠春を支える関西の重鎮達も見てきた。そして彼らはどちらも己達が至高としている人たちである。彼らの関係がよくなる事など無いだろうと考えるが、協会の一員でもない自分が詠春に言及していい事でもないと考え何も言わない事にした。

その後1、2時間ほど木乃香や護衛の刹那、学園の事を聞いたりして、奏は来週から麻帆良学園に通う事になった。たったの一人の友人が通っている学園でもあるので少し楽しみにもなってもいた。

（あれが中学生服を着ていることを想像すると笑いが止まりませんが。）

プロローグ（後書き）

初投稿ですので酷い文をお許しください

主人公設定&クロスなど

名前

羽藤奏
はとうかなで

容姿

身長は150センチ程度。

胸が全然ない事が実は結構な悩み。

前髪を眉の付近で一直線に揃えた完全に額を隠した前髪に、長髪を後ろで一つに纏めて垂らすポニーテール

特徴

14歳にしては達観している。

体に流れる血は、贄^{にえ}の血と呼ばれ、人間の体に入っても特に何も効力ないが、本来吸われたりして鬼の体に入ったりするとその鬼は永続的に強大な力を得る。

主人公は鬼と人間のハーフで、そのせいか羽藤家に流れる贄の血の質が変わっている。

相変わらず人間には何の影響を及ぼさないが、純粋な人間でない存

在には、鬼に関わらず力を増すような血になっている。

更には自身の全ての体液や精気も血には遥かに劣るが力を与える（それらは先代までの血と同じ。先代までは鬼限定だが。）

亜人や魔族達は強い意思と理性がないとそれらを本能的に求めてしまう。

血は普段特殊な方法により隠している。隠していないと例え体から流れていなくても亜人や魔族などの人外は本能でそれに感じ取る事が出来る。さらに隠していないと血とは別にある特殊な香も出てしまう。

自分も半分鬼のため血を利用した闘いをする事が出来る。

鬼になると前髪の生え際辺りから2本の10センチ程度の角が生える。

最近血の使いすぎによって摂取した栄養が血液に回されすぎて、大切な場所にいていないのでは？とちょっと疑っている。

詠春にとっても助けられているが何故か呼び捨て。

羽藤家に流れる血の事は関西呪術協会では長の詠春にしか言っていない。

設定のみクロス。

贄の血設定は百合ゲーム「アカイト」から。
バッド含め全てのエンドを見るほど好きだったからクロスしてみました。

アカイトの原作キャラは一切でません。

あくまで名字と贄の血設定を少し持ってきただけです。

主人公設定&クロスなど（後書き）

追記..

アカイトでは贄の血は鬼だけでなく、その他の人間じゃない存在にも力を与えました。が、ここでは通常の贄の血は鬼にだけ効力を発揮するという設定に変えています。

作者の勘違いから…。

01話

現在奏は駅に迎えに来てくれたタカミチ・T・高畑と学園に向かっている。

また少々老けた感じがするタカミチが学校の教鞭をとっている事に少し驚いたが、ここが麻帆良学園ということを考えたらありえないことでもないかと納得することにした。

奏はタカミチとは魔法世界で一緒に仕事をしたことが結構ある。

タカミチはそんなに偏見意識をもつような人でもなく仕事上の関係は良好で、奏は立派な魔法使いは嫌いだがタカミチの事は嫌っていない。

しかしあり方は典型的な立派な魔法使いとは一線を画しているが、それでもやはり堅い考えを持っているようにも感じている。

（あまり深い付き合いはしたくないタイプです。）

「何か今失礼な事思われた気がする。」

「さすがですね。私の心を読み通すなんて、英雄達の従者だったことはあります。」

やはりタカミチは侮れない存在ですね。」

「は、ははは。奏君は相変わらずだね。でも僕はそんな事出来ないよ。出来たとしてもそんな非人道的な事しないよ…する人もいるけど。とりあえずこれからよろしくね。奏君。」

「はい。こちらこそよろしくお願いします。」

それからタカミチの所属するNGO団体の事や、今度傭兵として雇われてくれないか等先生とは思えない依頼をスルーしながら雑談していたら麻帆良学園本校女子中等部にたどりついた。

京都では普通の公立中学校（不登校）だった奏にとって女子中等部はかなり派手に見えた。

（関東魔法協会…ここに通う人たちはやっぱり魔法の素質のある人たちが通っているのでしょうか？私は魔力感知は苦手なので行き交う人たちから何も感じることはできませんが…）

そう考えながらタカミチについていくといつの間にか学園長室まで来ていた。

タカミチがノックをしてドアを開け入室し、奏も後ろから続く。

学園長室も無駄に広いと感じながら奥に座っている学園長を見た。

しかし…そこには見目醜悪な人外がいた。

（ぬかりました。詠春が私を売るとは、さすがに予想外です。この化け物に血を吸わせる計画だったのですね…）

「何か失礼な事考えてないかの？」

「冗談ですよ。私は羽藤奏、この度は学業を修めつつ、木乃香嬢を護衛する為、詠春様に依頼され馳せ参じました。……どうです？ 日本語あってますか？」

「…婿殿からかなりの変わり者とは聞いていたのじゃが、その通りのようじゃの。」

「でも期待に添うようお仕事も学業も頑張ります。まさに文武両道というやつです。武の方ではお孫さん目的で近寄ってくる敵の、血の雨を降らして見せましょう。」

「……………」

「安心してください。詠春から与えられる依頼の実績は成功100%です。自分で取捨選択して簡単のしかしませんが…。」

ちなみに今回は詠春が木乃香さんや刹那さんの事だけでなく、前の中学で不登校だった私の事も案じて、無理やり手続きをしてくれました。とてもやさしい人です。」

「た、高畑くん。わし、この娘を木乃香の護衛にすると、木乃香が変な風に育ちそうで、不安じゃ。」

「命の危険性は感じてないなんて暗に私の実力を認めている発言ですか？ふふっ…後100年は若かったら、もしかしたら惚れやすい私でもクラッとしたかもしれません。」

「か、奏君。そろそろ真剣に話してくれないかな。そろそろ朝のホームルームもはじまってしまおうし。」

タカミチが苦笑しながら奏に喋りかけてくる。

（いけません。真剣な話になると自分の事話すことになるので無意識に逃げていました。友達が増えないわけですね。）

「えーと、失礼しました。私は羽藤奏といいます。詠春に木乃香さんの護衛を依頼されて麻帆良に赴いたのですが、学園長は詠春から私の話を聞いたりしていますか？」

「うむ。有能であると聞いておる。後、鬼と人間とのハーフだという事もじゃ。」

「そうですか、それで学園長はその事についてどう思っているのですか？」

奏からしたらそれこそが重要な事だ。

今回護衛する人の祖父であり関東魔法協会の長、そしてこの学園の学園長という存在がどのような人間か知っておかなければならない。一言一句、顔の表情からも読み取るつもりで学園長を観察する。

「お主が半分鬼だということに関しては特に思うところはない。

例え鬼でも木乃香を全力で守ってくれる存在なら個人的には是非に雇いたいくらいじゃ。じゃがこちらには立場というものもあってな。鬼であるお主がこの麻帆良学園に通い護衛をしている、というのは体裁が非常に悪いのじゃ。

：じゃが婿殿がとても信賴し、是非にと頼んできた存在でもある。」

「まどろっこしいです。」

「できれば鬼というのは他の魔法関係者に隠して木乃香を護衛して欲しいのじゃ。」

「何を言うのかと思ったらそういうことですか。その点に関しては問題ありません。

必要と感じたら力を解放してでも木乃香さんを守りますが、元からはいはいと戦いの度開放するつもりはありません。

タカミチ等はそうでもありませんが、一般的な魔法使いの人たちは鬼とのハーフだと知ると態度が変わりますからね。

私としても学園に通っている間は彼らと円滑な関係を築いていたいと思っています。

そうですね：もしばれることになって学園長が彼らを抑えられなくなったら私を首にしてもらっても結構です。」

「わかった。…すまんの。」

「その言葉だけで十分です。まあ、血のつながりはないとはいえ、学園長が詠春の親だという事は理解できました。」

その後、奏の寮部屋は3人部屋になるとか、学園長と詠春が間違はなく気を使って同居人の一人は同じ護衛の刹那になる事などが話された。

奏は学園長室を出た後、タカミチと3-A組に向かっていた。大人びているような事を詠春に言われているが、それでもやはり緊張している事を奏は自覚していた。

（人付き合い苦手ですから当然ですよ。…上手くやれるといいのですが。）

「高畑先生ー！おはようございますー！」

自己紹介とか何を言えればいいのだろう等と考えていたら後ろからオレンジのツインテールと赤髪の小学生？が走ってきた。近づいて来た二人は奏を完全無視でタカミチと談笑している。裏の世界では人も容赦なく殺す存在でもあるタカミチが普通の学生から慕われているのを見て何だかなと感じる。

（しかしこの子は…）

目の前の赤い子を見る。

（これは魔法使いの杖？）

魔力を感知するのは全然駄目な奏だから目の前の子供が魔法関係者か判断はまだつかないが、この杖は障害者がもつような杖には見えない。目の前の子供に障害もないみたいだ。とりあえず3人のおしゃべりが終わるのを待っていると、赤髪の男の子がこちらに気付く。とりあえず笑っておく事にした。

「あ、あの、あなたは…？」

おずおずと子供が奏に質問してくる。

雑談中奏もずっと先に行かず、ここに留まっていたのだから気にな

るのは当然だろう。

（何で男女別の学校に男の子がいるかわかりませんが、聞かれたのなら答えましょう。）

「私ですか？そのタカミチの娘です。」

「む！むすめええええええええ！？」

目の前の子供に言ったつもりだったが反応したのはオレンジツインテールだった。
オレンジツインテールは奏とタカミチの顔を交互に驚きながら見ている。

（…なるほど。このオレンジさんって…。）

「オレンジさん。オレンジさん。ただの冗句ですよ。掴みは大事に
と思っではっちゃけてしまっただけです。ただの許婚ですよ。」

「い、いいなずけええええええええ！？」

（面白いオレンジさんです。からかいがいがあつてとても好印象です。あっ、膝付きました。これはさすがにやりすぎてしまったようです。フォローしなきゃ。）

慌てた奏はオレンジツインテールに近づき声をかける。

「オレンジさん。ごめんなさい。それも冗談です。本当はただの顔見知りです。」

オレンジツインテールが涙ぐみながら奏を睨みつけてくる。ちよっと怖かったが、奏はオレンジツインテールの耳に顔を近づけタカミチや子供に聞こえない声でささやく。

「オレンジさんはタカミチが大好きなんですね。安心してください。微力ですが私もオレンジさんの恋愛が成就するよう協力します。だから先ほどの事を許してください。お願いします。」

なるべく誠意を込めて先ほどの件を謝罪する。
恋愛未経験の奏にとって先程のオレンジツインテールの反応は少し予想外だった。

「……………神楽坂明日菜。私の名前は神楽坂明日菜。明日菜でいい。」

オレンジツインテールが涙ぐんでいた臉をごしごし拭き、奏に言う。どうやら許してくれるようで奏は安心する。いきなり学園生に嫌われるのは護衛としても良くはないしモチベーションにも影響が出そうだ。

「はい、これからよろしくお願いします。私の名前は羽藤奏といいます。

先ほどは本当にすいませんでした。所詮まだ人に惚れた事もないしおぼこですから、これくらいのなら笑って済ませてもらえるかなと軽い気持ちで言っしまいました。反省しています。」

「お、おぼ…」

「田舎娘。処女。生娘。」

「い、いいわよ！言いかえなくても！」

明日菜が赤面しているのを見てこれからも沢山いじっていこうと奏は決意する。

タカミチの事は裏の事以外何も知らないが、それでも手伝ってやろうとも思った。

「か、奏さんって、もしかして転入生の奏さんですか？」

「はい、そうですよ。今日から3年A組の生徒になります。」

「そうだったんですか。話は聞いています。僕、A組の担任のネギ・スプリングフィールドっていいます。奏さん。これからどうぞよろしく願います。」

「あ、これはご丁寧にも。こちらこそよろしく願いますね。ネギ先生。」

（みよ。このスルー力。明日菜さんも見習ってくださいね。）

そう意味合いを含んだ視線を明日菜に向けてやる。

「奏、一応言っておくけど本当にネギはA組の先生だから。」

明日菜が奏の顔を見ながら言う。

…どうやら本当らしい。

この後、奏は前の学校（ほぼ不登校）のこと等をリア充っぽく嘘話全開で捏造しながら教室に向かった。

何でこの子供が先生をしているのか疑問だったが、多分スプリングフィールドという姓が関係しているのではないかと感じた。

02話

「ごきげんよう！皆様。はじめまして、私本日より皆様と麻帆良学園にて勉学を共にすることになりました羽藤奏と申します。どうぞよろしく願います。」

素だと経験上あんまり友達ができないと感じた奏は教室に向かう数分でキャラを作っと思っています、根がそんなに明るくないため落ち着いた印象のあるお嬢様キャラでいこうと決めたのだが。

（見事に決まりましたわ。これからこの学園ではお嬢様キャラで通しm…っ！！？）

「「「お、お嬢様よ…お嬢様がいるわ。」「」」

「ごめんなさい。嘘つきました。普通の一般中学からの転校生です。これからよろしく願います。」

お嬢様キャラで学園を過ごそうかと思ったが、一番後ろの席に真名がいたので3秒でやめておいた。どうせ口調の件は彼女から質問さ

れる気がした。態々みんなの前で。

（自分から訂正しておいたほうが恥をかかないですみます。）

しかし麻帆良学園に通っているとは本人から聞いていたが同じクラスになるとは思っていなかった。会うのは久しぶりなので少し心が浮ついているのを感じる。

予想通り壊滅的に中学の制服が似合っていない事に笑みが零れる。するとその瞬間彼女が睨んできた。

（あの魔眼はついに思考まで見ることが出来るようになったのでしょうか…）

「え、えっとですね、奏さんは京都の中学校からの転校生です。みなさんも仲良くしてあげてくださいね。」

ネギがあたふたしながらも一生懸命説明してくれている。身の丈以上に頑張っているその姿を応援をする…主に早く席に誘導するようにと。

奏はあまり大人数から一斉に見られるのは慣れていないのでこの状況は正直きつかった。

「それでは皆さん何か奏さんに質問とかありませんかー？」

（ぎゃああああ！やめてくださいよ。そういうの。休み時間とかに

聞きたい人たちには頑張って答えますから態々今全員の前でやらな
いでくださいよ。」

「はいはい♪じゃ私が代表して質問します！報道部だし！
まずその手に持っている長い布は中にやっぱり竹刀が入っているん
ですか？剣道部に所属するんですか？」

やたら胸の大きい活発そうな子が質問してきた。
ちよっと嫉妬しつつもちゃんと答える。

「はい。もちろん竹刀です。剣道を少々嗜んでいまして。剣道部に
入部するかは決めていません。」

（本当は真剣です。ごめんなさい。）

「じゃ…次はスリーサイズを教えてください。」

「∴86. 51. 70です。」

「ダウト！今普通に嘘ついたよね！」

「あれですよ。私は着やせするタイプなんです。そのメモ帳にちゃ

んと86って書いておいてください。」

質問してきた子に無理やりかかせる。

「彼氏はいたりするんですか？」

「処女です。」

「んなっ!!!」

質問してきた子が顔を赤くしている。奏はきつと自分も真っ赤になっ
っているだろうと自覚した。

自分を知っている真名や詠春のような存在にこういう下ネタを言っ
ても恥ずかしくないが、人前という事がこんなにも羞恥を覚えると
は知らなかった。

（二度とすることはないでしょう。）

「し、質問はとりあえず、今はこれだけでいいです。」

自称報道部さんが引き下がっていく。何はともあれ根掘り葉掘り聞
かれずに済んで安心する。

「それでは奏さん。向こうの窓際の開いている席に座ってください。教科書は明日には届くようなのでそれまでは隣の刹那さんから見せてもらってください。」

安心した途端今度は1面ボスの登場に顔には出さないが奏は少し驚く。

木乃香の護衛を問題なく完璧にするには今までの専属護衛だった刹那との関係を良いものにしないと話にならない。
席に着きながら隣の刹那の顔を見る。目が合うと無言で頭を下げてきた。

（うん、すごい睨まれています。当然ですよ。普通新しく護衛が来るなど自分が良い評価をされていないって言われているようなものですし。とりあえず挨拶、挨拶。）

「はじめまして。さっきも自己紹介しましたが、羽藤奏です。教科書が来るまでお手数掛けますがよろしくお願いします。」

言いながら奏は机を横に移動させドッキングする。

「おおお、おい！何を…」

彼女に消極的な態度ではいつまでも関係の改善は望めそうにないと感じた奏は、少々押しを強くして接触していく事を決める。そういうのは苦手な奏だが、これも仕事と自分で自分を納得させて行動に移した。

「いえ、でもこうしないと教科書が見れませんので。」

「い、いや、まだ朝のホームルームじゃないか！」

「せっかくのお隣同士なのだし仲良くしたいのですよ。それとも迷惑でしたか？　そうでしたらごめんなさい。」

奏の言葉に刹那もしぶしぶ納得したようで、今は俯いている。

本当は迷惑に思っているのは知っているが、さすがに来たばかりの転入生に、クラスが注目している場で、迷惑だ！　なんて言える人間はいないだろうと計算しての行動だった。

彼女とはとりあえず早く、少なくとも仕事上の関係だけでも良くならなければいけない：そう思いながら、これからの事を奏は考えた。

刹那 side

お嬢様の護衛が新たに加わると長から連絡を受けたとき、滅多に反論しない刹那だが珍しく長に反発した。自分が護衛として認められていないと言われているような感じがしたから。

（友達にもなれない、護衛にもなれない、それでは私の居場所は…。）

そんな恐怖を感じながら長に自分一人で十分な事を主張したが結局認められなかった。

しかし長は電話を切るとき、

「今も昔もそしてこれからも、刹那君、あなたが木乃香の一番の護衛であると私は思っています。だから私の今回の選択を信じてください。奏さんを護衛に加える事は木乃香の安全だけでなく、きつと貴方にもいい影響を及ぼすと私は確信しています。」

その言葉は刹那にとって涙が出るほど嬉しかった。

後半の言葉の真意は今も判らなく焦りは存在しているが、しかしとりあえず今は長の言葉を信じてみよう、そう思える余裕が刹那には出来た。

そして今、壇上では藤羽奏が朝倉さんの質問に答えている。

が、刹那には質問の内容など頭に入ってこなかった。

刹那は彼女に魅入っていた。

印象は今でも悪いはずの彼女に…さっきから触れたいとさえ思ってしまう自分の感情が理解できなかった。

（！！惚れ葉か？）

先日のネギ先生の惚れ葉事件を思い出す。

お嬢様を巻き込んだ先の一件は子供の先生とはいえ怒りも感じたが、今回もそうなのかと周りを見回す。が他の人たちは葉の影響を受けているようには見えない。いや、エヴァンジェリンさんだけは、ぽけーっと半口開けて彼女を見つめており、隣では従者の茶々丸がエヴァンジェリンを心配そうに見ていた。

真名は無表情で、だがその視線は羽藤奏に向いていて、刹那には一切見向きもしない。

刹那は再度彼女を見る。

そして視界に彼女を収めた瞬間また心臓が高鳴り目を離せなくなった。

彼女は確かに綺麗だ。顔つきも整っていて、長く艶のある髪に整った顔。体つきもスレンダーで誰もがかわいい、もしくは綺麗だと言う容姿だろう。

しかしそれだけだ。初めて会う存在にそれ以上の評価などない、いや、むしろ私だけで十分な護衛なのにしゃしゃり出てきた疎ましい存在だ…

そのはずなのに…何故私はこうも彼女に…彼女を…

「それでは奏さん。向こうの窓際の開いている席に座ってください。教科書は明日には届くようなのでそれまでは隣の刹那さんから見せてもらってください。」

突然名前を呼ばれてハッとなる。

（私の…隣！？）

気づけば羽藤奏は既に刹那の隣の席に移動してきていた。

刹那はどうしていいかわからず、しかしサポートを頼まれた手前無視するわけにもいかず彼女の顔を見て頭を下げる事で何とか挨拶をする。

自分が今どういう顔をしているのか…それすらもわからなかった。

その後も彼女が机をくっつけて来たり話しかけて来るのを、不自然がないように対応したが、彼女の顔を見ることは出来なかった。隣の彼女から漂ってくる体臭でも香水でもない、興奮するのを隠せない、いいようのない香に刹那は隠している翼が勝手に出てきそうになるのをただただ我慢する事しかできなかった。

奏side

ホームルームが終了するとすぐに奏の所に明日菜と黒髪の子が近づいてきた。

顔を見ると呆れたような顔をしていて、すぐに何がいたいのか理解した。

「あんたねえ、あの自己紹介の時みたいな事するのやめたほうがいいわよ！」

近くに寄ってきた明日菜が奏に注意する。

「明日菜さん、それは痛いほど、っというか痛かったです。私が一番痛さについては判りましたので今更蒸し返さないでください。」

呆れている明日菜に言いながら隣の木乃香を見る。

詠春から事前に木乃香の2歳からの成長写真を無理やり見せられていたので見間違いはない。

「明日菜って奏ちゃんと知り合いだったん？」

「ううん。さっきホームルーム前に会ったのよ。その時ちょっとした協力関係を結んだりしたんだけど…」

「ふーん…奏ちゃん。うち近衛木乃香っていいいます。木乃香ってよんでな。これからクラスメイトとしてよろしくな。」

「はい、こちらこそよろしくお願いします。」

「しかしこんなに早く机くっつけているなんて、奏もう刹那さんと仲良くなったの？」

明日菜が刹那と奏をみながら質問してくる。

刹那はさっきから少し震えながらずっと顔を俯けたままだ。

「一方的にアプローチしているだけですよ、明日菜さん。それより少しトイレに行きたいので場所案内してもらっていいですか？」

これ以上刹那の隣にいと、クラスメイトの前で睨まれるだけでなく下手すると罵倒すらされそうなので一端退避する事にする。

（さすがにそこまで疎まれているとは予想外でした。これは少しだけ計画を変更しないといけないかもしれません。）

そう考えながら教室を出ようとしたとき後ろから声をかけられた。

02話（後書き）

きつとあれです…席替えとかあったんです

03話

「明日菜と木乃香は今日日直じゃなかったかい？」

とりあえずここを離れるべく二人に案内をお願いして教室を出ようとしたところで、呼び止めらる。

振り返ると懐かしい存在が立っていた。

龍宮真名。

奏にとってたった一人の友達。出会ってまだ1年と半年程度だが仕事で背中を任せあってきた間柄。

真名が女子中等部に入学する際しばらく会えないからと二人で酒を飲んだらそのまま襲ってきた存在でもある。

（何とか逃げましたけど。）

欲望に忠実で、すぐ銃を突きつけたりもする危険な存在だが、奏がハーフである事をしてもそれまでと関係なく接してくれた気を許せる存在でもあった。彼女も魔族とのハーフだったが。

（また5センチほど身長が伸びたようです。高校生になる頃には2メートルも夢じゃないかもしれません。）

「ねーよ!」

銃を突きつけられた。本当に今も昔も彼女は変わってないようだ。その事に奏は少し安心する。

「では真名、あなたが案内してくれますか？」

「ああ。まかされよう。」

腕を組んで来ようとしてきたが身長差で出来ない事に気づいたようだ。

（残念乙女です。）

と思っていたら肩に手を置かれて引き寄せられた。

「さあ行こうか。」

奏は真名に一年ほど前から狙われている。

彼女は誰の目があるうとも気にすることなく、くっついて来る。昔寝ている間に勝手にキスもされた。

というのは彼女にはあの眼のせいで鬼であることだけでなく血の事も隠せていない。

純粋な人でない存在を惹き付けるこの体質は、首に掛けている首飾

りのお守りによって外から探知できないようになっていたのだが彼女にだけは隠せていない。

とはいえ、彼女は探知できるといっても魔眼で見えるっただけでお守りがちゃんと機能していたら香は漏れないので興奮はしないようだが。

だが真名は既に贄の血の味を知っている。もたらす快楽を知っている。効力も知っている。

（学園長から一緒の部屋と聞いたときは嬉しくもありましたが反面不安も募ります。

真名のことは大好きではあるのですが…。）

本当はトイレに行きたかったわけでもなかったのですが、明日菜と木乃香の二人と別れて教室を出てからは、真名と適当に廊下をぶらつきながら久しぶりの会話を楽しむことにする。

「まさか刹那が言っていた新しく来る護衛ってのが奏だったとはね。麻帆良に来るのなら事前に連絡をくれてもよかっただろうに。」

「ごたごたして忙しかったんですよ。決していきなり来て制服姿の真名を笑ってやろうとかそういう意図は全然ありません。」

「なるほど。」

「久しぶりに会えて嬉しいです。一緒に学園生活をすることになるとは思いませんでしたが、これからよろしくお願いしますね。」

「ああ。それで奏、ちょっと聞きたい事があるのだが。そのお守り、効力はちゃんと今もあるのか？」

真名が奏の首飾りを指差す。

「？まだ力の補充は必要ないと思いますけど、どうかしたんですか？」

「奏も少しは感じたかもしれないけどA組は一風変わったクラスですね。」

中には私と同じ人でない存在もいる。その彼女らがさっき教室で君の事を間抜け面して魅入っていたのが気になってね。

一応私は君と一緒にいる期間が長いから人前でそういう醜態さらすような事はしないが、それでも香は漂っていた。それで大丈夫なのかと思ってね。」

奏は先日の鬼との戦いを思い出す。あの時の鬼も血を舐める前から、奏を食べたいと言っていたような気がする。

「近々お守りの力を補充することにします。それで真名、私を見ていたのはどの方達なのですか？」

（知っておいて損になることはないでしょう。）

「一人は裏に通じる君なら知っていると思うけど、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、真祖の吸血鬼だ。」

まあ、彼女は裏では特に正体を隠していないから教えるけど、他は教えない。人数も教えない。自分で調べてくれ。私も勝手に話して嫌われるのはごめんだ。」

「つれないですね。しかし真祖の吸血鬼ですか。何で死んだと言われている賞金首がこんなところにいるのかは判りませんが、そんな規格外の存在がいたのならさすがの私でも気づくと思うのですが。」

「魔力を封じられているらしい。理由は知らないし、あまり興味もない。」

ただ、気をつけてくれ。相手は吸血鬼。彼女にとって君の血はきつと甘美なものだろう。私でもとても素晴らしいものに感じたのだから。」

思い出しているのだろう、少し頬を染めながら真名がこちらを見て言う。

「も、もう舐めさせませんよ。」

「わかってるさ。何事も無理やりは嫌いなんだ。体も血も時間をかけてじっくりと落とすとするさ。1年も期間があり部屋も一緒なのだから。」

（そういう事は本人のいない所でいってください。）

「それと奏。できたら刹那とは友達になってくれ。」

「……あなたからそんな事いわれるとは本当に驚きです。木乃香さんの護衛の為、彼女とは良好な関係を築こうとはしていましたが、何故あなたがそんな事を？」

「彼女は寮の同居人ってのもあるけど、私の数少ない友人でもある。彼女も私にはある程度心を開いてはいるだろう。しかしそれだけだ。お互いのある程度の事は知っているが共に完全に心の内には入れない。そんな感じの関係だ。」

自分が強いと言いたいわけではないが、彼女は心が弱い。それで今も前に進めないでずっとその場に留まっている。

私では無理だが君だったら彼女に道を示してあげられそうな気がしてね。昔、私も君に救われたのだし。」

詠春と同じような事を真名が言う。

（彼女は何を悩んでいるのでしょうか。）

真名に聞いても答えてはくれないだろう。

彼女は人の秘密を勝手に言うようなことはしない。だから奏にとって真名は今でも大切な友人でもある。

「私は真名に特別何かをした気はないのですが……。それにさっきも言いましたが彼女とは良好な関係を私は望んでいます。それよりも戻りますよ。鐘がそろそろ鳴ります。」

期待の言葉に不慣れは奏は話を打ち切って真名と教室に戻ることにした。

その日の全ての授業で奏は刹那から教科書を見せてもらい、休み時間は少し馴れ馴れしいかと感じながらも色々話しかけてみたが、刹那は適当に相槌を打つだけでこちらの顔も見えてはくれなかった。終いには午後から気分が悪いからと保健室にいつてしまう始末。思わず真名を見ると何故か笑っていてすごい腹が立った。

そして帰りのホームルームが終わり木乃香と明日菜に寮への案内をお願いして、再度接触を計るため、ルームメイトになる刹那も一緒

にと誘おうとした。しかし彼女はホームルームが終わった途端脱兎のごとく逃げていった。

（護衛してください！）

木乃香を見ると刹那が出て行ったドアを見て憂いの表情を浮かべている。

休み時間に木乃香から直接聞いたのだが、刹那に木乃香は避けられているようだ。

詠春から一応その事は聞いていて、これでは全然護衛しているとはいえないんじゃない？ そう思っていたが、寮に向かっていると後ろから視線を感じた。見事に刹那のようだ。

（なるほど…これがあなたの護衛スタイルなんですね。第三者からみたら完全なストーリーカーです。）

話しかけても逃げていくような気がした奏は知らない振りをして三人（十一人）で寮に向かうことにした。

04話

奏は本日の仕事を終了の時間になったので体を伸ばした。

学校と寮の門限の19時までが奏の護衛時間で、19時以降は麻帆良に侵入者が現れたときのみ護衛するのが詠春と交わした契約である。

学園には結界が貼っており、易々とばれずに侵入する事などできず、さらに寮の周りには見回りの魔法関係の先生等もいるらしく、その時間以降は護衛は終了していいという事になっている。

言わばこれからの夜の時間が奏の時間ということになる。

「だというのにまさか一日であなたと二回も顔を会わす事になるとは思いませんでしたよ。嫌がらせでしょう。そうなんでしょう?」

目の前には朝会った妖怪がいる。

本当にこの人は木乃香の祖父なのだろうかと疑問を感じる。

「わしも会いたくなかったわい!しかし是非君にどうしてもお願いしたい事があってのう。」

「何でしょう。こう見えても結構忙しい身ですので早く帰りたいのですが。」

「何か用事があるのかの？」

「いえちょっとゲームで忙しくて。この前ようやくバールを倒したと思ったら、今度はプリニーバールなんてのが現れましてね、こいつがまた強いんですよ！硬すぎ硬すぎw
むっ………何ですか、その目は？悪かったですね。友達いなくて。どうせ趣味はゲームですよ。」

「い、いや、別に哀れんでいるわけではないぞ？ただ女子中学生らしからぬ趣味じゃなと…。」

「何を女子中学生攻略済みみたいな事言っているんですか？学園長は私に警察呼んで欲しくて連絡したんですか？」

「ふぉ！ち、違うぞい。」

「それで用件は何なんですか？」

さっさと帰りたい一心で用件を促す。

「わ、わしの15年になる長い知り合いが君と是非会いたいと申し
てきな。ワシにとってもお主は木乃香の護衛じゃから本当は会わせ
たくなくて、やんわりと断ろうと思ったのじゃが向こうが絶対会わ
せろと聞かなくての。」

「誰ですか？その暇人は。」

「お主のクラスメイトでもあるエヴァンジェ」すいません。今日は
去年までの不登校の間の学力の遅れを取り戻す勉強会がありますの
で、帰らせてください」ふお!？」

冗談じゃなかった。奏にとって今まで会った事なかったが、吸血鬼
という存在は天敵以上の何者でもない。

吸血鬼のような危険な存在を学園に入れないで下さいと言いたかつ
たが、自分も鬼だから何も言えずとりあえず逃げる事にした。

「ま、待つのじゃ。お主を会わせないと色々問題があるのじゃ。」

「それは学園長の問題でしょう。私だって彼女に会うのは大問題が
発生します。命の危機です。」

「い、いや待つのじゃ奏くん。彼女は確かに600万ドルの賞金首でもあるが根はそんなに悪い子じゃないぞい。命の危険なんてないから会ってくれないかの？」

「絶対嫌です！絶対に会いません。死んでも会いません。それでは私は勉強で忙しいので失礼します。」

学園長が後ろで何か言っているが奏は無視して学園長室を飛び出す。贅の血の事を知らない学園長と話しても話は食い違うだけだ。

しかし学園長はエヴァンジェリンに何か弱みを握られているのだろうか。

そんな疑問も生まれたが、一番可愛いのは自分の身である奏はそれ以上は何も考えない事にして学園長室を飛び出した。

近右衛門 side

（奏君に逃げられてしもうた。
気持ちはわからないでもないのじゃが、わしも引くわけにはいかぬ

のじゃ。)

『おいじじい！今日私のクラスに転入してきた羽藤奏という奴がいるだろう。そいつを今日の21時に私の家に連れて来い。』

『奏君がどうかしたのかの？』

『別にどうもしてないし、質問に質問で答えるな！私は連れて来いといっているのだ。もし連れてこなかったら近々ネギ坊やの血を頂くからな。ナギの息子であるあいつの血があれば呪いを解くことができるのだから。それが嫌なら、絶対連れて来い。』

2時間前の一方的な電話を思い出す。

彼女が何故奏君を気にするのかわからないが、長年付き合ってきてわかることは彼女はそうそう殺人などしない娘だということ。

例えば血が目的でも死ぬまで吸う事などないはずだ：呪いを解く事ができるネギ君の血でもない限り。そう考え、近右衛門は結論をだす。

(すまんの。奏君。ネギ君のために500CCほど献血に協力してくれ。

献血してくれたら赤十字マーク入りのボールペンはちゃんとわしが

あげるから。」

近右衛門はエヴァンジェリンに電話を掛けた。

奏side

大人買い。奏は今詠春から前払いされた今月の給料でビックリ○ンチョコの大人買いを実践していた。袋には5000円分のお菓子が入っている。

（レアカード入ってますかね。ふふふ楽しみです。）

「ずいぶんといい笑顔じゃないか。私は勉強で忙しいから会えないとじじいから聞いていたのだが。」

（ジーザス。）

行く手を阻むかのように目の前にはツリ目笑顔の金髪少女と人型ロボットが立っていた。

この人がエヴァンジェリンなのだろう。クラスにもいたような気がする。

さっきから帰り道全然人がいないと思ったら人払いの何かをされていたようだ。

相変わらず魔法関連の技に疎い自分が嫌になる。

「こ、こんばんわ。エヴァンジェリンさん。と、えーと…」

「絡繰茶々丸といいます。羽藤奏様、以後宜しくお願いします。」

「あ、ご丁寧にどうもありがとうございます。ビックリ○ンチョコ食べます？私カードだけとってチョコ要らない派なんですよ。食べ飽きちゃって。」

「いえ、私は最終進化系ガイノイドですので。」

「そ、そうですか。」

（最終進化系って何だろう…。）

「おい。羽藤奏。雑談なんぞしてないでちょっとこっちを向け。」

「な、なんででしょう…？」

エヴァンジェリンが奏の顔をじーっと見つめてくる。
とりあえず全力で逃げる準備はしておく。力はすぐ封じられているようなので先手を取ればそのままの姿でも逃げられるかもしれない。

「お、お前は何者だ？」

その時奏はエヴァンジェリンの顔が赤い事に気付き、そして何故エヴァンゲリンが自分に接触を図って来たのか理解した。

（……ああ、思い出しました。真名が朝言っていましたね。
やはりお守りの効力はなくなりかけているようです。）

何故目をつけられたかわからずにとりあえず会うことを拒否したが、
ようはエヴァンゲリンは奏の血に、奏の体から漏れている香に当てられていただけらしい。

あまり思い出したくないが、真名が奏の体から漏れている香は鼻から入るだけで即ち性的な刺激のような物だと体をくねらせながら言っていた事を思い出す。

出会った当初は暗かったが、それでも知的でクールな印象だった彼女が、どうしてああいう成長してしまったのだろうか…。

（今はそれどころじゃありません。このままだと血を吸われて、もし彼女が嫌悪感を感じない人だったら体も嬲られてしまいそうです。）

「頬が赤いですよエヴァンジェリンさん。もしかしてハーレム計画の為、私が自作して自分で飲んだ惚れ薬に反応しているんですか？」

「ふざけるな！私は600年生きている吸血鬼だぞ。これが惚れ薬かそうじゃないかぐらいわかるわ！お前のはそういうチャチなものじゃない。」

騙せるとは全然思っていなかったが案の定の結果に奏は思わずため息をつく。

「判っているとは思いますが私には魔力なんてものは一般魔法使いの平均以下しかありませんので血を吸っても力など増しませんよ。」

「それもわかっている。だからお前は何者かと聞いているのだ。質問に答えろ！羽藤奏！」

奏は大体の事を理解する。エヴァンジェリンは魔力もそんなにない奏の血をどうして欲しがるのか彼女自身よく判ってなく、言わば6

00年間の知識でもわからない未知の事に少し恐れているだけのようだ。

（さてここで私はどのような行動を取ればいいのでしょうか。まあとりあえず血を飲まれたりしたらゲームオーバーですよね。死ななくても一生吸血タンク従者をさせられてしまいそうです。）

正直に贄の血の事を答えても興味を惹かれて結果血を吸われるだけだろうし、やはり正解は全力で逃げてさっさとお守りの力を補充して体から漏れる血の匂いと香をなくす事だと結論を出す。

（そして後は知らん振りを決め込む…と。）

「あ！あんな所に。エヴァ（略）さんの意中の人が！」

「な、なんだとっ！！？」

エヴァンジェリンさんが指差したほうをきよろきよろ見ているうちに回れ右して全力で逃げ出す。

引っかかるとは思わなかったが、今は気にせず走る。一応転移魔法符は持っていたが高いので使わずに済んで安心する。

しかし騙されなかった茶々丸がまったく追いかけてこなかったのが

気になった。

エヴァンジェリン side

「マスター、追いかけていいのですか？」

不覚にも引っかかってしまったエヴァに茶々丸が問いかけてくる。
少し馬鹿にしたように笑っているような気がするのは気のせいだろうか。

「別にいい。あいつは木乃香の護衛だからな。麻帆良の外にはあいつも逃げられない。時間もある。茶々丸。二日程時間をやるから羽藤奏について徹底的に調べろ。」

「合点承知の助。」

「……」

じじいから木乃香の護衛とだけ聞いていたが、それだけではないとエヴァは考える。

羽藤奏が側にいるだけで基本的に血を必要としない自分が抑えるのを困難な吸血衝動を起こし、さらには彼女を襲いたくもなった…。

（くそっ！私の体に何が起こっているんだ！？）

羽藤奏には何かがある。本人が説明を拒み逃げた事が何よりの証拠である。

魔力量が普通だったから血を吸っても呪いが解けるといふ事はないだろう。

が、そのまま無視していいことではない。

（とりあえず、じじいは羽藤奏を私の家に連れてこなかったから、約束は無しだ。近く解呪の鍵であるネギ坊やも襲わせてもらおう。）

「アッハッハッハッ！」

「マスター。突然大声で笑わないでください。かわいいそうな子にみえます。」

そういいながら茶々丸が周りの目を気にして？少し離れる。

先日事故で車に轢かれてから茶々丸が少しおかしくなっている気がする。何か偶に変な言葉使う上に、時折自分を小ばかにしているような感じがする。それに普通周りの目を気にするガイノイドなんていない。

（それに今茶々丸も周りに人がいないことくらい知っているはずなのだが…。やっぱり馬鹿にされているんじゃない…）

メンテが必要かもしれないと考えながらエヴァは家に戻ることにした。

04話（後書き）

作中の西暦ではまだそのゲーム出てないよね？とかそういうツツコミはスルーで。ただのノリです。

感想ありがとうございます。とても励みになります。

05話

奏がエヴァンジェリンから逃げて寮に戻って来ると入り口付近には刀を所持した刹那がいた。どうやら木乃香を避けている刹那は、就寝時間までをここで不審者が寮に侵入しないよう警備しているようだ。

刹那に近づいていくと彼女もこちらに気付き驚きの表情を向けた。一瞬目が合うが、しかしすぐにそらされる。

「こんばんわ。刹那さん」

「……（ぺこり）」

相変わらずの反応にため息が漏れる。お辞儀はしてくれるのだが口は開かないし目もあわせてくれない。

「なんと！後ろに木乃香さん！」

「ふえ？」

（みんなよく騙されますね。もしかして私の演技力は大したものなのかも知れません。）

間抜け声を出して後ろを見る刹那の横っ腹を両側から指で突いてみる。

「きゃん！…な、な何をする！」

とてもかわいい声だった。

もっと遊びたいとも奏は思ったが…、

「ようやく私を見ましたね。刹那さん。まあさっきも一瞬だけ目は合いました。」

刹那が再び奏から顔をそらす。

「そんな露骨に避けないください。確かに私は刹那さんにとっては邪魔な存在かもしれませんが、仕事を請け負った以上、木乃香さんの安全を守りたいという気持ちはちゃんとあります。木乃香さんを守るため協力して事にあたりませんか？」

「あ、ああ。」

刹那が俯いて顔を合わそうとはしないながらも、承諾の返事をくれた。

進展ありと考えてもいいだろうと奏は自分で自分を褒める。

「そうですか。ありがとうございます。それでは握手しましょう。握手。」

奏は刹那に近づき彼女の手を勝手に取り握手する。

（ん？汗？）

じつとりとした感触が手に伝わる。どうやら刹那は何か緊張しているようだ。

いや、それだけでなく息遣いも…少々荒い？

「ど、どうかしたのですか？刹那さん。熱でもあるのでしたら私が夜の警護変わりますか？」

馴れ馴れしいかとも思ったが、俯いている顔をゆっくりと上げておでこを触ってみる。

（熱くはないが何かおかしいですね。それに私を見る目…これでは…先ほどの…）

先の吸血鬼を思い出す。今の刹那の表情は少し前に会ったエヴァンジェリンが見せた表情を彷彿とさせた。

奏がその時の事を思い帰していると刹那が、持っている刀を放して奏の顔を両手で力強く掴み、奏の唇に刹那の唇を押し付けてきた。

勢いのある強引な押し付けで唇の裏が自分の歯で少し切れる。

しかし奏が痛いと思う間もなく、刹那の舌が奏の口を無理やり割って入り傷口をなぞってくる。

「っ！ん、んん！」

奏は思わず密着している刹那の体を思いつきり押す。

「はあ…はあ…。何をするんですか！あなたは！」

（べ、べろちゅーです。初めてのべろちゅーです。な、何で彼女は突然こんなことを、…えっ…？）

奏に突き飛ばされて力が出ないのかへたり込んだ刹那を見る。

両手を地に付け今も息荒く俯いている彼女だが、その背中からは制

服を突き破って白い翼が発現していた。
鳥族の黒い羽とは違う今まで見たことない綺麗な純白の翼。

（彼女は…）

「刹那さん…あなたは、人間ではなかったのですか…？」

奏の言葉に今まで自分からは決して目を合わそうとしなかった刹那が奏に驚愕の表情を向ける。

そしてこちらを見ながらも羽を少し動かし翼が出ている事を自分でも認識したのだろう、その表情がみるみる内に青ざめていく。

そして次の瞬間、刹那が翼を収め刀を手に取りその場から全力で逃げようとした。

これは逃がしたら絶対にいけない！と瞬時に判断した奏は逃げようとする刹那の片手を思いつき掴む。

「は、離して！！触らないで！」

「落ち着いて！落ち着いてください、刹那さん！まずはこっちを見て下さい！」

「嫌やあ！お願いだから離してよう！！！」

刹那が全力で逃げようとする。

見てもらわないと意味がないと覚った奏は既に身体能力が人間の数倍になっている力で、逃げようとする刹那の腕を思いっきり引っ張って近づけさせ、今度は奏が刹那の顔を両手で掴んで自分の顔を無理やり見せつけた。

刹那の涙を溜めた目が奏の顔を捉える。

そして彼女は奏の顔を見て間拔けな声をだした。

「いいですか、刹那さん。私も純粹に人間ではありません。鬼とのハーフです。

だから別にあなたが人間じゃなくても特にどうとは思いませんし、誰かに言ったりもしません。だから落ち着いてください。

……続きは部屋でお話しましょう。運良く私たちのやり取りは誰にも見られなかったみたいですが、ここで話す様な事ではありません。

」

周りを再度確認して誰もいないと判断して安心した奏は角をすぐに戻し、状況に付いて行けなく、そして逃げる事も忘れた刹那の手を取りそのまま半分引っ張っていく形で寮の自室に向かった。

茶葉のジャンピングが終わったティーポットの紅茶を奏はカップに注ぐ。

お菓子が何もないので、仕様がなからビックリ○ンチョコを1／4カットにして皿にのせる。

（一口サイズにしたら少しはおいしそうに見えるものですね…）

そして奏は紅茶とお菓子を持ってベッドで座ってこっちをチラチラと見ている刹那の下へ向かい近くのテーブルに置きその場に座った。

「さて、何を…何から話しましょうか？お互いに。」

おろおろしていて落ち着かない刹那に視線を向ける。

「あ、あの…うち…」

「なるほど。素は京都弁なんですね。いいですよ、演じる事を忘れているくらい緊張しているのですしたら私が喋りますので刹那さんは私の答えられる質問にだけ答えてください。

気になることがあったら逆に質問してください。」

しばらくすると刹那がこくりと頷く。

「私は羽藤奏。人間と鬼のハーフです。この事は、学園では真名と学園長と高畑さんだけ知っています。もちろん今回の依頼主の詠春も知っています。詠春は私がハーフと知っていて依頼をお願いしてきました。」

刹那さん。今度はあなたの種族を聞いてもいいですか？」

「うち、私は、人間と…烏族のハーフです。」

「烏族とのハーフだったのですか。木乃香さんは刹那さんがハーフだという事は？」

「私がハーフだという事はお嬢様は知りません。」

「詠春が刹那さんと木乃香さんの関係が上手くいってないといっていました。がやはり問題はこの件なのでしょうか？」

「お嬢様は今も昔も変わらない！…ただ、私が避けているだけ…だ。」

奏は話を聞いて何故詠春が自分に期待したのか理解した。刹那は過去の奏そのものだったのだ。自分が人間じゃない事を知られるのを

恐れているのだ。奏は今ではそういう事に慣れているが…。
確かに真名が言っていた通り彼女は心が弱いのかもと考える。

（いえ：刹那さんにとって木乃香さんという人はそれほどの存在、
ということなのでしょうか？）

真名とは仕事で組んだりして大切な友人だが、基本的に一人で生きてきた奏には刹那の心情は完全には理解できなかった。

（しかし…）

「刹那さん。あなたのこの問題は時間を無駄に使ってもいいことなんてありません。

お互いの心の距離もどんどん離れて行きその間、よりつらい時間を過ごすだけの事です。

刹那さんの気持ちは完全には理解できませんが、それでもある程度はわかっているつもりです。私だって鬼とのハーフで結構人から蔑みの目を向けられたりしました、命だって狙われました。というより今も狙われています。

私には刹那さんにとっての木乃香さんのような結びつきの強い人、命に代えても守りたい人などはいません。真名は大切な友達ですけどそういうものとは少し違いますし。

あっ、付け足しておきますが、仕事ですので木乃香さんの事は命に代えても守るつもりですよ？守りますけど、それでも私の場合はあくまで仕事なんですよ。

そういう人ができたら私だってきっと色々刹那さんのように葛藤す

るでしょう。

でも今は第三者だから冷静になって言えます。

この刹那さんの問題は時間をかければ受け入れられる可能性が少しあがるのかそういう問題じゃありません。

寧ろ避けられ続けて心が離れたら昔のような友達関係に戻れない可能性だってあるのです。

なるべく早く木乃香さんに打ち明けるべきです。昔のような関係を望んでいるのならば。」

「し、しかし私は…」

「刹那さん、あなたは何を望んでいるのですか？彼女を護衛することですか？昔のような友達関係に戻ることですか？…それとも昔のように友達でありながらも彼女を守り続けることですか？」

「…私は、お嬢様を、木乃香お嬢様を守りたい。…でも守りながらもずっと友達として側にいたい。」

そして…そして秘密を受け入れてもらいたい。」

「そうですか。だったら告白しましょう、刹那さんが人でない事を。詠春から魔法の存在などを隠す事は言われていますが別に人じゃない存在がいることを話すくらいは多分いいでしょう。詠春は木乃香さんと刹那さんが昔のような関係に戻るのを望んでいますし。」

「で、でも私は…」

「安心してください。ようは木乃香さんに拒否されるのが刹那さんは怖いのでしょうか？」

「だったら一緒に話し合いの場を設けて、まずは私が鬼の角を見せましょう。」

「まだ出会ったばかりの私を彼女が受け入れたのなら、長年の付き合いである刹那さんを受け入れない理由はないでしょう？」

「奏さんが…先に見せる？」

「初めて名前を呼んでくれましたね。」

刹那の顔が若干赤くなる。

「い、いや、しかし…」

「もう！いい加減にして下さいこのヘタレ！

「今度は木乃香さんの人間としての器量を見ってしまうのが怖いだなんて言わないでくださいよ？私がまず言うんです。あなたは黙ってついてきて見ていなさい。」

「は、はい！」

いつまでも恐れる彼女を無理やり納得させる。
朝のホームルームの時は睨みつけてきたが元々気の強い存在ではないようだ。

（まあでもこの問題は多分もう解決でしょう。）

奏はそう結論付ける。

人を観察するのは慣れているつもりで奏は、短い付き合いだが木乃香が子供の頃からの付き合いである刹那をたかが羽が生えている程度で拒否することはないと判断していた。

（それに…）

木乃香はやっぱり詠春の娘だと奏は感じていた。とても育て方を失敗しているようには見えなかった。

関西呪術協会の連中を知っている奏は、組織の長の娘としてちやほやされて育てられたら、例え魔法や人外が存在をしらなくても他人をすぐ馬鹿にするような失敗作ができあがりそうなものと考えてるが、木乃香からそういったものはまったく感じられなかった。

木乃香は今日会ったばかりの自分も受け入れるだろうと奏は確信していた。

（だから、この問題は解決です。そして、ここからは私の問題です。）

「それで刹那さん。今私が側にいてあなたは私にまだ欲情していますか？」

05話（後書き）

超展開

06話（前書き）

会話の続きです。

今思うと変な切り方、分け方をしたかもしれません。

06話

「：は、はい？」

「唐突過ぎて理解できなかったようですね。

刹那さんさっき私にキスしてきたでしょう？あの時刹那さんがそういう衝動を抑えられずにしてしまったのはわかっています。

あの事は気にしないで結構です。刹那さんがあんなったのは私に原因があります。刹那さんは正常で何も悪くありません。むしろ謝るのは私のほうです。

：それで今はどうですか？私を見ているとさっきのような行為をしてしまいそうになりますか？」

刹那に質問する。

刹那はあまりの質問にしばらく戸惑っていたが、奏が真剣な事を覚ると、奏を数秒みて答える。

「さっきほどではないですけど……見ていると体が熱くなる感じがします。」

（あっ、噛んだ。）

「そうですか…」

とりあえずテーブルのお菓子を食べながらどうするべきか考える。

「…奏さん。質問してもいいですか？」

（そうですね。気になりますよねやっぱり。）

口の中がお菓子で一杯なためジェスチャーで促す。

「私は何でその…奏さんにこ、興奮してしまったのでしょうか？
奏さんが鬼とのハーフであるのに関係しているのでしょうか？」

アールグレイを一気飲みしてお菓子を無理やり落とす。

私は紅茶入れれるの！凄いでしょ。っていう自分に酔いたいだけで
奏は紅茶自体は実は全然好きじゃなかったりする。

「鬼であることも少しは関係してきます。このことを私はあんまり
話したくないですし、詠春にもあまり他人に話すなといわれていま
す。」

ですが被害者であり、木乃香さんを共に守るパートナーであり、多少似たような生い立ちの刹那さんが聞きたいと思っていて、さらには口外を絶対しないと誓えるのなら私は刹那さんを信用してお話します。

どうします？聞きますか？」

沈黙が部屋を包む。

奏はできれば血の事は言いたくはなかった。

しかし刹那にはもう言わなければならぬとも思っていた。キスの件で被害者にしてしまったというのもあるが、向こうの事情を全て把握しこちらが積極的に手伝う事を申し出たのに、こちらの秘密は全ては話さないと言うのは公平性に欠けると感じた。

（そんな存在を誰が信じるというのでしょうか…）

そして刹那が少し迷ったあと、こくりと頷いたので奏も覚悟を決めて秘密を明かすことにした。

「そうですねか……まず刹那さんが欲情してしまったのは私の体質に問題があります。

私たちの家系には特殊な血、『贅の血』というものが流れています。が、これは鬼にとったら力を底上げする上等な血です。

本来は鬼だけが力を増すもので天敵の存在は鬼だけでしたが、母が鬼に犯されて生まれた私は、その血と体質が変化していました。

簡単に言えば血は鬼だけでなくその他の人外、亜人と呼ばれている人たちの大好物にかわっていて、さらに特殊な力で抑えていないと血の存在がばれるだけでなく、体から彼らを興奮させる香も撒き散

らしてしまいます。多分血が元となり香を漂わせてしまうのでしょう。詳しい事はわかりませんが。

さらに言えば、汗やその他の体液や精気も血ほどではありませんが、全て人外の人たちにとっての力の源となります。

実際私の母を犯した鬼は、その時に血も精気も吸い強大な力を手に入れた聞きます。

いつもはお守りの力で血を隠し、そして香が出るのを抑えているのですが…今回効力が薄れていたのを気づかず転校してきて、今の結果です。本当に申し訳ありませんでした。」

「い、いえ、大丈夫です。私もそんなに気にしていません。」

「べろちゅーしてしまったのに気にしていないんですか？」

「べ、べろちゅーって言わないで!!」

どうやら刹那は許してくれるようで奏は安心する。

彼女は自分がハーフであることを疎ましく思っているようにも感じるので、烏族としての本能が理性を上回りそういう行為に及んでしまったという理由を知るとへこんでしまうと感じなくなかったのだが、そういう感じはなさそうだ。

「そろそろ木乃香さんをこの部屋に呼びましょうか。」

「え！きよ、今日言うんですか？」

「だからいったでしょう。先延ばしはいけない問題だって。決めた直後に即行動です。」

大丈夫ですよ。きっと上手くなります。

今だからこそ言いますけど私は詠春から、あなたの個人的な問題も手助けして欲しいって言われていたんですよ？あの時はあなたの悩みはわかりませんでした…。

私を信じてください。そして私を送った詠春を信じてあげてください。そして何より木乃香さんを信じてください。ほら、呼びにきますよ。」

奏の差し伸べた手をおずおずと刹那が掴む。奏と刹那はそこからは互いに無言のまま木乃香の部屋に向かった。



「こんこん！木乃香さんいますか？」

部屋を開けると中では木乃香は明日菜と子供先生の3人でトランプをしていた。

「奏ー、コンコン口で言ってもそのまま部屋に勝手に入ってくるのはいーk、…せっちゃん！！？」

木乃香が刹那を見てかなり驚いている。普段一切刹那は木乃香の部屋に来ていないようだ。

「木乃香さん。少しばかり時間を貰ってもいいですか？私たちの部屋で刹那さんを交えて三者面談したいのですが。」

「せ、せっちゃんも！？うん。時間あるでちょっと待っててな。明日菜、ネギ君ごめんな。ちょっと抜けるわ。あと奏、言葉の使い方間違っとするで。」

木乃香の準備を部屋の外で待って、出てきた木乃香と3人で部屋に向かう。

途中、二人が互いをチラチラと見合っていたが、もう何か言うのも面倒くさいのでちやかすのも奏はスルーした。

「あ、チヨコどうぞ。」

部屋につき木乃香を招きいれ、テーブル周りに座らせる。

刹那がさっき全然食べてくれなかったので木乃香にも一応誰も食べないお菓子を勧めておくことにする。

（おお！さすが木乃香さん。ぽりぽり食べてくれます。ハムスターみたいです。これから残りの90個あまりも全部彼女にあげましょう。）

「それで話って何なん？」

お菓子で口をもぐもぐしながら奏と刹那の顔を交互に見て木乃香が言う。

奏はこういう風に切り出そうかと一瞬考えたが特にいい案も出ないため、もう直球で行くことにした。

「そうですね…木乃香さんってこういうのどう思います？」

言い終わって二本の角を出す。

木乃香が奏をみて固まる。とりあえず奏は一端引っ込めて再度角を出した。

(…気持ち悪さ全開です。)

「こ、これって角なん？」

「はい。間違いなく角ですよ。信じられないかもしれませんがこの世には鬼という生き物が存在していて私は鬼と人間のハーフなんです。

…：気持ち悪いって思いますか？出し戻したときは自分でも気持ち悪いと思いましたが、木乃香さんまでにまでそう思われたら私、もしかしたら死ぬかもしれません←」

木乃香が優しい人間と知ってはいるが、ついいつもの癖で卑怯な手も使ってしまう。

「う、ううん！気持ち悪いなんて思わへん！ちょっとビックリしただけや。」

(まあ予想通りです。後は刹那さんの告白で終了でs)

「ひゃん！」

「やっぱり見た目通り硬いんやな。角って。」

「か、勝手に触らないでください！弱いんです！そこ。」

突然木乃香の指の腹で角を撫でられた。

とりあえず目で刹那に早く告白してくださいと合図を送り奏は木乃香から離れる。

（ああ：力ができません。相変わらず角は弱いようです、私。）

「お嬢様、あの、私は、私は…私も…」

刹那が頑張って言葉を紡ごうとするが言い淀む。長年隠してきた事だからそう簡単に言える事でもないのだろう。

しかし木乃香も刹那の真剣な顔に言葉を遮ろうとせず、刹那に近寄ってその手を優しく握り言葉を待つ。

木乃香に手を握られた刹那は目を閉じて深呼吸し、そして背中から隠していた翼を発現させた。

（制服に続いて私服も突き破りました：服余裕あるのでしょうか…）

「お嬢様：私も奏さんと同じで鳥族って種族と人間のハーフなんです。今まで隠してきてすいませんでした。」

刹那が頭を下げる。そして頭を上げようとせず木乃香の反応を待つ。
木乃香の顔を見るのが怖いのもかもしれない。
でも木乃香は声こそ出さないが微笑んでいる…涙を溜めながら。

「……………そうなんや…。うん。言ってくれてありがとうな。うち、
せっちちゃんの事全然怖くないし、気持ち悪いとも思わへんで。そう
やな、天使みたいや。」

木乃香が言いながら刹那の顔をあげ抱きしめる。

刹那は突然抱きしめられ、そして固まった頭でようやく言葉を理解
してからぽろぽろ泣き始め、木乃香もつられて泣き出し始めた。

奏は部屋を出ていた方がいいのかと一瞬迷ったが面倒くさいので却
下する事にした。



まあよく持った方だろうと思いつつながら30分後、奏はいい加減二人
の間に割り込む事にした。二人はハグタイムを終わらせて今度はぎ
こちない雑談タイムに突入していた。

奏は刹那の後ろにこっそりまわり純白な翼を軽く擦ってみる。

「ぎゃああー!!」

「やっぱり刹那さんも翼は性感帯みたいですわね。まあそれはどうでもいいですけど、そろそろお開きです。木乃香さんも部屋にお帰りになってください。」

「えー！もうちょっと！もうちょっとおしゃべりさせて。久しぶりのまともな会話なんや。」

「明日から毎日おしゃべりすればいいじゃないですか。もうそろそろ消灯時間になっちゃいますよ。」

「奏はいけずやな。わかった。今日はもう帰ることにするわ。
：しかし今日はここ数年で一番幸せな日だったわ。ありがとうな。
奏。」

奏が先に角の事告白してくれなかったら多分今日のせっちゃんの告白はなかったはずや。せっちゃんへタレやから。」

「こ、このちゃん！」

「さすが長い付き合いなだけありますね。私も説得に苦労しました。いつまでもナメクジみたいにいじいじしていてもうね。」

「か、奏さんも！」

「あはははは。せっちゃんのような顔見るの本当に久しぶりやわ。最近はいつもクールで無表情な顔しか向けてこなかったからな。じゃ、帰るわ。また明日な、二人とも。」

木乃香が部屋を出て行こうとドアを開ける。

「ほら、刹那さん。何やっているんですか？部屋まで送っていただきます。」

「え？」

「いや、ですからあなたももう少し木乃香さんとお話したいんですよ？顔に出ていますよ。お送りしながらあと少し楽しんで来て下さい。」

「あ、ありがとうございます。奏さん：

あ、あと、これからは一緒に護衛、宜しくお願いします。」

刹那がこちらに礼をして微笑みかける。涙を流しすぎたのだろう、目は真っ赤だった。頬も少し赤い。初めて彼女から笑いかけられた奏はその綺麗な顔に少し見惚れた。

（男だったら勘違いしたかもしれません。：まあ最近バイの気はあるって自覚してきましたが…）

真名に好意を全力で寄せられても全然嫌悪感を感じなく寧ろ少し嬉しい気がする。ことから奏は自身の少し偏った性癖を大体理解していた。

「はい。宜しくこちらもお願ひします。それより早く行ってください。木乃香さん部屋に着いてしまいますよ。」

奏が促すと刹那は、

「はい！」

と元気よく返事をし、先に戻った木乃香を追いかけていった。

06話（後書き）

いえ、刹那はヒロインですよ？

厳密に言えば奏ですが…。

刹那の問題が転校初日で終わっちゃいました（汗）

次の更新は遅くて明後日になります。

ここまで読んでくれてありがとうございます。

07話

十数分後、木乃香を見送りに行った刹那が部屋に戻ってきた。

見送りの際また泣いたのだろうか、目には涙を溜め赤い。

部屋に戻った刹那を座らせてお湯を沸かしもう一度紅茶をいれ、奏も刹那の近くに座る。

「奏さん…本当に…本当に、ありがとうございました。」

声は枯れていて、喋りながらまた泣き出す。

刹那にとって木乃香というのは、本当に大切な存在で、木乃香という存在そのものが彼女のアイデンティティにさえなっていたのかもしれないと奏は思う。

自分にもいつかこのようにお互いを大切に思い合える存在が出来るだろうかと思像する。

真名とこれから長く付き合きあっていたらもっと繋がりが深まるのだろうか…そんな事を考えていると刹那がこちらを見ていた。

「刹那さん。どうかしました？」

出来るだけ優しく声をかける。
まだ泣きたいのなら嬉し涙なのだし、もっと泣かせてやればいいだろう。

（ふふふ、苛めっ子みたい。）

頭をなでなでしてみる。

「っ／＼／＼」

「てい！っ／＼／＼」

「えっ！？どうしたんですか？」

「いえ、三点スラッシュは邪道と昔誰かが言っていましたので思わず傾きを逆にしてしまいました。」

「???」

「忘れてください。意味などありませんので。」

（赤面している顔がとてもかわいかったから少し逃避してしまいました。）

「それで？どうかしたんですか？もうお礼の言葉は正直聞き飽きましたよ。刹那さんと木乃香さんの仲が戻ったのは私としてもとても

うれしい事です。

ですが、私は別に純粋な善意からああいう行動をしたわけではないのですよ？

刹那さんと木乃香さんの関係、そして私と刹那さんの関係、それらがぎくしゃくしていると木乃香さんの護衛に支障をきたすと判断したので手助けしようと思ったのもあります。

いえ、寧ろそういう打算的な理由が大きかった気がします。だから何度もお礼を言わないでください。気分が沈みます。」

「そうかもしれません。でも…奏さんの他人に知られるとまずい秘密までも話してくれたのは、その、嬉しかったですから…。」

「そ、そうですか。」

奏は少しおかしな空気に戸惑う。

奏の顔を刹那が顔を火照らしてじーつと見つめて来る。

(まさか…)

「刹那さん…もしかしてまた当てられました？」

「わかりません…けど…そうかもしれません。奏さんをみているとドキドキして体がとても熱くて…何か少し気持ちいい感じもします。」

「べ、べろちゅーは嫌ですよ。ちょっと待っていてください。」

とりあえず、台所に行く。

包丁はちよつと怖いので果物ナイフを取り出して少し人差し指の先を切り、刹那のところに戻る。

このままだと刹那は眠れない夜を過ごすことになりそうだし、襲われそうでこちらも寝れそうにない。ぽーっとこちらを見ている刹那に切れて少し血の出た人差し指を見せる。

「吸血鬼じゃなくてもおいしく感じると思いますよ。舐めてみます？」

「え、ええ？ そんなこと…」

「大丈夫ですよ。もう秘密はばれているんだし血を少し吸われる事くらい抵抗はありません。昔真名にも指から吸われたこともありま

すので遠慮しないで舐めていいですよ。

真名が言うにはとても甘美でこの世の至高だそうです。

多分半分鳥族の刹那さんもそう感じるかもしれません。美味しくな

かったらごめんなさい。」

座っている刹那の口元に指を近づける。

刹那は少し渋る仕草するがその目は一切差し出された指からそらすことなく説得力はない。

さらに奏は指を近づけてあげる。

刹那は一瞬奏の顔を見た後、舌を少し出しおずおずと傷口を舐めた。傷口に感じる熱い感触に反射的に少し手を引いてしまうが、彼女の口も追ってきて舐める。手首を刹那に手により握られて、どうやら彼女は少し舐めただけでもう我を忘れてしまったようだ。

「…ちゅっ…れる…」

息遣いも荒く鼻で息をしており、舌が忙しく動く。ふと気づくとまた翼が私服を突き破っていた。

（本日3着目です。刹那さんは今まで本当に翼隠し通せてきたのでしょうか？ 緩い印象しかもてないのですが…。）

そんな事を考えていると指が刹那の口に含まれた。傷口に舌を添えられ吸われ少し嫌らしい音が部屋に響く。奏は刹那の少し口を窄めて血を吸っている姿を見ると少し変な気持ちになり、目をそこから離しとりあえず目の前にある翼を触る。

「んん！！ちゅ…れる…」

（ああ、そういえば性感帯なの忘れていました。でも口は離さないんですね。）

翼を触るのをすぐにやめる。

刹那が今度は少し指に歯を立て、圧迫させて傷口から血を出して舐めてくる。

噛んで吸われて舐められて…奏は自分が人知れず少し興奮しているのを感じた。



5分ほどした後、ようやく刹那の口から指が離れる。

人差し指だけお風呂に入ったかのように萎れ、傷跡はうっすら見えるがそこに赤はなく綺麗に舐め取られている。

「おいしかったですか？」

「そ、そういう事は言わないでください！」

「でもようやく落ち着いたみたいです。あのままでは眠れないだろうと思って血を吸わせたのですが良かったです。」

「ご、ごめんなさい。気を使ってもらって。」

「別にいいですよ。それに刹那さんが私に興奮するのは今日までですよ。」

エヴァンジェリンさんに狙われる前に、明日はお守りの力を補充します。ですので午前中は学校を休みますが、明日からは私に欲情する事はなくなると思います。だから安心してください。」

そういうと刹那が何かいいたそうにこちらを見ている。

「何でしょう？」

「ま、また舐めさせてもらってもいいですか？」

その言葉に奏は少し驚いた。彼女は例え舐めたくてもそういう事を口に出すタイプではないと思ってから…。

（少しは素直に生きる事にしたのかもしれませんがね。）

「別にいいですよ。貧血になる程度まで飲ませはしませんが、私の血を舐めると力が増すはずですから木乃香さんを守るという意味でもいいかもしれません。今はどうですか？何か力が漲って来る感じとかしますか？」

「はい。体がすごく軽く感じますし、動かしたくてうずうずします。舐めなかったら眠れなかったかもしれませんが、今も何か眠れそうにありません。」

刹那が苦笑いする。

「そうですね…学園長に連絡して、少し離れの森くらいで汗を流しましょうか？」

奏の提案に刹那も喜んで承諾してくれたので、その日は日にちが変わるまで刹那と剣を交えた。奏は自分の贅の血を使った戦いも刹那に見せてあげた。

血を舐めた刹那だが近場の森で京都神鳴流の奥義『斬岩剣』を試したところ、気が無駄に膨張して幅半径2メートル深さ1メートル程度のクレーターが出来て、当の刹那もぽかーんとしていた。

斬岩剣は本来岩を斬るほどの鋭い一閃による斬撃、だが今回気の制御を失敗して地にクレーターを作ってしまった。本来の刹那でもやろうと思えばもしかしたらできる一撃かもしれないが、そのような気の使い方をするとすぐに底を尽きるだろう。

しかし今の刹那を見ても疲労感のような物はみえない。気が増えているようだ。

1時間ほど鍛錬していると一々の技や動きは最初と比べると遅くなり威力もなくなったが、聞くとこれが普段の自分の力だとのこと。いや、それでも少しだけ威力や切れは前よりあるらしい。

それらの事から奏はある予測を立てた。

それは自分の血は鬼には飲んだだけ永続的で爆発的な力を与えるがそれ以外の存在には、一時的に膨大な力を得るがしばらくすると戻るという事。しかし完全に元に戻るわけではなく、少しだけ底上げされた状態で戻るらしい。

その予測を刹那に話したら毎日血を吸わせてくださいと言われた。強さに貪欲で素晴らしい心がけだと思ったが勿論丁重にお断りした。

（こちらの気が持ちません…。）

後日奏と刹那は大量のクレーターと勝手に木々を大量伐採したペナルティとして減俸に処された。

07話（後書き）

次の更新は3日以内になると思います
ここまで読んでくださりありがとうございました。

08話

「ななな、何をしているんですか！あなたは！」

言いようのない心地よさを感じた夢から奏が目を覚ましたら真名に舌を絡めたキスをされていた。

突き放そうとするが奏が起きたとわかった瞬間自分から離れる真名。

「いや、気持ち良さそうに寝ているのを見ていたら私も気持ちよくなりたくて。でも奏も途中から積極的に舌を絡めてきたぞ。お相手だ。」

「ふ、ふざけんじゃねーです！この色魔！」

「漢字はあながち間違っではないけど元来ある意味とは違うな。それに刹那から聞いたぞ。血を舐めさせたそうじゃないか。……私

だってまだ一度しか舐めさせてもらっていないのに、昨日会うのが初めての刹那に秘密を暴露し、あまつさえ舐めさせるなんてどういう見なんだい？」

悪い事したのは真名なのに何故か睨まれる。

「す、少し落ち着く時間を下さい：起きたばかりで大声上げてちょっとふらっとしました：まったく朝から何でこんな事に：」

起きぬけでまだあまり力が入らない体に反して高ぶっている気持ちを落ち着かせるため深呼吸する。

「血の件でしたね？それはそういう状況になったからです。あなたが言ったとおり彼女は一人ではあの場合から前に進む事ができないと私も感じました。だから背中を少し押そうとしただけです。

ですが信頼できない相手に背中など預けないでしょう。：だから秘密を話しました。」

「：ふーん。まあいいけどね。でも深夜の仕事に行っているたった一日でこれほどまで距離が縮まるとはね。あのただでさえ人見知りの刹那の事を考えると完全に予想外だったよ。」

「あれ？そういえば刹那さんは？」

部屋を見渡すがどこにもいない。

「朝の鍛錬で走り込みだそうだ。そろそろ帰ってくるんじゃないんだいま。」：噂をすればというやつだな。おかえり。刹那。何か飲むか？」

「どうかしたのか？真名。何か機嫌が良さそうだが。」

刹那が顔の汗をタオルで拭きながら真名に言う。

「少し溜飲が下がっただけさ。麦茶とポカリどっちにする？」

「じゃ麦茶を頼む。あつ、奏さん。おはようございます。」

刹那がパタパタと奏の元に近づいて来る。随分と懐かれたものだと奏は思う。

昨日も部屋に戻ってから寝るまでおしゃべりをした。刹那からは彼女自身のことと木乃香との幼少の思い出などを聞き、こちらは今までの仕事の事や詠春や真名との関係の事などを話した。

（たった一日ですごい関係が変わりましたね。私としても嬉しい事ではあります。）

「…はい。おはようございます。刹那さんは早起きですね。」

「奏さんは少し不機嫌そうですね。低血圧なんですか？」

「そうですね。さらには起きて気づくと口に舌ねじ込まれていたら
テンションはあがらないでしょう？」

「それって、き、キス…？もしかして…真名が？」

「ええ。」

「ほら。刹那麦茶だ。ん？どうかしたか？」

「真名…お前奏さんが寝ている間に勝手にキスしたのか？」

今までの刹那からは聞いたことの無い声質の声を聞き、思わず彼女に目がいく。

見ると刹那は怒っているようだった。体には気をも纏っている。

何故？とも一瞬思ったがすぐに理解することができた。

どうやら昨日の一件で自分は刹那にとって、もう友達のような近い

関係になっていたらしい。自分の為に怒ってくれる刹那の行為に少し嬉しくもなる。

「100歩譲って奏に怒られるのはわかるが君に怒られる筋合いは無いよ。

朝寝ている奏を見るお前の表情が、昨日の学校での情欲に塗れた顔とは違っていて、穏やかながらも色を持っているのが少し気になっていたが…。

いい機会だから言っておこう。刹那、奏は私のものでそして私は奏のものだ。そこに誰かが入り込める隙間なんて存在しない。

まあ血が吸いたければ奏が許可して、さらには私が側にいる時のみ認めてやらなくはない。あれは思わず我を忘れてしまうこの世の至高だからな。」

「ふざけるな！血なんて関係ない！うちは純粹に奏さんの事を心配しているだけや！」

「本当にそれだけかい？」

睨む刹那に真名も負けじと睨み返す。

奏はあまりの空気の悪さに部屋を出てしまいたかったが、二人の間を通らないといけないのでそれも出来なかった。

奏も馬鹿ではない。故に真名がどういう内容の話をしているのかは理解していた。

なので思わず問われた刹那に顔が向いてしまう。

「……」

刹那は何も言わない。

ただ今は真名を睨みきれず俯き少し悔しそうな表情をしている。そして自分が見ていることに気付いたのだろう、刹那もこちらを向く。目があった奏は一応ぎこちないながらも作り笑いをする。

「…あ、あう…」

そしてりんごの真っ赤な顔する刹那を見て奏は覚る。

そして同じ結論に至った真名の表情がさらに険しくなる。

奏は一瞬知らない振りをしようかとも思ったが、それもやめて刹那の手を取り正直な今の気持ちを言う事にした。

「ありがとうございます。刹那さんの気持ちはとても嬉しく思います。」

前に刹那さんが私が原因でキスしてきた時も、真名にされた時私もわず突き放しましたが、嫌悪感などは無かった事を考慮すると私も少し特殊な性癖なんだと思います。

…でもまだ誰かを恋愛方面の意味で好きになったことないんです。だから今すぐは…」

「い、いえ！大丈夫です！と、共にお嬢様をお守りする事ができればそれだけで！」

刹那がいう事だけ言って部屋から出て行く。衣類を持っていったのを考えると朝風呂にいったのだろう。少し上気した頬を奏は両手で押さえる。真名を見ると彼女は刹那が出て行った入り口の方を睨んでいた。

「え、えーと。」

「モテて良かったじゃないか。」

「…良かったのでしょうか？」

「…良かったんじゃないか？」

「そ、そうですね。良かったということにしましょう。」

ちよっと浮かれ気分で納得する事にすると真名の方でガラスの割れた音がした。

思わずそちらを向こうとしたらその前に背中に手を回され引き寄せられ、そしてそのまま真名に本日二度目のキスをされた。

下からの突然の眩い光に思わず目を瞑ってしまう。

奏は先のように真名を突き放そうとするが、背中に手を回され力強く抱きしめられ、さらにもう片方の手で頭を掴まれ固定されているためそれも出来ない。

朝同様舌も入れられて抵抗するが、口内に侵入してくる真名を意識

しだすと力が抜けて来て、しばらくすると完全に脱力して真名に支えられる形になってしまう。

（あっ…朝の夢みたいな感じ…）

奏は朝の夢を思い出す。

それからもう自分でまったく抵抗してない事に気づく事も無く、真名の背中に手を回し受け入れ絡ませた。
光が止むまですつと真名の舌と唾液を味わった。



「…どうしてこんな事になったのでしょうか。」

「きつと奏も私を好きだという事だろう」

（スルーです。）

光も止みようやく落ち着いた奏はしばしボーっとしながらも状況の把握に努める。

そして真名とした行為が、信頼しあった魔法使い達がよくしている

仮契約というものと判断する。

どうやら真名は仮契約魔方阵を瞬時に描く魔法具を使っただけらしい。下には既に光は放ってはいないが魔法陣跡が残っていた。

「…というか魔法使いでもないのにこういう契約ってできるものだったのですか？」

「気の使いでも主になれるって私は知っていたからね。私は主って柄じゃないから従者になったが。これから主従としても宜しくな。奏。」

「いやいや、何勝手なことしているんですか！これがどういうことかわかっているんですか！？」

さすがに動揺を隠せない奏は真名を睨む。自分と契約するという事は即ち…

「知っているさ。仮契約だ。本契約でもいいのだがさすがにそれは双方の同意が必要だからしなかったけど…まあ覚悟を見せただけさ。私は奏が好きだし、それはもう血うんぬんの問題じゃなくて愛に昇華している。

例えば奏が化け物から狙われる人生であろうとも関係ない。常にその背中を守ろう。夜の営みも私が相手しよう。」

（な、何て事真顔で言うんでしょう…え、えと、わ、私は何て言え
ばいいんでしょう…）

「奏が実はロマンチストなのは知っているからね。ときめいている
んだろう？今の私の言葉に。」

「……そういう事を自覚しての言葉だったら最後の言葉が全てをぶ
ち壊しています。」

「キャラじゃないからね。言っていて途中で恥ずかしくなったから
思わずふざけてしまった。とりあえずこのカードは奏のものだ。こ
れを複製して複製したカードを私にくれ。
カードを持っていると念話できるようになるし制限はあるが遠距離
から呼び出すことも出来る。」

念話で言葉攻めして、その結果奏の体が疼いても呼び出すことで
ぐに私が来ることができる。非常に便利だろう。」

「真名って本当に昔、立派な魔法使いの従者だったのですか？」

「もちろんさ。初恋の彼もまだ心の中にいるよ。でも私はいつまで
も過去を引きずらないのさ。」

（いや、そういう事を聞きたいのではなくて。思考がただの変態で
とても立派な魔法使いの従者には見えないと言いたいのですが。）

「何だい嫉妬かい？かわいいな奏は。さっきは私に舌を積極的に絡めてただけでなく唾液も要求してくるし。さすがの私も最初どうすればいいのか判らなかつたよ。」

「恥ずかしい事思い出させないで下さい。もうこの話は終わりです。ぶり返したら学園長室言って仮契約の破棄の方法を聞いてきますからね。」

「わかつた。わかつた。もうしないよ。さて私も朝風呂入ってくるとするかな。」

：しかし2回もキスしたからか体が熱いな。今日は1限から体育で助かるよ。体を動かしたくて仕方がない。血を舐めたわけでは無いんだけど……奏の体はすごいね。」

真名を睨んで部屋から追い出す。

奏はまだ真名の告白に心臓が高鳴っているのだが、何だか負けた気がして癪なので無理に思い出さないことにした。

鼓動を落ち着かせるためとりあえずテレビをつけると、早朝の占いコーナーの最中だった。

見ていたら自分の星座が恋愛運1位でさらに鼓動が高鳴ることになった。

08話（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございました。

09話

午後8時、奏は真名と魔法関係者の修行専用の建物の中にいた。

真名に連れられて外から見たときはただの潰れた倒壊直前の工場の跡地だったが、中に入ると視界が再構成されるように変わり、そこは外からみていた時とは広さが全然異なる訓練場だった。

真名に聞くと認識障害魔法で工場にみせ、さらに人払いの結界まで貼っており明確な目的を持たない限り避けようとする働きかけがあるらしい。

周りを見回す。一面真っ白だがところどころに機器が置かれている。

「あれらの機器で登録されている鬼や悪魔などを召喚して仮想空間で戦闘訓練をしたり、さらにはフィールドまでも構築して色んな戦場を想定した訓練をしたりもする。」

「へえ：そんな便利な魔法器械もあるのですか：魔法使い達の技術は凄いですね。それで今日は何で態々私を連れてここに？」

真名からここに連れられて来た理由をまだ聞いていない。

奏は午前中学校を休み、お守りの力の補充をして午後から出席した。刹那や真名に聞いて確かめたところお守りはちゃんと効果を発揮しているようで一安心し、その後は刹那と共に木乃香を守りつつ過ご

して、今のこの時間なのだが…

「なに…少し奏と一緒に確かめたい事があってね。アデアット」

真名が仮契約のカードを手に持ち何か呟くと真名の周りに沢山の銃が転がった…

中距離用や狙撃用等の様々な銃が彼女の周りに落ちている。

（転移魔法？）

「言って置くが魔法じゃないぞ？これは奏と契約した事による私が呼び寄せることのできる専用アイテムのような物だ。ふむ…アベアット。」

真名が奏のわからない言葉を唱えると彼女の周りに落ちていた銃が消える。

そして再度彼女が銃を呼び寄せる…が、今度は銃は彼女の手に一丁だけしか出てこなかった。

「なるほど…イメージする事で不必要な物は出さなくて済むようだ。便利ではあるな。これからは銃を常に持っていなくてもいいようだ。」

「これが私と契約をした対価ですか？主従契約にこんな特典がある

なんて知りませんでした。ただ魔力供給と絆を深めるだけかと…。」

「それも無いわけではないんだけどね。ん？…この銃…」

真名が自分の呼び寄せた銃を見つめる。

奏には特に変わった銃には見えないが彼女の魔眼にはどうやらそうは映ってないらしい。

「この銃…私から魔力を少しだが吸い取っている。」

真名は誰もいない方向に弾の装填されていない銃の引き金を弾く。
同時に響く銃声と銃口から飛び出した弾に奏は驚く。

（飛んでいったのは多分真名の魔力そのもの…しかしその魔力を包み込んでいた紅い力…あれは私の…）

並みの銃弾のスピードを上回るそれは建物の壁を難なく貫通した。

「こ、この建物は防護結界も貼られていて並大抵の攻撃ではびくともしないはずなんだけどね…」

珍しく真名が驚いている。

「真名、もう少し実験してみましよう。弾は真名の魔力だと思いましたが、その魔力弾を包んでいた紅気は多分贄の血を使って作り出す私の気です。それを使っていると私が疲労するのか今知っておきたいです。」

「そういえば奏の使う気と一緒にの質ではあったな…わかった。試してみよう。」

その後真名と二百発程度の試し撃ちをし、そこでようやく少し立ちくらみを覚え貧血っぽくなっていることを自覚する。
どうやら真名が呼び寄せた銃は奏との契約で得た対価だけあって奏と繋がっているようだ。

元々魔族とのハーフである真名は魔力はそこそこある方なので、魔力を使った事による疲労は感じていないようだった。

「奏を守るために奏の力を使い、結果奏を疲弊させてしまうというのは何か納得できないものがあるけど、どうやら普通の銃弾を装填すると奏の気や私の魔力は使われないようだね。これからは銃を持たないでいい分、余分に銃弾を持っておくことにしようか。」

とりあえず実験の終わった奏と真名は学園の寮に戻る事にした。

寮部屋では勘繰って少し拗ねていた刹那に色々質問されたがとりあえず仮契約の事については話さないでおいた。

◆
真名 side

隣のベッドでは奏と刹那が一緒に寝ている。

奏のベッドが未だ届いていないので、どこで寝るか決めかねているところを私が一緒に寝るか誘ったら刹那も対抗してきたのだ。そしてじゃんけんの結果負けて刹那のベッドで寝ることになったのだが…。

素直になったものと感心する。自分というものを常に抑えて木乃香を離れて護衛することに全力を注いでいた彼女がたった一日でこのようになったのだ。

真名から見て刹那はあらゆる面において木乃香一筋だと思っていたが、どうやら恋愛の対象ではなく一番の親友もしくは家族に近いモノだったらしい。

そんな大の親友との友情がなくなりそうな所にやってきて関係を修復し、そして彼女と似たような境遇をもあわせ持ち、辛さも何もかも判ってくれる奏は、刹那にとって出会ってたった一日でも慕情を抱くほどの存在になってしまったようだ。

隣のベッドの刹那と奏を見る。

寮のベッドはそこそこでかいので二人は50センチほど離れているが真名には布団の中で二人が手を繋いでいるのが視えた。透けて見えるわけではないが魔眼で触れ合っている事がわかるのだ。

奏は何だかんだでそこそこヘタレだ。自分からそういう積極的な行

動は交際中の相手でもない限りしないだろう。

（本当に素直な生き方をするようになったものだ…）

少しイラッとするがそれとは別に少し嬉しくもなる。やはり自分は刹那を大切な友人と思っていることを再認識する。

（まあそれとこれとは別だけどね…）

仮契約カードを取り出し見る。

カードは普段の戦闘時の戦装束の自分の周りに、様々なタイプの銃が浮いている絵だった。

見て触り自分が奏と繋がっている事を実感し、カードを胸に抱き寄せるように近づけ、温まる心に満足を覚える。

ふと淡い初恋を思い出す。あれは間違いなく初恋だったが、今思えば憧れの気持ちも大きかったように思う。彼を想い彼の思想に共感し、一緒に平和な世の中を築きたいと…。

そして真名は奏への想いと彼への想いは少し別のモノだと判断する。真名は奏とはただ一緒にいたいだけである。そこには大した思想も何も無く、苦楽を共にし、背中を守りあい、時に見詰め合っていたい…ただそれだけである。

あの時と違い真名は溺れているのだ。

（随分と乙女なことだ…キャラではないことは判っているのだが…）

しかし最早止められない想いに真名は自分の写るカードにキスをす

ることで再度決意を固める。

(すまないね刹那…やっぱり奏は私のものだよ…)

寝ている奏に念話で一言おやすみの挨拶をして真名も目を閉じた。

09 話（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございました。

10話

目を覚ますと真名が台所で朝ごはんを作っていた。刹那は今日も朝の鍛錬だろうか？部屋にはいない。

「おはよう。奏、ベーコンエッグができそうだぞ。」

香ばしい匂いにお腹が反応する。

奏は刹那のベッドから降りイモムシのようにテーブルに移動する。

「そういえば、奏。今日学園長から連絡があって君の給料と私の報酬から各50万程引かれるそうだよ。」

「はい？」

「いや、だからお金が引かれるんだって。昨日の防護結界を蜂の巣にしたのを貼り直すその費用だそうだよ。」

「穴あけたのは真名じゃないですか！」

「でも君の力だからね、それにもっと実験をしたいって言ったのも奏だよ？ここは折半が公平だろう。苦楽を共に分かち合おうじゃないか。なに、たかだか50万程度さ。」

「金は命よりも重いんです！」
ざわ…

とりあえずもう決まったことらしく奏は諦めた。

（前の刹那との夜間訓練でもお金引かれましたし当分は贅沢はできなさそうですね…）

ため息をつきながら奏は立ち上がって食器を棚から取りテーブルに並べる。そしてフライパンごと持ってきた真名が皿にベーコンと卵をのせた。

卵は途中でひっくり返され、完全焼きにされていて潰れたそれは最早目玉ではなかった。

黄身が半熟のほうが好きな奏だがさすがに作ってくれた人に文句を言うのはやめておいた。

準備が出来たところで刹那も帰ってきた。

「刹那さん。朝ご飯できていますよ。一緒に食べましょう。」

「奏さんおはようございます。でも私は汗かいてきましたので後で

いただきます。」

「大丈夫ですよ。臭いなんてしませんし、カリカリに焼いたベーコンなんて冷めたら食べられるものじゃないですよ？今食べましょう。」

刹那に近づきテーブルに押す。体臭を気にしているようだが刹那の体臭は気になるようなものでもなくむしろ少し甘く感じた。

女性として刹那のにおいを気になる気持ちはわかるが、それでも朝食と一緒に食べたかった。何だかんだで今日が初めて三人で一緒に食べる朝食だからである。

基本一人でご飯を食べていた奏にとって三人で食べるのは少しの楽しみでもあった。



朝食後、刹那が体の汗を流しに行こうとする。奏も髪が寝癖で乱れているため軽く流そうと思い一緒に行こうとしたが真名に止められ、鏡の前に座らされ真名のヘアワックスで整えてもらう事になった。刹那が部屋を出る際少し真名を睨み、真名はそれを軽く受け流していた。

「奏の髪はいい匂いだね。」

真名が櫛で奏の髪を梳きながら軽く一房取って鼻に近づけて言う。

「そ、そうですか…ありがとうございます。」

真名の少しきざな言葉にもドキドキするが今まで母親以外から櫛で髪を梳いてもらったことがない奏は、行為そのものに少し緊張していた。真名が泡タイプのワックスを髪になじませさらに梳く。

心地よさに二度寝の誘惑に負けそうになりながらも何とか耐え整髪が終わった。

奏は前髪は残しつつ髪をまとめていつも通りのポニーテールにする。

「せっかく綺麗に梳いたんだから今日はストレートで行って欲しかったな。」

「そんな事いわないで下さいよ。私はおでこは角が出る場所だけほんの少し肌色が変わいますから髪で隠しておきたいのですが、元々髪が顔に風や一々の動作でぺたぺた触れるくるのあんまり好きじゃないんです。短髪も昔似合わなかったので嫌ですが…」

「まあいいさ。その髪型も似合っているからな。」

「あ、ありがとうございます。」

しばらく真名と雑談していると刹那が帰ってきたので制服に着替え、木乃香と明日菜と子供先生の部屋に三人で向かうことにした。

木乃香達三人は部屋から出て待機しており、木乃香は奏達を見るとぱたぱたと近づいて来た。

「おはよう。??：真名がいるなんて珍しいな？今日は一体どうしたん？」

「なに、奏と一緒に行くとしたのだが奏が木乃香達とも一緒に行きたいと言うのでね。ついて来たのさ。」

「ふーん。奏はモテモテやなあ。昨日せっちゃんも奏がない午前中、私に奏の話ばっかしてきたで。少し妬けたわ。」

「こ、このちゃん！」

木乃香が刹那をからかい奏もつられて苦笑するがふとネギに目が行った。いつも子供らしく元気で頑張っている印象があったのだが今日は少し元気が無い。

「ネギ先生、どうかしたのですか？元気が無いようですけど。」

「奏さん。……奏さんはパートナーを選ぶとして10歳の年下の男の子なんてどう思います？」

「「死んだほうがいいと思う。」」

何故か間髪入れず雑談していたはずの真名と刹那が反応してきた。

「え、えーと少しませているなあと思いますが、何かあったんですか？」

「い、いえ…何でも無いです。きっちり授業はしますので安心してください。…それじゃ先に行きますね。」

そういうネギはとぼとぼ学園に向かっていった。

続いて明日菜もため息をつきながら走って追いかけていく。

明日菜から奏達は別に追いかけてこないで大丈夫と言われたので、気になりつつも明日菜に任せることにした。

きっちり授業をすると宣言したネギだったが学校でも朝同様のテンションで結果グダグダな授業を展開した。

これではクラスに一人は必ずいる真面目さんが怒るのではないかと思ったが、大半が心配し誰も注意する気はないようだ。

(…であるならば)

とりあえず奏は寝ることにした。机にほっぺを付けながら教室を見渡す。

子供先生に近寄り心配する人、我関せず銃や刀の状態を確かめている真名や刹那…(おい)、そして一人で勉強にいそしむ…いや教科書は立てているが一番後ろなのをいい事に小型ゲーム機で遊んでいる眼鏡の人。

そしてこっちを見ている金髪少女…とりあえず奏は反対方向を向いて仮眠をとることにした。

その日はネギの元気は無かったが問題も無く久しぶりに落ち着いた時間をすごすことができた奏だった。



エヴァンジェリン side

「茶々丸、羽藤奏の事は何かわかったか？」

夜、自宅で自作の人形に囲まれながらエヴァは茶々丸に二日前に命じた羽藤奏の事を聞いていた。

「はい。」

「よし。話せ。」

「わかりました。羽藤奏、1988年5月7日生まれ。血液型はA型。スリーサイズですが自己紹介のは虚偽の回答で本当は68・51・70の貧相な（チラツ）体で、趣味はゲームです。」

「おい：それだけじゃないだろうな？それと今貧相って言ったとき私の胸見ただろう？前から思っていたがお前最近私を小馬鹿にしているのか？」

「いえ、滅相ありません。それにここまでは一般的なプロフィールです。ここからが裏の顔になります。」

奏様は鬼と人間のハーフで、関西呪術協会の近衛詠春様と個人的な交流も持っています。そして近衛詠春様の依頼を通じて魔法世界の事を知り、それ以降龍宮真名様やタカミチ・T・高畑様とも交流を持っています。

戦闘は近衛詠春様から京都神鳴流を学んでいます。が戦闘時にそんなに使うというわけではなく、主に独自の戦闘法で戦うようです。」

「独自の戦闘法？」

「それについては詳しい事はわかっていません。ただ普通の拳士や剣士が使う気とは違った紅い気を体に纏わせて戦うそうです。」

茶々丸の報告が終わりエヴァ顎に手を添え考える。鬼とのハーフであることに自分が気付かなかった事に驚く。

（力は裏の世界で仕事が出来るほどはあるのに気付かなかったか：随分と隠すのが上手いようだ。それに昨日から突然羽藤奏から情欲を誘う香が漂わなくなっていた：さらに吸血衝動も無くなった。：：おかしい：）

エヴァには長年で培ってきた知識と経験で基本的に知らない事なんてそんなには無かった。

鬼とのハーフなんて存在も今まで見てこなかったわけではない。しかし：

（やはり：あいつには何かがある。それを私の知らない業を使って：隠蔽している？）

「茶々丸、あいつの実力の評価などはどうだ？」

「はい。奏様は基本的に詠春様の依頼により仕事をするそうなのですが、比較的簡単な仕事のみを請け負っているようです。とはいえ、

紛争地域で被災者の救出をしたりと命の危険性はあるお仕事ですが……真名様と組む時は稀に人間や亜人を殺したりもしているようです。」

（あまり強いというわけではないのか……ならばあいつも明日力が戻った際坊やのついでに襲うか……ネギ坊やの血を吸ったらここには長く居られないからな。）

「……わかった。それと茶々丸、私の魔力の回復の目処は立っているのかな？」

「はい。明日学内のPCでハッキングして確かめてもみるつもりですが九分九厘問題ないかと。」

「そうか。なら明日魔力が戻ったら坊やと羽藤奏にしかけるから準備しておけ。」

「承知しました。」

（明日には力が戻り坊やの血を吸い解呪もできる……クククッ……待っているがいい。坊やに羽藤奏！）

エヴァンジェリンの高笑いは10分程家内に響いた。

10話（後書き）

次の更新は2日以内になると思います。
ここまで読んでくださりありがとうございました。

11話

今日も奏の一日は平穏で終わるはずの予定だった。

……夜に学園都市のメンテナンスによる大停電が起こるまでは。

停電して初めて刹那から聞いてわかった。

学園の結界が停止するらしくその日は常に木乃香の側に刹那が、そして寮の建物周りを奏が警備する事になったのだが：

「ヨウ、テメエガ羽藤奏カ？」

「…チャッピー？」

目の前に自身の体よりも大きな剣を持った1メートルにも満たない人形がいる。

「チャチャゼロダ。宜シクナ。マ数分後ニハ細切レダガナ。」

「絶対宜しくしたくないです。というより何か用でしょうか？あな
たみたいな人形の知り合いはいないのですが。」

「御主人ガテメエニ会イタガツテイテナ。無理矢理ニデモ連レテ来
イトサ。」

（やっぱりエヴァンジェリンでしょうか…）

ネーミングセンスから言っても奏にはそうとしか考えられなかった。

「ちなみにお断りしたいと申し出たらどうなるんでしょう？」

「サツキ言ツタダロウ。無理矢理ニデモ連レテ行ク。コチラトシテ
ハ断ツテクレタ方が嬉シイゼ。ケケケ」

「わかりました案内してください。」

「チッ！ツマランゼ。…ツイテキナ」

チャチャゼロが背を向けて歩き出す。瞬間、奏は背を向けるチャチ
ヤゼロに抜刀しながら接近し、剣を持つ右手を切り落とした。

「! ! ! ! ! テメエ : ヤツテクレルジャーネーカ。」

腕を斬り落とされたチャチャゼロが苦痛を感じさせない変わらぬ表情のまま距離をとる。

「当然でしょう。こっちはあなたのご主人様にどうやら血を狙われているようですし。理不尽に、一方的に狙われているのはこっちなですよ。」

それに力を封じられて魔法も満足に使えないらしいエヴァンジェリンさんが今日私を呼び出す。 : : : : 今日この停電の日に : : : : :

今日という日に何か秘策があるのでしよう? だというのなら腐っても最強の魔法使いなんて相手に会うような馬鹿な真似はしませんよ。血を吸うと言うのならお断りですし、話があるのでしたら明日学校で聞きますと言っておいて下さい。今日は受けません。」

「ナルホド。面白エジャーネーカ! 最近ノフヌケタ御主人二見習ッテモライタイクライダ。 : : ガ、」

斬り落とされた腕の方に近寄り、チャチャゼロが左手で落ちた大剣を拾う。

「マサカコレ終わり何テ言ワネエヨナ?」

「全然痛くなさそうですね : : : : : もしかして首を落とされても死んだり

しなかったのですか？」

「首ダケデモ普通ニ死ンダリシナイゾ。俺ハ御主人ノ魔力ガ元ダカラナ。サテ殺シ合イヲシヨウカ。久シブリニ殺リガイガアリソウダゼ。」

（殺し合いつて…エヴァの下に連れていくのではなかったのですか！？）

心の中で突っ込み、近づいてくるチャチャゼロに首を落とせば良かったと後悔しながら奏は構える。そして飛び掛って来て大剣を振り下ろしてきたチャチャゼロの一撃を受けた。

（重い…）

小さな人形の一撃が予想より遥かに重かった事に驚きながらも、奏は受けながら蹴りを繰り出した。飛び掛ってきてまだ地に付いていないこの状態なら避けられないとふんでの蹴りだったが、チャチャゼロの背中に生えた小さな翼で回避される。

「それって飾りじゃなかったんですか？」

「飾リサ。本質的ニハ魔力デ飛ンデイル。」

地に着いたチャチャゼロが再度仕掛けてくる。

いつの間にか大剣を口で持ち、服の中から小さなナイフを2、3本取り出して投げてくる。

奏は体をそらしてそれらを避けるが、接近しながら大剣を手にもちかえ放って来た袈裟斬りの一撃を完全に回避できなく制服が破れる。

（最初に仕掛けてきた時よりも疾い……最初のは振り……ですか）

「成ル程。確カニ68ダ。」

「何故私しか知らない秘密を!？」

制服を斬られた際、胸の部分が少しはだけただけで戦闘力を測られた。

「ドウデモイイ事サ。ソレヨリヤルジャネーカ。モット楽シモウゼ。」

「いえ、私は戦闘狂でも何でもありませんのでそろそろ終わりにしましょう。」

下に放り置いていた自身の刀の鞘をチャチャゼロに向かって蹴りで放る。

そして奏は通常の気を刀に纏まとわせて地面を叩いた。

京都神鳴流の技、斬岩剣ざんがんけんのように刀に鋭い気を纏まとわせて斬るのでは

なく、刀を楯田の大きな気で包んで地面を叩く。

ただの斬岩剣からの自己流派生攻撃なのだが、鞘を避けた途端下から衝撃で浮き上がる大小のコンクリート、それらに一瞬チャチャゼロが気を取られ隙を見せる。

その一瞬の隙の間に、奏はチャチャゼロに向かって京都神鳴流の気の刃を飛ばす斬空閃ざんくうせんを放つ。

その一撃は空中に浮いていたコンクリートを切断しながらチャチャゼロの首も刎はねた。



「マサカコンナニアツサリ負ケルトハナ。」

首だけになったチャチャゼロが奏にいう。

「首だけで喋られると怖いのであんまり喋らないで下さい。」

「ソナナコト言ウナヨ。シカシ鬼ニナツタ姿トモ戦イタカッタノダガナ…」

「……私が鬼であることはもう調べられているんですか？」

「ソレダケジャネーヨ。サツキノハ京都神鳴流ノ技ダロ？ソレヲ使
ウ事モ知ツテイルシ、胸ガ小サイ事モ調査済ミダ。」

「わかりました。私をエヴァンジェリンさんのところに連れて行って
ください。私からもお話しすることができましたので。」

「何ダヨ。胸ノコト気ニシテイルノカ？安心シロヨ？600年生キ
テモ大平原ダツテイルンダ。」

「そんな事じゃありません！」

それも無くはなかったが奏はエヴァンジェリンが一体どこまで自分
の事を調べ上げたのか気になった。罌の張られた場所に飛び込むの
は気が滅入るが最悪転移の魔法符を使って逃げればいいと判断する。
腹を決めた奏はチャチャゼロの頭を持つ。

「さて…それではエヴァンジェリンさんの所に案内してください。」

「オイ、乱暴ニ扱ウナヨ。」

◆
チャチャゼロに案内を頼んでエヴァンジェリンの元に向かうが、歩いて数分経つと奏は自分の体が震えていることに気付いた。

「チャチャゼロさん？何か体が震えているのですが…」

「マア今ノ御主人ハ力が戻ッテイルカラナ。魔力ニ当テラレテイルンジャネーノカ？普通ハ誰ダッテソウナルゼ。」

「チョ！ソナ話聞イテ無イデスヨ？」

「言ッテナカッタカラナ…。後ソノ話シカタヤメロ。イラツトスルカラ。」

…ソレト、ホラ着イタミタイダゼ。」

チャチャゼロに遠方を目で指され見てみると、そこには満身創痍のネギと傷一つ無いエヴァンジェリンがいた。

魔力に疎い存在である奏でも遠目で見ただけでエヴァンジェリンの脅威を肌で感じる事が出来た。

（これは思っている以上に危険かもしれませんね。）

奏はエヴァンジェリンの下への歩みを止めないながらも、チャチャ

ゼロに気付かれないようポケットに手を入れ、ある物を軽く握り締めた。

11話（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございました。

12話

エヴァンジェリン side

エヴァの前でネギ・スプリングフィールドが肩で息をしながら満身創痍の状態でこちらに杖を向けている。

さすがにナギの息子だけあって魔力も高く戦い方も悪くは無いと感じたがそれ故エヴァは一切遊ばなかった。普段の自分だったならば停電時間にもまだ余裕があったから久しぶりの力の解放を楽しみながら戦闘をしたかもしれないが、今回はネギを倒し血を吸ったら次に羽藤奏という案件があったので遊びは一切なしで挑んだ。

少し離れたところでは茶々丸が神楽坂明日菜の足止めをしている。よくみると一切茶々丸は攻撃せず傷を付けていない。

(やさしいことだ…)

「さて、そろそろ終わりにしようか。坊や。私はこれから坊やの血を吸ってもう一つの用事も片付けなければならないのでね。」

エヴァは眠りの魔法を唱える。いつものネギなら食らうはずがない魔法だが今の状態なら回避するのは無理だろうと予測した。そして

予測を違えることなくネギはそのまま地に倒れ伏す。

(ようやくだ…ようやく呪いが解ける…)

寝ているネギの顔を見るとナギを思い出し一瞬心に痛みを伴う。それでもエヴァはネギに近づき血を吸おうとする。その時、ふと視線を感じた。

顔を向けると首だけのチャチャゼロとそれを手に持った羽藤奏がこちらを見ていた。

「チャチャゼロ…負けたのか？」

「マアナ。コイツトンダ食ワセ者ダ。実力ガナイカラ裏デ简单ナ仕事シカシテイナカタタワケジャネエ。マダ餓鬼ノ癖ニ戦イ方ヲ知ツテイルゼ。気ヲツケロヨ、御主人。」

「大絶賛じゃないか。羽藤奏、一体どのような手を使ったのだ？」

エヴァは羽藤奏に問いかける。しかし彼女は目を閉じていてこちらの話を聞いていないように見える…が次の瞬間には目をあげ答えてきた。

「別にどうだっていいでしょう？そんな事より教えてほしいのですが、私の事をどこまで知っているのですか？チャチャゼロさんはど

うやら私が鬼である事を知っているようでしたが…。

今日はそれを確かめに来ました。あとはそこで倒れているネギ先生も出来るならば助けてあげたいのですが。木乃香さんのルームメイトですし。」

「残念ながら坊やを渡す気はない。坊やの血を致死量に至るくらい飲めばこれの父親に掛けられた学園に延々と登校し続けなければならぬ呪いを解く事が出来るのでな。

後、貴様に関しては鬼であること以外未だ何も知らないから呼んだのだ。あの時から貴様の血に興味がある。なに、貴様の血は死ぬまで飲むつもりはない。しかしこのまま判らないままにするつもりも無い。」

そういい羽藤奏を見ると彼女は再度目を閉じている。

（何をしている…？まあいい…『おいチャチャゼロ！聞こえるか？』）

エヴァはチャチャゼロに念話を送る。

『（何ダ？御主人。）』

『（今から魔力を送りお前の体を再構成させる。戻ったら奴の胸ポケットから転移魔法符を取って戻って来い。隠し持っているようだ

からな。逃がす気は無い。」

『（アイサー。御主人。）』

エヴァはそのままチャチャゼロに魔力を送り込む。羽藤奏に気付く気配はない。どうやら魔力を感知するのが苦手なようだ。

「貴方という存在が信用できないので、吸血させるわけにはいきません。しかしいいのですか？ スプリングフィールドの姓を持ち、魔法使いという事はネギ先生は英雄の息子…なのでしょう？ この魔法使い達が許すと思えないのですが。」

「登校地獄の呪いが解ければこんな所に用は無い。すぐに出て行くな。今だチャチャゼロ！」

一瞬にして体が戻ったチャチャゼロが羽藤奏のポケットから転移の魔法符を盗りこちらに飛んでくる。

羽藤奏を見ると少し悔しそうにこちらを睨んでいた。

「いい表情だ。貴様はいつも無表情だからな。…後停電解除まで約10分程度か…まあそれだけあれば今の私には十分だ。」

「…停電とあなたの力の解放はどうやら関係があるようですね。」

（頭の回る小娘だ。『チャチャゼロ！足止めしろ。戦い方が上手いと言ったが、そんなものではどうしようもない一発で終わらせる。』）

『（足止メジヤナクテモ…別ニ俺ガ殺ツチマツテモイインダロウ？）』

チャチャゼロが羽藤奏に襲い掛かるのを確認してエヴァは空に舞い静かに詠唱を開始する。

そして羽藤奏を見下ろし呪文を詠唱する。

それは本来150フィートを四方の広範囲をほぼ絶対零度にし、対象を凍結させる高等呪文。

しかし登校地獄の呪いが残っているので魔力自体はまだ完全ではない。

ゆえに本来の力の半分程度の範囲且つ威力しかないだろう。だがそれは好都合でもあった。今の目的は殺す事ではなく戦闘不能にすることなのだから。

「リク・ラクラ・ラックライラック

契約に従い我に従え氷の女王

来れとこしえのやみえいえn…ぐあっ!!」

勝利を確信しての詠唱だったが突如エヴァは詠唱を中断する…いや、痛みにより中断させられた。

エヴァが痛みを感じた腕を見ると、

あるはずの右手が肘から無くなっていた。

そして次の瞬間左手も吹き飛ぶ。

（狙撃！…龍宮真名か！！）

エヴァは空から落ちながら驚く。銃弾の速度にそして威力。

一発目は不覚をとってのもだったが二発目も腕が吹き飛ばされるまで反応できなかった。それだけではない。1発目を食らったと判った瞬間エヴァは無詠唱の簡易魔法障壁を貼った…しかし障壁は薄紙のように何の効力も発揮しないで破られた。ありえない銃弾だった。

「私たちの勝ちですね。」

いつの間にか接近していた羽藤奏が地に落ちたエヴァの首に刀を突きつけていた。

額からは角が生え…そして紅気を体全体に纏っている。チャチャゼロを見ると四肢だけでなく大剣すらも分断されている。

エヴァは今の状態の羽藤奏に戦慄を覚えた。あの紅気の詳細などわからないが今の紅気を纏っている羽藤奏が咸卦法に匹敵、いや軽くそれ以上の肉体強化他様々な恩恵をその身に受けている状態だと感じ取る事ができた。

腕は既に戻っていたが目の前の羽藤奏に隙など無い。学園結界と登校地獄の両方が解除された状態であるならば勝てるかもしれない…が今の完全に魔力が戻っていない状態、そして後数分で決着をつけられるほど生易しい存在ではないだろう。

作戦が最早失敗に終わっている事をエヴァは覚った。



奏side

エヴァンジェリンに奏は刀を突きつける。

奏はここに着いたときから念話で真名と連絡をとっていた。

エヴァンジェリンとの無駄な会話も真名が狙撃ポイントに向かうまでの時間稼ぎだった。おかげで魔法符を盗られるという失態にもつなげたが…。

目の前のエヴァンジェリンを見る。
気付くと腕は元に戻っていた。これ以上戦う気はないようだが、しかしその表情はとても悔しそうだ。

（私に害をもたらさないのなら登校地獄とやらの呪いは解いてあげたいのがね。）

奏は少しエヴァンジェリンに同情していた。

前に学園長と話をしたとき付き合いは15年と言っていたので多分それくらいここに呪いで留まっているのだろう…しかもずっと学生。想像して奏は身震いした。

そんな想像をしていると周りが光り始めた。エヴァンジェリンが言っていた時間よりも5分ほど早く停電が直った様だ。

そして次の瞬間エヴァンジェリンの体が眩い電気に包まれた。

「きゃん！」

600年生物とは思えない可愛らしい声を出してエヴァンジェリンがほんの少し焦げる。

どうやら力が再度封印されたようだ。さっきまでは体が自然に震えるほどの脅威を感じていたのだが今は感じない。

「クソッ…！せっかくのチャンスが…」

地に伏し涙目のエヴァンジェリンを見ていると少し悪い気がしてくる。

（これからは恨みも多少含んで血を狙われるかもしれませんがね…）

あと一年エヴァンジェリンと学園を共にすることを考えると憂鬱にもなってくる。

今回ネギも奏も狙われたがエヴァンジェリンは本来子供や女性は襲わないと聞く。

相手を殺すのは賞金首として狩りに来た魔法使いと呼ばれる存在だけだそう。だから破格の600万ドルにまであがったのだろう。ただの人間が殺されただけではここまではあがらない。

ネギの血を吸おうとした時に一瞬見せた心苦しそうな表情を思い出す。

「エヴァンジェリンさん、登校呪いを解くには血縁者の血を大量に必要と言っていましたけど、他に解く方法は無いのですか？えーと、ほら、自分の未だ目覚めぬ厨二的な力で解くとか。」

質問してみるとエヴァがこちらを睨みながら答える。

「600年も生きてこれ以上急激な進化なんかするものか！確かに発動させたナギを上回る魔力を有すればこのような呪い解く事は可能だが、そのような事あと数十年は毎日魔力資質を持つ存在

の血を吸って生きていかないと無理だ。それまで学園で飼い殺しにされておけだなんて冗談じゃない！」

奏は少し考える。

事が成ってからのことを。

どのような条件を提示するべきであろうか。

できるだけ自分に有利に働きかけるように：しかし彼女の負担にもならないように。彼女は今回に限ってはただの被害者なだけだ。

敵対しないのであるならば助けてあげたいと思った。

不思議と目の前の存在が成った契約を反故にするような存在には見えなかった。

「そうですか：エヴァンジェリンさん。単刀直入に言えばネギ先生の血を吸わなくても呪いは解けます。私はその術を知っています。」

「嘘をつくな！そんなこと！」

「本当です。教えてあげてもいいですよ。条件を3つほど守ってくれるのでしたら。」

真剣な表情をエヴァンジェリンに向ける。

「……嘘ではないのか…?」

「はい。それで…どうします?」

「……条件を聞かせろ。」

「そうですね。」

一つ目は解呪の際にこれから知る私の秘密を死んでも守ること。…エヴァンジェリンさんは死にませんが。

二つ目は私と基本的に敵対しない事。まあ、これは結構緩いので安心してください。基本的に私は争いが嫌いなので全力で逃げます。でも逃げてはいけない戦いがあって、もしその時エヴァンジェリンさんが敵対勢力にいましたら、その時は私の味方になれとは言いませんが敵対はしないで下さい。

そして三つ目に私が助力を要した時は木乃香さんを一緒に守ってください。…これは中学卒業まで。私も木乃香さんの護衛は中学終わりまでです、それまででかまいません。

これらの条件を飲んでくれるのでしたら呪いを解く方法を教え協力します。」

奏はエヴァンジェリンを見る。エヴァンジェリンは目を閉じ考え事をしている。

多分言葉に裏が無いかな等探っているのだろう。が、別に言った言葉に裏などない。

奏は少し安心した。裏を探るという事は契約事態は成ったら真剣に守る気があるということだ。

助けたい気持ちはあった。

ただその際秘密を絶対守って欲しいのと最強の魔法使いにこれから先死ぬまで敵になって欲しくなかった。彼女はやはり種族だけで考慮すれば鬼と匹敵するレベルの天敵なのだ。協力して力を取り戻した後襲われるなんて馬鹿きわまりだろう。

木乃香の件は欲を持ったおまけ程度のようなものだった。

しばらくするとエヴァンジェリンがこちらを真剣な表情で見る。

「わかった。条件を飲もう。しかし、本当に呪いは解けるんだな？」

「…多分。」

「おい！多分って何だ多分って！」

「いえ：例えばですけど力を得て一度解いた呪いが元に戻った後再度発動する事ってあります？」

「いや。一度解いた呪いが自動で再度発動する事なんてありえない。」

「だったら大丈夫です。」

「して? どうやって解くと言うのだ?」

「そうですね…まずはエヴァンジェリンさんの家に向かいましょう。
そこで話しますので。」

（『というわけで真名も寮に戻っていて下さい。彼女がもう私に敵対する事はないでしょう。あつ、できればネギ先生をお願いします。』
）

（『何か納得できないものがあるがわかった。報酬はいつか私にも血を吸わせてくれ。それが今回の対価でかまわない。』
）

（『…わかりました』
）

とりあえず眠っているネギを念話で真名にまかせて奏はエヴァンジェリンの家に向かうことにした。



「ハアハア…茶々丸さん。私たちいつまで戦っていればいいの？」

「どうやら私はマスターに忘れられたようです。でも命令は守らなければなりません。ですので明日菜さんをこの場から移動させないでずっと足止めしておくことにしておきます。」

「ケケケッ。相変ワラズ最近壊レ気味ダナ、妹ヨ。」

12話（後書き）

念話はカードを触っていれば根性で出来るはず…そんな設定。
原作ではカードを額に当てていましたが（∇；）

13話

エヴァンジェリンに案内され奏は彼女の家の居間で人形達と一緒にソファに座っている。

（可愛らしい人形も多くて悪くない趣味です。でも襲ってきたのは何であんな気違い人形だったのでしょうか…）

「しまった！茶々丸を忘れてきた…羽藤奏。すまんがお茶は無しだ。」

「かまいません。あと奏と呼んでください。」

「わかった。私もエヴァでいい。では奏…早速だが呪いを解く方法を早速だが聞こうか？」

エヴァがテーブル越しの向かいのソファに座りこちらに問いかけてくる。

詠春に誰にも話さないだろうと言っておきながら数日で2人に話すことになってしまった事に思わず苦笑するが、この二人から漏れる事はないだろうとも感じ奏はエヴァに自分の事はなす事にした。

羽藤家の事から入り、鬼とのハーフ、血と体質の変化、血を使った戦闘法、今まで血を飲んだ人外の力の増し具合、お守りの事、今も

誰かの召喚した鬼に偶に襲われている事等包み隠さずエヴァに話す。奏の言葉をエヴァは最後まで何も言わず聞いてくれた。



「なるほど。私がお前にその…欲情したのはお前の特殊な体質によるものだったのだな。」

「そうですね。自分が百合っ娘だって勘違いさせてしまいましたか？」

「ふ、ふざけるな。そんなわけないだろう。」

「とまあそんなわけです。私の血を飲めば吸血鬼のエヴァさんだったら一時的にかなりの魔力量になるでしょう。それこそかの英雄を上回る程の。ですが…」

学園結界の復活した今ならそんなに敵の心配をする必要もないだろうと判断し、奏は首飾りを外してテーブルに置く。

途端奏には感じる事が出来ないが漏れているであろう香。さらに効果がただ薄まった前回とは違い首飾りを外した今は、贄の血すらも吸血鬼のエヴァには匂っているだろう。

その証拠にエヴァはこちらにゆっくり近づいてきた。その顔に理性は感じられない。首付近にゆっくりと手を伸ばしてきたので、奏は体をそらしてエヴァの手を取り引っ張ってそのまま壁にぶつけた。そしてエヴァが壁に衝突している間に首飾りをかける。

「ですが、今まで初めて血を飲んだ人で理性を保てた人はいないんですよ。みんな最初は我を忘れて吸ってきます。今までは指を軽く切った程度の少量の血でしたので大丈夫でしたが、今回はどれだけ必要になるかわかりません。だからエヴァさんには自制して吸って欲しいんですよ。」

頭を抑えて悶絶しているエヴァに奏はやりすぎたかなと思いながら言う。

「ごめんなさい。痛かったですか？」

「当然だ馬鹿者！そ、それと今は触るな！」

肩に置いた手を払われる。当然かと奏は判断しながら言葉が続ける。

「今も興奮が続いているのでしょうか……どうですか？自制して血を吸うことができそうですか？私はまだ死にたくないのですが……。あっ！あと私を吸血鬼にはしないで下さいよ。」

「……大丈夫だ。致死量は吸わん。が、少し落ち着く時間をくれ。」

「わかりました。」

エヴァを落ち着けるためとりあえず家を散策する事にする。

「いや、勝手に家を見回るなよ！」

「いいじゃないですか。600年も生きればどのような事を楽しみに生きているのか気になったりする年頃なんですよ。ゲーム多いですね。あつ、SFC版半熟○雄です。シナリオ終盤になるとワンダーエッグは地球ちゃんしか出なくて嫌になっちゃいますよねー」

「ぬがー！触るんじゃない！もう落ちついたわ。さっさとソファに座れ！」

無理やりソファに座らされる。

「えーと…どこから吸います？」

「…首筋から吸う。」

エヴァが奏に正面から近づき両肩に手を置く。エヴァはどうやら左首から吸うようなので顔を傾けてあげる。

奏は少し緊張しながら目を閉じ牙が突き刺さるのを待つ。今までは自分で肌を軽く切っていたが今回は違う。

傷つけられるのを承諾し、そして待つという事から少し予防接種に

近い恐怖を感じつつじつとしていると、首筋に吐息がかかった。思わず体が震える。

しばらくすると牙が首に触れ、そこに熱を感じたのと同時に牙が突き刺さってきた。

「!痛っ…」

(え、映画では吸血された人は気持ちよさそうにしていますが、やっぱりファンタジーだったのですね…)

エヴァが牙を突き立てたまま吸血してくる。

いつのまにか肩に置かれていた手は両手とも背中に回されて抱きつかれている。

エヴァが既に本能に流されて完全に理性を失っていると奏は感じた。力強く抱きしめられた体がみしみしと軋んでいるのだ。

痛みと恐怖はあったが致死量に至るまで吸わないと言ったエヴァの言葉を信じ、ぎりぎりまで鬼には成らず待つ事にした。

600年生きているのにも関わらず自分より小さい少女の頭を撫でる。

しばらくするとエヴァが牙を抜いて流れる血をすすり出した。

まだ口は離さないながらも吸血が先ほどとは違う優しい行為に変わり安心する。背中に回され抱きしめられる力も今は優しい。

舌が傷口をなぞる感覚に少し心地よさも感じつつ奏はエヴァが満足するまで血を吸わせてあげた。



「どうですか？呪いの解呪はできそうですか？」

エヴァが満足するまで血を吸わせた後少し体にだるさを感じながら未だ少し恍惚としながら頬を染めているエヴァに問いかける。

「…ん、あ、ああ。呪いは既に解けている。というより最初に牙をたてて血を吸った時には解けていた。複雑に絡み合った私を縛る呪いを一つ一つ解きほぐすのではなく、力づくで破り散らすような感じだった。」

「…じゃあんなに吸う必要なかったんじゃないですか？」

「すまん。こんな血を吸ったのは初めてでな。お前に頭を撫でられるまでは完全に我を忘れていた。……あとすまない。血からお前の過去をのぞき見てしまった。」

「んな！！勝手に人の過去を見ないで下さい！」

「まさか、前の中学では全力で不登校決め込み、裏の仕事をしない日はずっと家でゲーム三昧の毎日を送っていたとはな。」

「や、やめて下さい！卑怯ですよ。エヴァさんの情けない記憶も見せなさい！」

（もしかして真名とキスしたこと等もみられたのでしょうか？）

「あ、あと、お、お前は同性愛者だったのだな…」

「きゃあああああ。そ、そういう言い方やめて下さい！それに違います！」

「ま、まあとりあえずお前という人物はわかった。3つの条件だがちゃんと守ることを約束しよう。これから木乃香絡みとは関係のない時でも力を貸して欲しい時は頼るがいい。血を吸わせてくれるのなら色々手伝ってやろう。」

奏は強力な助力者が出来て嬉しい反面色々見られたくない半生も知られ、複雑な気持ちで、少しふらつきながら寮に戻る事になった。

帰り際、空の飛び方を教えるようエヴァにお願いした。奏は魔法使いの平均の半分以下の魔力しか無いが、魔力資質が少しはある事を魔法世界で教えてもらい知っていた。

魔力自体は低いから攻撃魔法や防御魔法を覚える気は無いが、空を飛ぶ事が出来れば戦闘や逃走の際有利に展開できると考えてエヴァ

をお願いした。
また血を吸わせてもらうことを条件に了承を得た。



エヴァ side

奏が家から出て行った。寮まで見送ろうかとも思ったがキャラではないのでやめておくことにした。遠くに置いて来てしまったチャチャゼロに、茶々丸と一緒に見送るよう念話で連絡をしておく。

本来のエヴァならそれすらもしないのだが、エヴァは奏の過去を見たことで彼女に親近感を覚えていた。奏も自分ほどではないが色んな存在から疎まれ絶望を体験し、そして自分同様自らの力で今を切り開いてきた。

(あいつには詠春等支えてくれる存在もいたがな…)

ずっと一人で自称立派な魔法使い達を殺しながら600年間行き続けて来たエヴァよりはずっと温い生き方だろう。

実はエヴァが奏の記憶を血から読み取ったのはわざとで本当は見ない方法もあった。しかし裏があるのでは？と感じざるを得ない、あの3つの条件の緩さが気になって血から記憶情報を読み取ったのだ。

知ってみれば別に大した事でもなかった…それは奏にとってはの話

だが。

奏は契約を結べば絶対それをエヴァが守ると信じていたのだ。明確に確信できるものがあるわけでもないのに…。

そして信じながらもエヴァにあまり負担にならないような条件を考えて提示したのだ。

他人が自分の為にリスクを負ってでも助けてくれる、そういう行為というのをエヴァは数える程しか知らない。そのような行動にみえてもそれが自分を騙し、最終的に排除する為の策である事だった。

故に奏の思いに温かいものを感じ、奏には悪いが記憶を見てよかったと思った。

ネギ・スプリングフィールドが来てからいい事なんて全然無かった。見ていると死んだナギを彷彿とさせた。さらに恋焦がれいつか呪いを解きに来てくれると思っていたナギが自分をここに閉じ込めた後、意中の女性と子を成していたと知った時何日も枕を涙でぬらした。だから殺すつもりはなかったが、エヴァは例えナギの息子でも遠慮なく血を吸おうと決意していた。

結果は違った形での解呪だったが…。

エヴァはまだ帰ってこないチャチャゼロと茶々丸をおいて先にベッドに移動してねっころがる。

ここ数ヶ月寝る際いつも学校での明るく元気なネギ・スプリングフィールドを思い出し、そこからナギを連想して結果ろくな夢を見ないのだが、今日は久しぶりに気持ちよく眠れそうな気がした。

脳裏に浮かぶのは羽藤奏。昔から狙われているため他人と距離を置こうとする傾向もあるが、本当はただの寂しがり屋。

最近、龍宮真名に仮契約を半強制的にさせられ、表には出さないが心の中ではまんざらでもなく思っている少女。

少し想像するとイラッとした。

（龍宮真名と奏のキス…二人とも気持ち良さそうだったな。……キスも血を吸うのと同じくらい来るモノがあるのだろうか？）

奏の血は今まで吸血したどの人間よりも素晴らしいものだった。味も素晴らしいがそれよりも舐めた途端体全体に広がる快樂。

疎いので確信は出来ないがこれが性的なものとはまったく別のものであるとエヴァは判断していた。

（そういうレベルのモノではない。）

再度奏と真名のキスを思い出す。その時の奏の緩んだ表情を思い返すと少しの苛立ちと体が疼くのを感じた。

首を振り、脳裏に浮かんだ光景を消したエヴァはそのまま掛け布団を顔までかぶる。今日はもうこのまま寝てしまおうと思ったが、奏の血を吸って力が湧き上がってくるような状態の体で寝れるわけもなかった…。

結局寝れたのは帰ってきたチャチャゼロと大量の酒を飲んだ後だった。

13話（後書き）

ナギが生きているという事をエヴァが知らないまま物語は進んでいきます。

ネギ先生がすぐにKOされてしまつてイベントが潰れました。

14話

「成る程、昨日はそんな事があったのか…知らなかったわい。」

「それよりネギ先生はどうですか？」

「エヴァンジンに何もできなく負けたらしいからのお、かなり落胆しておる。しかし、いい経験になったじやろう。ネギ君は少し天狗にもなっておった。600万ドルの賞金首とその従者にたった2人で挑むのが何よりの証拠じゃ。じゃが彼も英雄の息子、ここで腐らず今回の事を糧に成長するはずじゃ。」

「そうですか。」

奏は学園長室で学園長に昨日の件を報告していた。

昨日の行為に後悔はないがそれでも勝手に呪いを解いた事は問題があるのか学園長から直接聞いておきたかった。

解呪の方法は聞かれたがもちろん答えなかった。しばらく学園長が無言で見ていたがこちらが絶対に言う気がないとわかると引き下がってくれた。

学園長は呪いが解けたことそのものに関しては喜んでいるようだった。どうやら学園長もエヴァの呪いがいつか解ける事を願っていたそうだ：勿論それはネギの血を吸う以外の方法でだが…。そして呪いを掛けた張本人が死んだと言われている今その方法を知るわけもなく、故に何も手伝う事もできなかったらしい。そればかりかネギがエヴァに襲われないように対策を練るという、この件に関しては敵対を余儀なくされる関係だったそうだ。

「他の魔法関係者には奏君が解呪したというのは秘匿しておこう。あくまでエヴァンジェリンは自力で解いた：奏君もそれでかまわぬよな？」

「はい。しかし何というか……随分と物分りがいいんですね。」

奏は何故学園長がそこまでエヴァンジェリンに味方するのかわからなかった。

エヴァンジェリンは立派な魔法使い達から疎まれる存在。力を失ってここに閉じ込められているのは彼らにとってむしろ好都合なことではないのだろうかと思ったのだが。

「付き合いは15年になるからの。彼女がどういう人物か知っておるのじゃ。彼女はこっち側から襲おうとしない限り先に仕掛けることはない。基本的に血も必要としないしの。：それにそろそろ新しい道を歩んでもいいじゃろう：。」

「新しい道？」

「いつまでも死んだナギを想い続けるのではなくここから出て新しい生き方を探せということじゃ。」

こちらに背を向けて学園長がいう。どうやら見事に自分の今の言葉で酔っている様だ。

（まあ後最低一年は彼女はここにいますけどね…）

契約でエヴァも中学卒業まではいつでも助力できるよう学園に留まることになっている。

呪いは解けたが学園結界により魔力は未だ封印されている状態なので、学園にいる間は呪いが無くなっているのは学園長以外魔法関係者は誰も気付かないだろう。

「わかりました。とりあえず報告は以上です。せっかくの土曜日ですし、もう戻りますね。」

「うむ。呪いについては個人的には礼を言っておく…しかしもう一度言うがお主が解いたとは誰にもばれないようにの。お主が解呪したことがばれたら木乃香の護衛も多分続けられなくなるぞい。」

奏は了解して学園町室をでる。今日は土曜で学校はお休みだ。午前中の木乃香の護衛は刹那にお願いしている。

元々前の刹那の護衛方法が少しいびつただけで、今の刹那の護衛ならば詠春が奏に護衛を依頼する事もなかっただろうと感じる。時間があるので未だあまり知らない学園都市を散歩でもしてみようかと奏が女子中等部から出ようとしたところ、入り口にエヴァと茶々丸がいた。

「おはようございます。奏様。」

「はい。おはようございます。茶々丸さん。エヴァさんもおはようございます。」

「おい奏…学園長は何か言ってきたか？」

挨拶も無しにエヴァが話しかけてくる。表情は真剣だ。

「学園長と話していること知っていたんですね。話はしましたが呪いを解いた事に関してはおとがめ等は無いそうです。ただ私が解いた事は誰にも知られないと言われました。」

「…そうか。」

「もしかして心配してくれたんですか？」

「当然だ。馬鹿者。私の為に解呪して護衛を辞めさせられ転校もさせられるのはさすがに私だって居心地が悪い。」

「別に全てエヴァさんの為ってわけでの行動でもなかったのですが。」

「それもわかっている。血を飲んで記憶をのぞいたからな。お前の情報はもうこちらには筒抜けだ。」

「ぐっ…」

相手に気を使いこちらが少し楽できる程度の条件ですましたのだが記憶を見られてしまい、結果的に損した気がして奏はちよつと条件を緩くしたことを後悔する。

「ふん！じじいから何も言われなかったのなら私も特に用事は無い。邪魔したな。」

「マスター、見事なツンデレです。ここに来る前は近衛様の対応次第では脅迫も辞さないデレっぷりが、奏様本人の前では無理にキャ

ラ作ってツンツクツン。もしかして恥ずかしくて会話ができないんですか？

昨日は酔って私と姉様にあんなに奏様の事を話していたのに…」

「茶々丸うううう！」

エヴァが茶々丸の後ろにまわってネジを回そうとするが、空を飛んで茶々丸が逃げていく。エヴァはそれを悔しがってみる事しか出来ない。

「あんのポケロボ！やっぱり最近おかしいぞ！」

「何か弄ばれていますね。」

「そうなのだ！あいつ前に車に轢かれてから仕事は問題ないが、私を小馬鹿にしたり、からかうようになっているのだ！そろそろメンテが必要かもしれん。

…そ、それと奏。茶々丸が言った事を鵜呑みにするなよ！」

「わかりました。聞かなかったってことにします。」

「そ、それで良い。」

寮付近を通ってエヴァも家に戻るため、その後寮に戻りながらエヴァと少し雑談した。

飛空魔法や今は動けない状態のチャチャゼロの事、そしてねぎや呪いの事。

学園長から聞いたネギが落ち込んでいることをエヴァに言ったら、

「天狗だな。」

と一蹴された。

そして寮に着いたところでエヴァと別れることにした。

「それでは月曜日からまた改めて宜しくお願いしますね。エヴァさん。」

「う、うむ。宜しく頼む、奏。」

別れ際のエヴァの顔は心なしか少し赤いように奏には見えた。

（あっ！）

「エヴァさん少し待ってください！」

こちらに背を向けて帰ろうとしていたエヴァを引き止める。
別れ際に守銭奴の奏はある出来事を思い出した。

「む？」

「私から盗った転移魔法符返してください。あれ私にとってはかなり高いんですから。」

「あれか。家においてあるぞ。…そうだ！奏。…時間があるのなら今から私の家に取り来るといい！」

「私は時間にまだ余裕ありますので大丈夫ですが、今から取りに行ってもいいんですか？」

「問題ない。」

それから何故か嬉しそうなエヴァと一緒に彼女の家に向かうことになったのだが、家に行く前に町で買い物につき合わされ、茶々丸がいつの間にか側におりエヴァをからかって追いかけてこしたり、さらには家についてからも茶菓子を出されたりと中々帰してもらえなかった。

結局転移魔法符を返してもらって寮に着いた頃には正午をかるく回っていた。

刹那にもちろん怒られた。

14話（後書き）

勝手に後付けで章をつけるとしたらこの話で2章のエヴァ編が終わった感じです。1章はもちろん刹那で。

15話

夜、奏はタカミチと会っていた。タカミチは奏の転入初日の奏を出迎えてからは出張でここを離れ今日帰ってきていた。

「こんばんわ。奏君。学校はどうだい？楽しめているかな？」

「問題が立て続けに起きていて楽しむ暇が無いという感じですかね。」

ここ数日を思い出す。刹那との問題や真名との仮契約、そしてエヴァとのいざこざ。

とても学園生活を楽しむ余裕などなかった。

「さて、頼まれていたのは最高級の治療薬を2つだったよね？本当に買ってくれるんだろ？僕が前払いで向こうで買ったけど君が買ってくれないと僕も困るよ。」

タカミチが苦笑しながら言う。最高級の治療薬は1つ50万。かなりの高値だが、様々な異常に効果を発する万能薬でありさらに腕の一本くらいならくつつけてくれる上等な治療薬でもある。奏はその場で現金でタカミチに払う。

「中学生が100万円の束を取り出して払う姿を見るのはもしかしたらこの世界で僕が初めてかもしれないね。」

「わかりませんよ？最近の中学生は進んでいるともいいますからね。」

受け取った小さなビンの魔法薬を鞆に入れる。

「そういえば来週から修学旅行ってのは聞いているかい？」

「はい。詠春から転入する前に修学旅行が近く、旅行先は京都になる可能性が高いと聞かされていました。私旅費積み立てしていますけどね。」

「大丈夫。お金は西の長から既に支払われているようだよ。それより来週からの修学旅行だけど奏君、できればネギ君をフォローしてくれないかい？勿論木乃香君の護衛に余裕を感じたときだけで構わないから。」

話を聞くとタカミチは数日後またここを離れなければいけないそう
だ。

もう教師辞めればいいのと思わないでもないが奏はいわない。

最近、とぼっちりに近い襲撃を受けて不憫な目にあったネギの事を思うと断るのもかわいそうな気がして余裕があったらという条件で承諾した。

ちよつと報酬も期待したけどそこはタカミチ、結構せこくてスルーされた。

「そういえば来る21日は明日菜さんの誕生日だそうですよ。明日菜さんから聞いたのですがタカミチは昔から明日菜さんの保護者のような立場だったとの事ですし、プレゼントの一つでもしてみたらどうですか？彼女も喜ぶと思いますよ。」

部屋から出る前に、明日菜の恋愛成就を手伝うと約束したのでとりあえず多忙で忘れているかもしれないタカミチに伝えておいた。



「ただいま。」

「おかえりなさい。奏さん。」

部屋に戻ると精神統一でもしていたのだろうか、刀をそばに置いて床に正座している刹那がそのまま声だけで出迎えてくる。

「刹那さん。真名は？」

「夜の警備です。真名の眼は夜目も利くので重宝されているようです。かなり報酬もふっかけているようですが。」

相変わらずの守銭奴っぷりにため息が漏れる。

奏は夜は三人で一緒にテレビ見たりご飯食べたりして過ごしたいと思っっているのだが。

「刹那の嬢ちゃん。この嬢ちゃんかい？」

当然部屋に響いた男の声に驚く。しかし周りにはどこにも男なんていない。

「嬢ちゃん。こっちだこっち。」

声の聞こえる刹那の側あたりを見ると、そこにはフェ「オコジョな。」
「…オコジョがいた。」

「オコジョが喋ってます。」

「まあ、魔法関係者だと思ってくれればいいよ。ちょっと悪い事してオコジョに変えられちゃってな。」

「悪い事？」

「色々さ。一昨日嬢ちゃんのブラとかも盗ったりしたのも俺っちさ。」

下着盗難？ 奏にそのような記憶はない。そんなに大量の下着を所持しているわけではないのでなくなったらすぐに判ると思うのだが…。

「奏さんの下着は私がこのオコジョを懲らしめて元の場所に戻しておきました。」

オコジョをひと睨みして刹那が奏に言う。

「あ、ありがとうございます。それで刹那さん。何故そのような下着泥棒が私たちの部屋にいるのですか？」

ノリといい、しでかした事といい、刹那に毛嫌いされそうなタイプだと感じた奏は不思議に思いながら刹那に問う。

対して刹那は緊張しているのだろうか？そわそわして一向に口を紡がない。

オコジョもタバコを吸いながら刹那を見ている。

しばらくするとようやく刹那がこちらを見て喋りだした。

「このオコジョはネギ先生のペットみたいなものです。最近お嬢様の護衛を近くでするようになってネギ先生の隣にいるこのオコジョがただの小動物じゃないことに気付いたんです。色んな所で下着も盗みますし。それで今日これがここに居る理由ですが…。

奏さん…真名と仮契約という信頼した者達がするという契約を交わしたのは本当ですか？」

瞬間奏は固まる。

そして先日真名の甘い言葉に強引なキス、そして溺れた自分を思い出して自然と顔が赤くなるのを自覚する。

「あ、あわわ…」

「そうですか…真名が言っていたのは本当だったのですね。」

「ま、真名が…？」

「はい。これ見よがしに仮契約カードというのをちらつかせて、仮契約の事を自慢げに語ってきました。曰く互いに信頼しあった人た

ちでする行為、曰く仮契約をしたパートナーは恋人関係になることも多い、曰く「わ、わかりました！もう結構です。」：半分は何かの冗談だと思ったのですが…」

「で、でも無理やりでしたよ。抵抗なんてさせてもらえませんでしたし…多分…」

後半からまったく抵抗しなかったなんて言えない流れに語尾が弱くなる。

「では、私ともできますか？」

（せ、刹那さんと仮契約？）

「い、いえ、やりたくとも私たちは共に魔法関連に疎い剣士で魔方阵なんてのも描けないでしょう？」

「アルベールさん。お願いします。」

「よし来た。5万オコジョゲットだぜ。」

オコジョが特殊な詠唱をすると床に魔方陣が描かれる。

詳細はわからないが確かに真名との時と同じ魔方陣に見える。

「せせ、刹那さん。本気なんですか？ 私たち出会ってまだ1週間もたってませんよ？ そ、それに私は木乃香の護衛をするのは中学までの契約で、それ以降は一緒にいれるかもわかりませんし：」

無意識に早口になりながら刹那を説得する。

はつきり言って刹那との関係はまだ浅い。色々過去の事を話し合ったりしたがそれでもまだ出会って1週間にも満たないのだ。

奏も真名から仮契約の話が無理やりされた後聞いたが、どう考えてもそういう事をするのは早いというか、いやそもそもそんな事していいのだろうかと思ってしまう。

「いえ確かに出会ってまだ数日ですけど私は奏さんの事を慕っていますし、奏さんが中学までの護衛契約というのも長から聞いています。奏さんが例えそれ以降お嬢様の護衛じゃなくなっても私は死ぬまでお嬢様の護衛をするでしょう。そしてそれを誇りに思っています。」

でも例え離れても繋がっている証が欲しいんです。軽い気持ちで言っているではありません！」

（せ、刹那さんってこんなキャラだっけ？）

木乃香と仲直りさせた時の事を思い出すと今の刹那とは似ても似つかない。

「それとも奏さんは私と仮契約するのは嫌ですか？」

捌め手^{から}…。

刹那は不安げな顔でこちらを見ている。決して芝居ではないだろう。しかしそれでもそのような言葉を言えば自分が断りきれないのを知って言っている。奏にはそのように感じた。

前に刹那の気持ちの一端を聞いた際素直にうれしいと返答したこと、似たような境遇から拒絶されることを互いに嫌っているのを知っていて、自分に明らかに利の無い事意外は基本的に受け入れてしまう優柔不断なヘタレ性質。

そういうの全てを読まれての行動に見えた。

「諦めたほうがいいぜ。刹那の嬢ちゃんは本気さ。本気と書いてマジさ。できればそういう事はネギの兄貴とやって欲しいと思ったが如何せん想いが強すぎる。俺たちには人の好意を計る特殊能力があるんだが、刹那の嬢ちゃんのアンタへの想いは高すぎて兄貴とは無理そうだ。それにさっき計ったがアンタも刹那の嬢ちゃん好きだろ。並みの値じゃないぞ。」

（そういう事は本人の前で言わないで下さい！）

「いや、それはですね。多分ですけど恋愛的な意味での好きとはまた違っていてでs「奏さん！」はい？」

「その話は前にも聞きましたし、わかっているつもりです。その上で私に多少の好意があり、仮契約する際の行為に抵抗がないのでしたら私と契って下さい。」

沈黙が部屋を包む。

「……………いいんですか？後悔とかしないんですか？」

刹那が力強く頷く。

刹那にも奏が観念してもう断る気がない事が伝わったらしい。こちらに少し笑みを浮かべている。

「しかし…女同士のキスか…さすがにはじめて見るぜ！ゲヘヘ。」

「「とりあえずオコジョは部屋から出て行ってください。」」

刹那がオコジョを窓から投げて戻ってくる。

そして二人で魔方陣の中に入って見詰め合う。

（ドキドキが止まりません。今からする行為は友人の範疇外のことなのに……私はふしだらな性質なのでしょうか…）

行動には移せない：元来度胸のない奏にそんな事自分からできるわけない。

刹那を見ると彼女も彼女で戸惑っていた。

（ま、まあ似たような存在ですしね…）

そんな事を考えていると意を決したらしい刹那が奏の背中に手を回し抱き寄せてきた。

さきほどよりも高鳴る心臓に思考が麻痺する。そして意図せず奏は目を閉じ受け入れる体制をとってしまった。

刹那が今どのような顔をしているのかわからない。刹那との距離は顔以外は零だ。脚もお腹も胸も密着しているの感じる。刹那が抱きしめてから何もしてこないのので奏も目を閉じたまま刹那の背中に手を恐る恐るまわした。

そしてやわらかいものが唇に触れるのを感じた。

先日の真名とは違う触れているだけの優しいキス。奏は思い出したのを刹那に悪い気がして今はこの場から真名の存在を忘れて刹那を感じた。

魔方陣が光を放っているようで、目を閉じながらも少し眩さを感じる。しかしそんな事どうでもよく、緊張と満たされる思いにより息の仕方も忘れ、奏はただ強く刹那を抱きしめた。

光が止んで奏は息苦しくなり顔を離す。数十秒程度だろうが数分に感じるほど体感的に長く感じた。

「はぁ…はぁ…。」

「はぁ…ふう…」

二人で息を荒くしながら見詰め合う。自分がどんな顔しているのかわからないがかなり緩んだ情けない顔をしているように思う。刹那が抱きしめている腕を離さないので奏も離さない。

言葉を交わさずに見詰め合っていると、刹那が大きな呼吸を一度して再度顔を近づけてキスをしてきた。

仮契約は成ったはずで最早意味の無いはずの行為に一瞬疑問を感じたが、唇を割って入ってきた刹那の舌で思考が中止させられた。

反射的に体を離そうとしてしまうが、その時刹那の背中から生えた翼が奏の体を包み込んできた。

手だけでなく翼でも抱き寄せられ、刹那が自分の精気に夢中になっていると奏はそこで初めて理解する。過去の刹那が翼を出すときはほとんどこの体質に起因している。

抵抗できないわけではなかった。しかし奏もあまりの心地よさと刹那の積極的に自分を求める行為に愛おしさのようなものを感じ、そのまま刹那の求めを彼女が満足するまで受け入れた。

奏と刹那がキスを交わしている側には一枚のカードが落ちていた。

15話（後書き）

ネギまで百合書こうと思った時一番最初に想像したのが、刹那が翼で抱きしめるシチュだったり。

原作の絵見るとそんなに翼大きくないから無理かなと思わないでもなかったけど：

16話

「さて、私に満足のいく説明をしてもらおうか。」

絶賛正座中である。今はまだ早朝の4時。

目の前にはパジャマ姿でとてもいい笑顔の真名が仁王立ちでこちらを見下ろしている。

説明はもちろん昨日の事なのだろう。ベッドでは刹那がカードを胸に当てて抱きしめながら幸せそうな顔で寝ている。

昨日はあれから刹那が奏の精気に興奮し長い間キスをせがんで来た。しかし奏もあの時既に刹那に酔っていて彼女からのキスを受け入れそして求めた。

仮契約儀式が終わり互いに満足した後は二人とも半分放心状態で、大した会話をする事も無く自然におやすみのキスをして一緒に手を繋いで寝た。

キス以上の何かがあったわけではないが思い返すと自分で穴を掘って入りたい気持ちになる。

そして今、刹那が写ったカードを発見した真名にたたき起こされ説明を求められている状況なのだが。

「え、え」と、何を言っても満足はしてくれないかなと思うわけ
です。」

「早く経緯を説明しろ。」

低く小さな声が部屋に響く。

（こ、こんな怖い真名は初めてかもしれません。）

「は、はい。私と真名様の仮契約を知った刹那さんが昨日ネギ先生
のペットで仮契約魔方阵を描く事のできるオコジヨを連れて来て、
自分ともして下さいと言ってきました。」

「それではいはい受け入れたと？」

「う……彼女の想いと覚悟とさらには捌め手のようなものまで使わ
れまして……そこまで必死に私なんかと仮契約を結びたいのかと、そ
んな刹那さんを見ていたらこっちもつい嬉しくなってしまうて……
流された感はありませんがそれでも後悔は……していません。」

真名の視線は怖いけど今の本当の気持ちを告白する。

「…そうか」

「お、怒らないんですか？」

「怒っているさ。ただ先日お前と刹那が手を繋いで一緒に寝ているのを見てその後軽率な行動をとってしまった自分にも腹が立っているだけだ。刹那に仮契約の事を言わなければそもそもこんな事にはなっていなかった。」

真名がため息をついて目を閉じる。何やら考え事をしているようだがその沈黙は怖い。

しばらくすると一応の納得はしたのか表情は先よりは柔らかくなっていた気がした。

「ふう…とりあえず寝ようか。」

「そ、そうですね。」

ベッドが二つとも埋まる事になるためソファにでも移動しようとしたところで真名に片手で抱き上げられる。

「もちろん。私のベッドでだ。」

真名に抱き上げられた奏はそのまま真名のベッドにゆっくり置かれた。真名も隣に横になってくる。

さっきの怖い笑みを浮かべた真名の表情がちらついて少しまだ恐ろしいのだが、すぐに真名から抱き寄せられた。奏の顔が真名の胸に沈む。

石鹸と真名の匂いに少し鼓動が高鳴るのを感じる。

「奏は本当にあれだね。私の気持ちを以前聞いておいて刹那との仮契約をも受けるなんて本当に優柔不断でヘタレだね。」

「ごめんなさい。」

痛い言葉を突かれるがそれ以外にいうことができない。

「まあいいさ。そういうところも好きだし、短所だけど長所でもあると思っているから。…おやすみ。奏。」

「はい。おやすみなさい。真名。」

その後も無言で優しく真名に頭を撫でられ続けたが会話があるわけでもなくそのまま奏は寝入った。

◆
日曜朝、奏と刹那は訓練場に来ていた。前に真名と来た場所でもちろんアーティファクトの実験のためだ。

奏は朝の事を思い出す。朝の刹那は昨日の自分に似つかわしくない行動を思い返していたのかずっと顔が赤かった。

奏は一応先に真名に叩き起こされその時思い返してかなりの羞恥を覚えたから朝に刹那ほどは取り乱さなかったが、それでもやはり恥ずかしくて刹那の顔はろくに見れなかった。

真名が時折刹那を軽く睨んでいたが刹那は真名に反応する余裕も無いらしく個人的には助かったと安心した。

真名は朝から仕事があるらしく朝ごはんを食べるといち早く部屋から出て行ったが：

「奏、昨日の今日だから何もないとは思うけど…一々の行動は慎重にね。」

少し怖い笑みを浮かべて出て行く真名に奏は無言でコクコクとうなづく事しか出来なかった。

そこからようやく会話が出来る程度まで落ち着いた刹那にアーティファクトの説明をし、その後学園長に午前中だけ木乃香の事をお願い

いし、二人で修行をしつつアーティファクトの能力を確かめるためにここに来たのだが、

「それでこのカードに向かってどう念じればいいんですか？」

「えーと、真名はアデアット！と言っていました。来いって意味だそうです。」

「アデアット！」

刹那がカードを持って復唱する：するとカードが光り変化しだした。

「腕輪：ですね。」

現れたのは何の変哲もない銀の腕輪。デザインも施されていないシンプルな形だ。

刹那が手に取る。

「：とりあえず腕輪を付けてみたらどうですか？」

言われたとおりに刹那が腕輪を付ける。：が特に何の変化もない。

「おかしいですね、真名の場合は…」

（…もしかしたら）

「刹那さん。気を使ってみてくれませんか？」

「気ですか？」

「はい。確かめてみたい事があります。」

刹那が気を使う…しかし体に纏ったのは通常の気。

「…そうですね。一度解いて今度は私から力が供給されているのを想像しながらもう一度気を使ってみてください」

「…力が流れて来ているのをイメージする感じでしょうか？」

「そうですね。ぴったりです。」

刹那が一端目を閉じる。イメージしているのだろう。だが途中で頬

が少し赤く染まる。

(どういう想像しているのでしょうか…)

しばらくすると腕輪から紅気が発生しそのまま手に、そして剣に伸びていった。

「これは…奏さんの…気？」

半分勘だったがどうやら間違っていないなかったらしい。真名の時と同じなようだ。

「そうですね。真名のアーティファクトも使用する際私の気を使いましてのもしかしたらと思ったんです。ちなみに腕輪からその先の手、剣にかけてだけですか？体にも纏えそうですか？」

「いえ…無理そうです。あっ！」

途端紅気が霧散する。

「どうしたんですか？」

「いえ、体には通常の気を纏わそうとしたら急に制御するのを難しく感じまして。」

「同時には使用不可…ということでしょうか？」

「いえ、漠然とただ体に気を纏わそうとしたのが原因だと思います。体を気で纏う際は腕輪から先だけは紅気だけを使うよう意識すれば同時に使えるかと。」

「訓練が必要だと思いますが。」

「そうですか…刹那さんが紅気を使うと私の血がほんの少しずつ消費されていきますがそのことに関してはあまり気にしないで下さいね。所詮腕輪から剣までの少量の気量ですので。」

「いえ、しかし…それでは」

「必要な時は気にしないで下さいって事です。私も木乃香さんも気にして結果木乃香さんを守れなかったでは護衛として話になりませんよ。気遣う優しさは嬉しく感じますが木乃香さんが危機の時は一番に彼女の事を考えて行動してください。それが護衛というものです。」

「……わかりました。何よりも最優先でお嬢様を守ります。」

釈然としない表情を刹那は見せてはいたが、それでも奏の真剣な表情を数秒見ていると最終的に納得したようだった。

その後、午前中一杯刹那は気と紅気を同時に使う練習、奏は前に真名から教えてもらった訓練場にある魔法機器を使って仮想フィールドを展開して鬼を出現させ闘った。

そして修行が終わる頃には立ちくらみを感じた。

仮想鬼との戦いでは一切血を使わなかったが刹那に供給される紅気、一昨日のエヴァへからの吸血、3日前の修行の際の真名への供給……奏には血が全然足りていなかった。

（レバーはそんなに好きじゃないのですが…）

16話（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございました。

17話

月曜日。奏は明日菜とネギに自分の事を説明するためお昼のお弁当を屋上で一緒に食べることにしていた。

「しかし奏がそっち方面の人間だとは思わなかったわ。」

「それはこちらの台詞ですよ。ネギ先生はスプリングフィールドの名前と杖から、もしかしたらと思っていましたけど明日菜さんは学校で見る限りにおいてはどう見ても一般人でしたし。」

先日の茶々丸と戦っていた明日菜を思い出す。茶々丸を突破できなかったがその動きは一般レベルではなかったように思う。

「あの、奏さんってもしかして僕のお父さんを知っているのですか？」

「はい。明日菜さんは先日の戦いで見てしまったかもしれませんが私は純粋な人間はありません。鬼という存在と人間のハーフです。詳細は語りませんが私の父でもある鬼が母を殺そうとした時に助けてくれたのがナギ・スプリングフィールド率いる英雄達と聞いています。」

「父さんが…」

さぞや格好いい父親を想像しているのだろう。ネギがトリップしている。

「まあ色々あって今は刹那さんと一緒に木乃香さんの護衛をします。」

「このかの？」

「はい。体質や家柄等木乃香さんには狙われる要素がたんまりあるそうでした。あっ！木乃香さんには護衛の事言わないで下さいね。あまり気を使わせたくありませんので。」

「ふーん…このかがねえ…。」

（こんなところですかね…。）

説明するべき事を説明した奏は弁当をあけて少し遅れての昼ごはんを食べ始める。

目の前では明日菜がいつまでもトリップしたままのネギを叩いて無理やり戻していた。

明日菜はガキは嫌いと前に雑談していた時に言っていた気がするが、こうして見るといいパートナーに見える。だが明日菜をこのまま裏に関わらせていいのか疑問も残る。

(……)

しばらく食べながら考えるが、それを本人に言うのはやめておくことにした。

英雄の息子。ネギが学園長を初めとした魔法関連の人たちから放任されているとは思えない。

ネギが明日菜と仮契約していて学園長等が何も言わないということは、即ちそういうことなのだろう。最早自分が口出ししていいことではない。

さらに言えば明日菜自身も内の正義感から何を言ってもネギを助けるだろうし、何より奏はネギと深く関わる事で魔法使い達に目をつけられるのを想像して億劫になったのでスルーの精神でいくことにした。

「そういえば奏さん。エヴァンジェリンさんから助けていただきありがとうございます。ありがとうございました。奏さんが助けてくれなきゃ僕血を吸われて死んじゃうところでした。」

「いえ、彼女も死ぬまでは吸わないと思いますが…それに個人的な問題もあって彼女とは一戦交えなければならなかったので気にしないでいいですよ。ネギ先生を助けたのはあくまで次いです。」

「それでも…あのエヴァンジェリンさんに勝ってしまうなんて強いんですね。尊敬しちゃいます！」

（あゝ…非常に面倒くさいです。）

どうやって勝ったかなんて言ったら、子供で英雄の息子。正義感も強そうなのできつと釈然としない反応をしてくるだろう。

まずい昼食にもしたくもないので、油断を誘っての相方による完全死角からの不意打ちがきっかけで勝利した事は黙っておく事にした。

その後鐘がなるまで昼食を食べながら雑談をし、もし自分達が木乃香の側にいない場合に彼女に危機が迫った時には助けてあげて欲しい旨をネギに頼んだ。



放課後、奏は明後日から修学旅行なので下準備のため町に買い物に来ていた。側にはエヴァと茶々丸。

エヴァも呪いが解けると思ってもいなかったらしく準備をしていなかったようだ。

（刹那さんが時間をくれましたが、はっきり言って何も買うものないですねえ…）

別におニューの服を披露したい願望も無ければ化粧品が欲しいというわけでもない。

それに先日タカミチから100万で魔法薬も買ったのでそんなに無駄遣いもしたくなかった。

「奏様、あまり意識を他に傾けてはマスターに失礼ですよ。見てください。見事な膨れっ面でしょう？」

「膨れっ面などしておらんわ！」

「すみません。買い物をしてきて下さいと刹那さんに言われましたが本当に何を買っていいかわからなくて…。エヴァさんは何か買っておくものあるんですか？お菓子ですか？お菓子なのでしょう。」

「子ども扱いするな！……それも無いわけじゃないが。」

「マスターは奏様とお出かけできればそれでいいのです。旅行に必要なものは一昨日3人で町に行った際に私が購入済です。」

「お、おい！茶々丸！…もういい。おい奏。行くぞ。」

どうやら先日のような追いかけっこはしないようだ。

何も買う気はなかったがせっかく貰った休みなのだから二人と町を見て楽しむことにした。



「そこ行くお嬢ちゃん達！ちょっと見ていかないかい？かわいい装飾品沢山あるぜ。」

エヴァが大量のお菓子を買って込んで買い物も終わり寮に戻ろうと歩いていたところ、路上の脇に座り首飾りや指輪などの装飾品を地面に敷いた布の上に並べて売っている若い男に声をかけられた。

「そっちの子はロボットみたいだね。それで君たち二人は姉妹かい？」

「黒と金の髪を見て最初に姉妹と質問をするなんて神経を疑うレベルですね。マニュアル通り物言えばいいと思っっているのですか？ちなみに私を今度ロボットと言ったら泣くまで殴ります。最終進化系ガイノイドと呼びなさい。」

「す、すいませんでした。と、ところで何か買っていないかい？
君たちが手を繋いで歩いているから姉妹か何かと思ったんだけど…
：色々ペア物とか置いているよ。よかったら見て行ってよ。」

奏は繋がれた手を見る。買い物をしてながら歩いているとエヴァが手を握ってきたから特に意識する事もなく握り返し歩いていた。

（あまりそういう装飾品に興味は無いのですが。）

「おい！これは何だ？」

エヴァがこういう装飾品に興味があると思っていたなかった奏は彼女が指差した物を見してみる。

エヴァが指差したのは金の円状の貴金属を2本の銀の鎖が繋いだネックレス。

「これかい？満月を模したネックレスなんだが半分から割れるんだよ。鎖が二つあるだろ？ペアネックレスなのさ。離れていてもネックレスで精神的に通じ、近くにいるときは互いに首にかけたままくっつけてみるのも雰囲気があるといいだろ？考えてつけた名前は『月明かりの○ズル』って言うんだが。」

「いやいやいや、完全に商品もネームも『らんだむ○ンジョン』からパクッているよね？ゲームー舐めないで下さい糞野郎。」

まさか女である奏が少々マニアックなゲームしているとは思わなかったのだろう。目の前の男が少し怯む。

「何だ？パクリか：おい！これ5000円で寄越せ。」

「ただ駄目だ。原価だけで3000円は軽く超えちゃうんだから。」

「うるさい。客に嘘ついた罰だ。5000円で寄越せ。さもないと茶々丸に搭載の超大音声ボイスでここら一带にお前の商品がパクリ商品だという事を公表してやる。」

「わわわかりました。解りましたからそういう事しないでください。」

エヴァが男から奪うようにネックレスを取ると男は商品をまとめて泣きながらどこかに走っていった。

「ふん！男のくせに情けない奴だ。まあいい。奏、これを受け取れ。」

エヴァがネックレスを半分に割り片方を奏に渡す。

「え？茶々丸にあげたらどうですか？私はほら、十字のお守り機能付きの奴さげていますし。」

「いえ、私にはこんなチャチな物不要です。それに奏さんでは無いと意味がありません。貰っておいてあげてください。」

（チャチって…）

「は…はあ。」

渡されたネックレスを首に掛ける。奏が首に掛けたのを確認するとエヴァも自分の首に片方の半月を掛けた。

「ふん！もう今日買うものはない。帰るぞ。」

エヴァが先に歩き出し奏も茶々丸も後から置いていかれない様ついていった。



「お見事です。マスター。欲を言えばもう少し萌えというものを意識して欲しかったのですが、600年ほどぼっちのマスターの事を考慮しますと十分及第点と言えましょう。」

「うううるさい！」

17話（後書き）

幕間ついでに「らんだむダンジョン」を勧めてみました。

無料のPC用フリーゲームですがクリアするのに40時間はかかる大作です。

武器や防具の説明などで何回も笑いました。

はつきり言って下手な商業RPGより楽しめる出来だと思えますので、まだプレイしていない人は是非プレイしてみてください。

次回より修学旅行編です。

18話

「それでは皆さん、15年度の修学旅行が始まりました。この四泊五日の旅行で楽しい思い出を一杯作っていきましょう。」

新幹線の中でネギが席に座るA組のクラスメイトにこれからの予定や注意点などを伝えている。

エヴァとの買い物から二日経っていた。

その間にエヴァがネギに軽く謝罪してもう襲わないことを条件に和解したり、明日菜の誕生日があったりした。

明日菜は誕生日にタカミチからぬいぐるみを貰ったそうだ。

とても嬉しがっていたが奏はタカミチがまったく明日菜を女性としてみてない事が判り、手伝うとは言ったけど心の中で絶対無理と結論付けた。

エヴァと茶々丸も修学旅行に参加している。本来なら行けなかったが今は呪いも解けており学園外だから魔力等も元通りである。

エヴァを見ると彼女はネギの話をまったく聞いておらず窓の外の景色に夢中になっていた。そして茶々丸はそんなエヴァを録画している。

彼女達は同じ6班である。奏の班は刹那とエヴァ、茶々丸、そしてザジ・レイニーデいの5名だ。本当は6名だが1人は欠席だった。

個人的には刹那か自分のどちらかは木乃香の班に入っておきたかったが、修学旅行の班決めは転入前に既に決まっておき奏は自動的に

少ない6班に回された。

刹那は当時は木乃香を離れて守るスタンスを取っていたので班は別だった。

「……奏。」

「は、はい？」

修学旅行中どのように木乃香を護衛をすればいいのか考えていると隣から声を掛けられた。

ザジ・レイニーデイ。同じ班の中で唯一今まで話した事もない存在だ。

ザジはこちらをじーっと見ていて、その表情からは何を考えているのかまったくわからない。

右隣の刹那を見ると刹那も驚いていた。班のメンバーを聞いた時刹那からザジの事を少し聞いたが、彼女はいつも無言で基本的に誰とも口をきかないそうだ。

刹那が驚いているのはきつと彼女から話しかけてきたからなのだろう。

「奏…何者？」

「な、何者って普通の少女に見えませんか？」

鬼であることがばれているとは思えないし、それとは関係ない質問だとしてもかなり電波的な質問で少し反応に困る。

「……」

じーっと無表情でザジがこちらを見ていたがしばらくするとこちらから目を離し、外の景色を見出した。

何が何だかわからないがどうやら会話は終了したようだ。

(…何というか…電波です。)



発車してからはより賑やかになりクラスメイトも席を立って友達と談笑したりカードゲーム等で遊んだりしている。

刹那は隣の車両付近で怪しい人がこちらの車両に入り込んでないか待機するようなので奏は木乃香の側にいることにし移動する。

「こんにちわ。木乃香さん。友達いないので遊んでください。」

「奏く、そんな反応に困る言い方して来ないでや。でも暇ならおしゃべりしよか？」

木乃香も許可してくれたのでとりあえず木乃香に背を向け上に座る。

「いやいやいや、うちの上に座らんでよ。」

「隣が空いているとはいえ、勝手にここに座っていいのかなと思います。この人はどこにいったんですか？」

かばんが置かれているので空席ではないだろう。

「ゆえ？ ゆえならあそこでカードゲームしとる。だから今は座ってええよ。」

指差されたほうを見る。どうやらカードゲームは観客までいて終わりそうな雰囲気になかったので席に置かれている鞆を取って座り、自分の足の上に置く。

これで木乃香を近くで護衛できると一安心したら、向いで自分を見ているクラスメイトに気付いた。

（えーと、確かネギ先生に恋慕している…何とかのどかさん。）

苗字は思い出せなかった。前髪で目を隠しがちのおかつぱさん。先日エヴァとの一件でネギが魔法使いであると知ってから少し観察していたら、ネギに好意を全力で向けていたので覚えていた。

「こんにちはわ。」

「え!?! え、え」と、こんにちはわ。」

「のどかさんですよ。私は羽藤奏です。覚えていましたか? 名前。」

「は、はい。もちろんです。か、奏さんは何で私の名前を? 私…暗くて目立たないのに。」

「いえ、私も恋に恋焦がれる乙女。クラスに全力で恋愛している存在がいたら目だっていきますよ。」

とりあえず無難な嘘をつく、のどかの顔が真っ赤に染まる。染まりながらも何故奏が知っているのか疑問に思っているようだ。

（あんなにわかりやすいのに…知らずは本人ばかりって奴ですね。）

「頑張ってくださいね。年の差だけでなく様々な障害が待ち受けて

いると思いますが覚悟があるのでしたら私も応援します。」

「は、はい…。」

覚悟という言葉に少し力を入れて奏は言った。

言っておいてなんだが目の前の少女はどう見ても裏の世界に向かない。最悪足手まといにすらなるのではないかと感じた。故に出来れば失恋してネギの事は忘れてほしいと願った。

「奏ー。お菓子食べるか？カールあるでー。」

「私は5／8チップを希望します。」

「そんなんとつくの昔に発売中止しとるわ！」

木乃香のつつこみにのどかがクスクス笑う。奏もつられて微笑む。

木乃香も笑いながらお菓子袋をあける。しかし…

開けたお菓子袋には蛙が入っていた。

「へ?。」

木乃香が間抜けな声をだす。

すると開けた袋から蛙が木乃香に向かって飛び出してきた。

奏は木乃香の顔に飛び掛る蛙を素手で掴んで通路に叩き付け、木乃香の持っていたお菓子袋を取って封を閉じる。

そして少し落ち着いたところで蛙が車両全体に大量発生をしていることに気付いた。

(これは…)

奏はすぐに大量の蛙から意識を外し、木乃香とその周囲にのみ意識を集中する。

どのような不意打ちにも対応できるように……

だからネギが親書を奪われるのを回避できなかった。

「あっ…。」

紙で出来た式神がネギから親書を奪って隣の車両に飛んでいく。

奏はネギが親書を詠春のところに持っていく御使いを頼まれた事を知っており、学園長からフォローも頼まれていた。

「……てへっ☆」

軽く自分の頭を叩いて木乃香の事で精一杯だったからしょうがないよねって事で済ますことにした。

（だ、大丈夫です。あの式神が飛んでいった車両には刹那さんがいるはずです。頑張って刹那さん！）



結果的に刹那が式神を斬り落とし親書は奪われずにすんだ。

その時は安心したがそれも束の間。

「……」

目の前では数名のクラスメイトが酔いつぶれている。京都に到着し、まずはしおりに記載の通り清水寺に向かったのだが、清水寺の様々なご利益をもたらすと云われる音羽の滝が水ではなく酒に代えられていた。木乃香は運良く飲まなかったが。

（さっきの蛙といい今回の酒といいやっぱり敵なんですよね…）

刹那に目配せすると刹那も同じ考えらしく頷き、術師が周りに居ないか警戒する。

奏も周囲を確認する。その際目に入ったエヴァはクラスメイトなんてどうでもいいらしく茶々丸と色んなものを見て楽しんでた。

真名はむしろ酒と判ってから少し飲んで気持ちいをハイにしているようだ。

結局術師の気配を感知する事は出来なかった。

しばらくするとネギが刹那に近づき何か話かけていた。ネギも妨害行為ということに気付いたのだろう。

先日説明したから刹那が木乃香の護衛であることをネギは知っている。

その後、奏と刹那とネギで酔いつぶれた生徒を何とか他の先生にばれないようにバスに詰め込んだ。

今回は意図のわからない犯行だが新幹線での事といい完全に上手を取られた一連の出来事に、奏はこれからの楽しいはずの修学旅行が一転して暗いものになっていく気がして人知れずため息を吐いた。

18話（後書き）

ザジはヒロインではないです。姉の存在から正体はあれ濃厚ですが…

19話

ホテル『嵐山』にA組が到着する。

奏は木乃香の故郷の京都であるから護衛はむしろ麻帆良学園より楽になるのではないかと行く前は勝手に想像していた。

一応木乃香はまだ一度も狙われていない。狙われたのはネギの親書と、あとは単なる嫌がらせのようなものだ。木乃香はターゲットではないのかもしれない。だが油断することは出来ない。

学園結界もなくただ相手のフィールドで次の手を常に警戒していないといけないこの状況が、こんなにも神経をすり減らし、難儀なものであると奏は知らなかった。

（護衛なんてこの仕事が初めてですからね、…その点刹那さんはすごいです。）

バスから木乃香や奏より先に降りた刹那は周囲を警戒しているがそこに疲労感を感じられない。

常に刹那も神経を研ぎ澄まし周囲を警戒していたはずなのだが。すごい集中力だと感心する。

木乃香と奏もバスから降りる。

新幹線内、そして清水寺、行く所々での犯行は間違いなく修学旅行

の時間と移動の予定を把握してのものであり、間違いなくこのホテルの事も知っているだろう。
考えるため息が出た。



ホテルに入り班ごとで別れ割り当ての部屋に荷物を置いていると、

「おいもう疲れたのか？ 奏。修学旅行は初日だぞ。」

若干テンションの高いエヴァに部屋で話しかけられる。
学園が出るのが15年ぶりだということからしょうがないのかもしれないが。

「ええ、仕事が思いのほか疲れまして。」

サジも部屋にいたので一応護衛という言葉は使わないで説明したが
エヴァにはちゃんと通じているようだ。

「手伝いは必要か？」

「いえ、危機に瀕したときというのが契約内容ですから今はいいで

す。エヴァさんは旅行を楽しんでください。」

「むゝ。何かそう言われると楽しめなくなるのだが。」

「必要になったら必ず要請しますよ。エヴァさんがどんなに楽しんでいる時でも。」

「わかった。その時は遠慮無く言うがいい。」

「本当に遠慮なく言ってくださって結構ですよ奏様。マスターは奏様のお手伝いなら心から喜んでするはずですから。」

「だ、黙れ！ボケロボ。」

相変わらずの変な主従関係に少し笑いながら6班のみんなでロビーに移動する。

数分後、ロビーではネギやしずな先生が今後の予定を集合したクラスの皆に伝えていた。

本日の予定はもうほとんど終わりで、あとは風呂に入って寝るくらいである。

一応班長同士の集まりはあるが…。

ちなみに6班の班長は奏である。元々は刹那だったのだが刹那には護衛に専念してもらいたく数日前に代わってあげた。

「それでは刹那さん。これから一人になりますが木乃香さんの事宜しく願います。」

「はい。こちらは任せてください。」

話が終わりクラスメイト達が続々と風呂に入りに行く。奏は班長集まりのため他の班の班長やしずな先生と一緒に移動する事にした。何も起こらない事を祈りつつ。



だが：どうやら向こうは一枚も二枚も上手だったらしい。

現在奏は刹那とネギと明日菜の4人で、木乃香を背負い着ぐるみを着た眼鏡の呪符使いを追っている。

木乃香がさらわれた際、仮契約のおかげで刹那と念話ですぐに連絡を取り合うことができ、班長集合を花摘みの嘘で抜けたのだが

（まさか本当に木乃香さんが狙われるとは思っていませんでした。）

関西呪術協会の長の娘を呪符使いが拉致をする。
それはもう詠春と会うまでは呪術協会の人たちも信用は一切してはならないという事。

どうやら相手は電車に乗って逃げるようで、駅の方に向かっている。
人がまったく居ないのはあの呪符使いが前もって術符でも貼っていたのかもしれない。

用意周到。

ここで電車に乗らせたらまずいと感じた奏は人もいないのに遠慮なく鬼と成り、身体強化された体で呪符使いとの距離を縮める。

しかし、あと少しの所で横から殺気を感じ、同時に放たれた拳を回避した。

鬼。

放たれた拳の方をみると鬼がいた。

数年前から頻繁に命を狙ってきた奴らとそう変わらない体躯。

目前に現れた鬼に刹那たち3人も立ち止まる。

それどころか刹那達だけでなく眼鏡の呪符使いもこちら側を見て驚いていた。

（私たちを見て…ではありませんね。鬼を見て驚いています……どうやら彼女が呼び寄せた鬼ではないようですね。）

「嬢ちゃん。わいと遊ぼうか。」

「……3人とも彼女を追ってください。どうやらこの鬼は私だけに用事があるようです。」

鬼は奏以外に興味は無いように見向きもしない。こちらにのみ体を向け戦闘姿勢をとっている。

ネギと明日菜がこちらに加勢しようとしていたが刹那が止める。

「ネギ先生、明日菜さん、ここは奏さんに任せて私たちは木乃香お嬢様を追いましょう。鬼一匹程度に奏さんが負ける事はありません。」

刹那に信頼されているのを嬉しく感じ、さらに二人が邪魔しようとしていたので安心する。

少々ネギと明日菜は渋っていたが刹那の説得で鬼の後ろを通り呪符使いを追いかけて行った。結局駅の中に逃げられ電車にも乗られてしまったが後は三人を信じるしかない。

「はじめまして鬼さん。私は羽藤奏といいますが、やはりご存知ですよね。」

「せやな。嬢ちゃんを殺せ、言われとるからな。」

「さっき逃げていったぬいぐるみ着た眼鏡の呪符使いが召喚した存在でもないようですが…？」

「違うで。あんなに別嬪やあらへん。もっと「じじいですか？」…なっ！！。」

ザシュ…。

「前に襲ってきた鬼も『あのじじい』と言っていましたからね。聞けておいてよかったです。さようなら。」

奏は刀を振り、刀身に付いた血を飛ばし鞘に収める。既に鬼の頭は体から離れ落ち、そして今その体が還っていった。

（学園結界があるとはいえ麻帆良学園では一度も襲われなかったのに、京都に戻った途端再び襲われ始める…そして襲ってくるのは相も変わらず鬼。…つまりはそういう事なんですよね…。）

奏だって馬鹿ではない。いつも襲ってくるのが鬼という事から犯人がどういう存在か薄々判っていた。だがあまり考えられないようにしてきた。もしそうだとすると最悪の場合、恩人も敵の可能性が出てく

るのだから。

（まあ敵視するくらいなら木乃香さんの護衛を依頼するわけないですよね…）

この件に関しては九分九厘詠春は白と信じているが、ほんの塵のような小ささでも疑念が生まれてしまうと疑心暗鬼になってしまう人間の心理に奏は舌打ちした。



刹那 side

電車内での罖を掻い潜り、降りた駅で逃げる呪符使いを追っていると突然剣士が刹那に向かって斬りかかって来た。夕風で受けて距離を置くが、どうやら呪符使いを仲間らしい。

「どうも。神鳴流の月詠います。おはつに。」

（強い……）

対峙して刹那は目の前の存在をどのように判断した。

ロリータ・ファッションに何だかぼわぼわした雰囲気眼鏡っ子だが隙もなく、言いようの無い不気味さを感じる。

そして二刀だが相手も神鳴流だと判断することも出来た。

少し離れたところではネギと明日菜が呪符使いの召喚した善鬼護鬼の2匹と闘っている。

（どうやら私一人でこいつを短時間で倒さないといけないらしい。）

少し余所見をしていると月詠が仕掛けてきた。

刹那は右からの一撃を刀で、左からの一撃を鞘で受ける。

拮抗状態は一瞬。月詠は次の瞬間、頭を振って刹那の顔に向けて被っている帽子をぶつけてきた。

顔に当たる帽子に視界が覆われ一瞬刹那は固まる。

故に背後に周る月詠に少し遅れをとった。

すぐに振り返り、上から振り下ろされる攻撃を受けようとしたが、相手の刀に纏う気に気付き、受けようとした鞘を手放し後ろに飛ぶ。

「ざーんがーんけーん！」

瞬間鞘が真っ二つに斬られた。

咄嗟に反射的に避けたがあと少し遅れていたら腕も離れていただろう。

（強いだけでなく上手い…。）

「ホホホ。所詮は見習い剣士。月詠はんには勝てませんやろ。そろそろウチは先においとましましょか。」

呪符使いが大量の召喚した小猿に木乃香を持ち運ばせその場から離脱しようとする。

「成る程…：確かに強い。いつもの私ならば苦戦しただろう。だが…：アデアット！」

手首に現れた腕輪を確認した刹那は月詠に接近し刀を振り下ろす。

それは特に何の芸もない一撃。

月詠は二刀を交差させて受けようする。が、そのただの力任せの一撃は2刀を軽々と斬り落とした。

状況についていけなく驚愕の表情で隙だらけの月詠に、刹那はそのまま刀の峰で打ち気絶させる。

「今の私を常の私だと思うな。奏さんの力を供給してもらっている今の私の攻撃は、そんな鈍らでは防げはしない！」

刹那は斬りかかる際一瞬だけ刀に発生させた紅気をすぐに霧散させ、今度は使い慣れた気を纏い呪符使い程度では目で追えない速度で接近する。

瞬動。

一瞬で呪符使いに追いついた刹那は気絶しているとはいえ木乃香の手前、力を押さえ、

「秘剣！百花繚乱！」

刀身から気を飛ばし呪符使いを吹き飛ばした。

力を抑えたとはいえ神鳴流秘剣をもろに受けた呪符使いは10メートル程吹き飛ばされ壁にぶつかり昏倒する。

途端ネギと明日菜が戦っていたぬいぐるみ型の鬼2匹も還っていた。

「お嬢様！お嬢様！無事ですか？」

「…ん。…う…ん…」

反応する木乃香に刹那は安心する。眠らされただけで特にへんなことはされていないようだ。

後ろからネギと明日菜も近づいてくる。

「刹那さん。木乃香は無事？」

「刹那さん。木乃香さんは無事ですか？」

「はい。無事です。」

刹那は未だ眠っている木乃香を抱きあげる。そしてホテルに戻ろうとしたところで呪符使いが立っている事に気付いた。

「い、いたた……やってくれるやないか。今日は引くけど、次はこうはいきまへんえ。」

すぐに目覚めた呪符使いは月詠の側に移動して抱きかかえぬいぐるみの鬼を召喚し、それにつかまって飛んで逃げていく。

逃げていくのを見送り、そして周りを警戒し敵がいないと判断した刹那はようやく安心して奏に無事である事を念話で送り、ホテルに戻ることにした。

19話（後書き）

せっちゃん！

次の更新は少し遅れます。早くて二日後、遅くて四日後の予定です。

20話

「よ、よろしければ今日の自由行動、私たちと一緒に回りませんか？」

修学旅行二日目。

朝食を食べていると少し離れた所でのどかがネギに自由行動を共に回るお誘いをしていた。

思いのほか積極的な彼女に驚く一方で無視できない案件を思い出す。

「さて、刹那さん。5班の木乃香さんと班を別になっている私たちは今日どうすればいいのでしょうか？」

「そ、そうですね。勝手に班から離れると他の3名に迷惑を掛けてしまいますし。」

「私と茶々丸はどこに行っても別にかまわないぞ。清水寺見れたから後は適当にふらつくだけでかまわん。」

「ザジさんはどこかいきたい場所とかありますか？」

黙々と朝食を食べているザジに話しかける。

「…（ふるふる）」

「そう…：…でしたら5班にお願いして彼女達と一緒に行動する形をとってもいいですか？」

「…（こくり）」

半分駄目もとの願いだったがザジが了承してくれたので、奏は明日菜や木乃香と一緒に周らないかと提案した。

明日菜は事情を知っている理由から、木乃香はただ嬉しそうに承諾してくれた。他の三人もかまわないと言ってくれて今日の自由行動は5，6班一緒に行動する事になったのだが…。



のどかがネギに告白したり何かその他にも特別なイベントはあったらしいが、木乃香やネギの親書を奪う等の裏関連の出来事は一切起きなかった。

昨日の敵の襲撃から一転しての今日で少し拍子抜けしたが、もしか

したら昨日で全てを決める予定だったのかもしれないと推測する。そう考えると敵の作戦が今のところ悉く失敗に終わっている以上、明日と明後日は本当の勝負になる予感がした。

（まあ、今日もまだ油断はできませんが。）

「朝倉に魔法がばれたああああ!？」

ホテルで気を引き締めなおしていると明日菜の大声が聞こえてきた。少し遠くからのぞいてみるとそこには朝倉和美とネギに明日菜、何故か刹那もいる。

（刹那さんが今護衛しているはずなのですが…）

「あ、奏さん!」

何か面倒くさそうだったので行きたくなかったが、刹那にばれたのでとりあえず場に出る事にする。

「か、奏さん。」

ネギ先生が助けてくださいと懇願するような表情をこちらに向けている。

多分さつき明日菜の大声で言ったような事が起こったのだろう……。

「ネギ先生。大丈夫です。世界中に魔法が知られてしまい結果戦犯的な扱いされて、魔法使いの皆さんから虐げられても、ずっと味方ですよ……明日菜さんだけは。そ、それでは私は木乃香さんの護衛がありますのでこれで。」

朝倉和美にばれたからにはもう碌な事にならないと判断した奏は、ネギを見捨ててさっさとこの場を離れることにした。

後ろからネギと明日菜が大声を出して名前を呼んでいる気がしたが手で耳を塞いで全力で逃げた。



逃走から1時間後、その間木乃香とおしゃべりしたりして時間を潰していたのだが、何故か今奏とザジは枕を持たされネギとのラブラブキッス大作戦とやらのイベントに強制参加させられている。

各班2人は強制参加らしくエヴァと茶々丸は既に月見酒をしており刹那は木乃香がおしゃべりしたいといって連れ去っていった。

結局残ったこの二人が無理やり参加させられたのだが、如何せん興味がない。

「ザジさん。ネギ先生とキスしたいですか？」

5班の部屋の入り口でサジに問いかける。

「…（ふるふる）」

「ですよねえ。」

「では自室にこもっておきましょう。」

「…（こくり）」

ザジもあまり興味が無いらしく二人で部屋に戻ろうとしたのだが、その時後ろから枕を持ってものすごい速度で接近してくる二人に気付いた。

（え、えーと確か古菲さんと楓さんでしたね。）

「恨みはないアルがワタシの初キスの為に沈むアルよー。」

急速に接近した褐色少女、古菲がいきなり奏に向かって上段蹴りを放ってきた。

（枕だけの攻撃ルールじゃなかったんですか!?!）

奏は腕で防御の体制をとりつつ一歩踏み込んでピンポイントでの当たりを避ける。そして相手の顔に枕をくっつけそのまま顔を押し込んだ。蹴りの最中の不安定な状態で押され、頭から地面に激突しそうになる古菲を見て、大丈夫だろうかと後悔したが、その前に後ろに回った楓に支えられ少し安心する。

「す、すごいアル。普通あそこから踏み込んで来るなんて真似できないアルね。奏は只者じゃないアルね。」

「どうやらそのようでござるな。これは少し楽しみになってきたでござるよ。」

「あ、新田先生…。」

「「!!!!!!」」

二人が後ろを見た途端ザジの手を取り全力で走る。一瞬遅れて楓と古菲も追いかけてくるが部屋がすぐ近くだったため逃げ切る事が出

来た。

部屋に入り勢いよくドアを閉める。

「ふう：バトルマニアなお二人です。」

「おい、さわがしいぞ！きしゃまら！！！」

部屋に戻ると窓辺に佇み月を見ながら酒を飲んでいるエヴァと寝ころがってテレビを見ている茶々丸がいた。

エヴァの顔が赤い：どうやら酔っているようだ。

「……茶々丸さん。エヴァさんべろんべろんじゃないですか？どうしてこんな事になっているのですか？」

寝ころがってテレビを見ている茶々丸に問いかける。

「いえ、自分に酔いたいのか知りませんが月を見ながら風情ある飲み方をしようとしていたので、少し煽ったんですよ。そしたらいい気になってごくごく飲み始めてこんな事になってしまいました。」

「あんた本当に従者！？」

「うるしい！それより奏、ちよつとこっちに来い！」

（うわぁ……。絡み酒です。）

無視すると大声張り上げて、最悪教師が来るかもしれないので、と
りあえず奏は適当に話を合わせることにした。

（かなり飲んでいるようですのですぐに寝るでしょう…。）

「はいはい。何ですか？」

「……………お前は、かわいいな。」

「そうですか？うれしいです。でもエヴァさんもお人形みたいでかわいいですよ。」

「そ、そうか？ふふふ。……それで…男はいるのか？」

「いえ、前に勝手に人の過去を吸血の際のぞいたでしょう？だった
ら知っているんじゃないですか？」

「おお！そういえばそうだったな。真名とキスして仮契約をして

いたな。……むうう！」

エヴァが頬を膨らませてこちらを睨む。隣では至近距離で茶々丸がエヴァを録画している。

（はぁ…もう嫌ですこの主従。）

その後もしばらく適当に相槌をうっていたらドアがノックされた。酔ったエヴァに同じ話を何度もされ、まだ古菲と枕で叩き合っていたほうがましだと思いドアに向かい開けると、

そこにはネギがいた。

「ネギ…先生？」

（いえ…何かおかしいです。）

ネギ？が部屋に勝手に入ってくる。

「ノギ・スプリングフィールドです。…奏さん。僕とキスしてください。」

近づきながら爆弾発言をするネギ？に思わず奏はあとずさる。

「いえ、先生何言っているんですか？先生も酔っているんですか？」

「細かい事は気にしないでいいですよ。さあ僕とキスしてください」
「黙れ糞ガキ！こいつは私のモノだあ！」

突如割って入ってきたエヴァに腕を掴まれ、さらに膝を折られ座らされる。

そしてエヴァは少し密着して奏のネックレスとエヴァのネックレス、先日買ったペアネックレスを繋げて来た。

「坊やにまだキスは早い。そこで私たちのキスを見て学ぶがいい。
んちゅー！」

「！んっ！！んっ！！」

無理やりキスされ、さらに最近だけで2度体験した眩い光が周りに発生する。

（な…何で…？魔方陣なんてここには…）

酒臭いと感じながらも、魔方阵はないがこれが仮契約の儀式と理解し、奏はエヴァから離れようとする。

しかし今のエヴァは力が戻った吸血鬼、力強い抱擁に離れることが出来ずに光が止むまですっとハグされ、そしてキスされ続けた。

唇が離れる頃にはエヴァは既に気持ち良さそうな顔をして寝ており、離れのザジを見ると少し顔を赤らめていた。



茶々丸 side

少し前ネギ先生のペットであるオコジョと朝倉和美の、『ネギ先生と仮契約者を増やす大作戦』の悪巧みを盗聴していた茶々丸はすぐにエヴァに月見酒を勧めた。

そしてエヴァが酒を飲み始めてからはお酌をしてペースを無理やり上げさせた。

茶々丸はこれを機にエヴァと奏に仮契約をさせようとしていた。

（真名様と刹那様に大分遅れをとっているマスター…）

このままでは第二の失恋も近いと判断して、お酒の力でどうにかさ

せようとした。

結果的に作戦は大成功だった。途中キスの邪魔をしようとネギの偽者が近寄っていったが、ぶん殴ったら紙キレにかわった。多分陰陽術か何かだろう。

（これでマスターにもチャンスが出てきます…あとはマスターが起きるまでに奏様の説得です。）

翌日、確実に酔った勢いという理由で成った仮契約を破棄しようとする案が奏から出てくるだろう。

茶々丸はそれを防ぐべくキスが終わり少しぼーっとしている奏に話しかけた。

21話

「何というか…その…すまん。」

「いえ…昨日はエヴァさんも酔っていましたし…それに悪いのはあのオコジョの方ですし…」

朝目覚めたエヴァは奏と目が合うと昨日の事を思い出しすぐに謝ってきた。

600年生きた最強の吸血鬼に頭を下げられている存在は自分が初めてではないだろうかと思う。

「オコジョに契約破棄の方法を聞いてきましようか？」

エヴァと仮契約する事は奏にとって問題がある。

まず一つは正義の魔法使い達に狙われる可能性があるという事だ。面倒嫌いの奏にとって彼らに目をつけられるという事は難儀極まらない。

そして一つにさっきの問題に関連して木乃香の護衛を首にされる可能性までも出てくるという事だ。木乃香が学園長の孫というのは学園で働く魔法関連の人たちにとっては周知の事である。それを護衛するのが自称悪の魔法使いの従者という事実が知れ渡ると、学園長でも彼らを止められなくなるかもしれない。

ちなみに従者は奏である。オコジョに聞くと魔力の低いほうが自動的に従者になるよう設定された魔方陣だったらしい。

「……い、いや…そのだな」

契約破棄の提案にエヴァがオコジョから奪ってきたカードを後ろに隠しながら困った表情を向ける。

(うっ…)

思わず隣の茶々丸を見る。

昨日エヴァが寝た後茶々丸と部屋を出て少し話し合ったのだが、その際この仮契約を破棄しないと言われた。

何故かと聞いたら、マスターには友達がいらないだの、ぼっちで寂しがりやだの、従者とは思えない遠慮ない物言いに若干引いたが、それでも仮契約を破棄してしまうとエヴァがショックを受けると力説された。

「エヴァさんは別に破棄しなくてもいいと思っていますんですか？」

「…う、うむ。そ、その方が念話やアーティファクト等の恩恵もあり木乃香の護衛だってやりやすくなるだろう。」

「エヴァさんの従者になるとそれだけで五月蠅い人たちに私自身の命が狙われることにもなるのですが…」

思わず本当の事を言ってしまうとエヴァが、露骨に落ち込む姿を見せる。

そしてふとエヴァの後ろを見ると、茶々丸が睨みながら握りこぶしをこちらに向けていた。

（ろ、ロケットパンチ！）

「わ、わかりました。それでは私がエヴァさんの従者である事は黙っていてもらえませんか？知られると命を狙われるだけでなく最悪木乃香さんの護衛まで首なっけてしまいます。」

「う、うむ。わかった！」

途端エヴァの顔が明るいものに変わる。

茶々丸の言っていた通り本当に寂しがりやらしい。あまり深い付き合いをした記憶もないのだが、そういう存在でも傍にいたほうが嬉しいのだろうか？

「あっ！あと真名と刹那さんにも。彼女達に知られるのは嫌な予感しかしません。」

二人の名前を出すとエヴァはすこしムツとした表情を見せたが納得してくれた。

「ふう……主になったからには従者がピンチになった時には助けてくださいね。」

デメリットが多い仮契約で先を考えると不安にしかないが、自分と仮契約して喜んでいるエヴァを見て奏は自身もすこし嬉しく感じていることを自覚した。



3日目も自由行動がメインで、昨日と同じよう5、6班一緒に行動することにしたのだが、ネギと明日菜は詠春に親書を渡しに行っており既に別行動だった。

ネギ達と別れてからは警戒しつつ、奏達はシネマ村にて木乃香のお願いでコスプレをしていた。シネマ村では行き交う人々の殆どがコスプレをしており、前時代的な建造物も重なり完全な異世界の雰囲気だった。

木乃香は着物を、刹那は新撰組を模した男装、奏は巫女服を選んだ。エヴァと茶々丸はゴスロリとメイド服といつもの彼女達らしい服装

だった。

「……それであるの戦闘狂っぽい人は刹那さんをご指名だそうですが、どうするんですか？」

そして今日の前には穏やかそうに見えるが危険そうな剣士がいる。さっき突然現れて刹那に決闘を申し込んできたのだが。

「先日お嬢様をさらいに来た連中の一味です。京都神鳴流の剣士でもあります。」

「刹那センパイ以外はおはつです。神鳴流の月詠といいます。」

「エヴァさんに戦ってもらいましょうか。面倒くさそうな人っぽいです。」

「別に私はかまわないが……いいのか？ さっきからあいつより遥かにやばそうな奴が離れたところでひっそりとこちらの様子を伺っているが。容姿はガキっぽいが結構強そうだぞ。」

「私には感じませんが……とりあえず一番強いのをエヴァさんに任せましょう。力も取り戻したんだし……目の前の月詠さんとは私が戦います。」

「いえ、奏さん。月詠とは私が戦います。」

「駄目です！刹那さんもわかってるでしょう？戦闘の実力はさておき、私の護衛としての力はまだ良くて二流程度だという事を。

いつ相手に仕掛けられるかわからない以上、護衛として優秀な刹那さんが木乃香さんの側にいるべきです。

それに彼女は刹那さんに夢中みたいですからね…それも後々の事を考えると危険です。…ここは私に任せて木乃香さんの所に行ってください。」

少し離れたところにいる茶々丸と木乃香の方を指差す。

刹那は納得のいかない表情をしていたが、奏が譲らないと解るとしぶしぶ承諾して木乃香の所に向かっていった。

「エヴァさんお願いします。」

「ああ。お前もあの程度の存在に苦戦なんかするなよ。主として情けないからな。」

主という部分を強調しながらエヴァも奏の元を離れていく。どうやら先の仮契約がそれほど嬉しかったらしい。

木乃香が奏だけ来ないので不思議そうに見ていたが、刹那に連れられてこの場を離れていった。

「さて、ということで貴方の相手は私がすることになりました。よろしく願いしますね。」

「あなたは誰ですか？ 私は刹那センパイと死合いたいのですが。」

「私は、えーと…大和撫子といいます。こう見えても刹那さんの主的な存在なんですよ。退屈はしないと思いますが。」

途端目の前の少女の雰囲気が変わる。笑っているがその表情は恐ろしい。

どうやら最初感じた以上に狂人らしい。

「ふふふ。そうですか刹那さんより強いのですか。…そういえばここでは真剣で斬り合っても何かの撮影にしか思われないんですよ。知っていました？」

「そうですか！！」

奏は月詠に向かって拔刀しながらそのまま鞘を飛ばし、それに遅れない速さで接近する。

接近しながら、左右への回避、さらには刀で鞘を弾かれるシミュレ

ーションをするが、月詠のといった行動はいきなり奏にとっては予想外の事だった。

月詠は抜いた刀を飛んできた鞘の先端に刺し真っ二つに割りながらこちらに突きを放ってきた。

「くっ！」

奏は突きを右に転がるようにして回避して距離を取る。

「その鞘は一応特注品で剣撃も受ける程の頑丈さなんですけど…。」

巫女服に付いた土埃を叩いて落としながら月詠を見る。

「この刀も世界に一本しかない刀なんですよ。『ひな』っていう妖刀です。まだ全然その妖気を使い切れないので普段は保管しているんですが、先日刹那センパイに刀を2本とも斬られてしまったんです。」

（あの刀は例え紅気を使った攻撃でも斬れなさそうですね。禍々しい力を感じます。）

月詠にそのままの状態で勝つのは時間がかかると判断した奏は鬼化する。

周りの観客からは仮装としか思われないだろう。

しかし紅気はつかわない。先日貧血で血が自分だけの物じゃなくなっていると認識させられ、いつ従者である刹那や真名が使うかわからないので迂闊に使うわけにはいかなかった。

それに今のままでも人間の体の時より数倍の肉体が強化されている。

奏は月詠に接近し胴への一撃を放つ。

先程より一段と疾い接近と攻撃に月詠が驚愕の表情を向けるが、それでも攻撃に反応し刀で受ける。

だが奏の今の力は普段の数倍：体重差もそんなになく月詠の体であるが故に、その体が浮き、数メートルほど飛ばされる。そして奏は飛ばされた月詠が地に付く前に瞬動で接近し連撃を放った。

体勢の悪い状態で防げる筈が無いと奏は思ったが、月詠は見事な刀捌きでそれらを全て防ぐ。

内心驚きながらも奏は手を休めることなく、それから数分程度鬼の体をフルに活用し攻撃に徹した。

しかし月詠は反撃ができず防戦一方ながらも、不気味な笑いを浮かべながら奏の攻撃を全て防ぎきった。その口からは少し涎も垂れていた。

（くっ：！）

このままでは危険と判断した奏は、使う予定の無かった紅気を体に纏い月詠に接近し峰で腹を打つ。

瞬動とは次元の違う速度に一切の反応も出来なく月詠はその攻撃を受けて倒れた。

(…なんて奴。)

倒れこむ月詠を見る奏は驚きを隠せない。

まだ奏と同じ年頃の少女が…生身の人間が…鬼となった奏の攻撃を
全て防いだのだ。

奏は自身の刀を見る。刀には至る所に刃こぼれが生じており最早使
い物にならなくなっていた。対して月詠の持っていた妖刀は刃こぼ
れ一つ無い。

(恐ろしい刀です。…これだって名工の刀と詠春から聞いているの
ですが…)

あそこで紅気を使わなければ刀は折れて、面倒なことになっていた
だろう。

とりあえず観客から注目を浴び続けている状況はよくないので、奏
は角を収め、刀をその辺に捨てながら木乃香の下に戻ろうとする。
その時、未だ立てないながらも気がついた月詠が話しかけてきた。

「刹那センパイも強かったですけど撫子さんもつよいどすなー。撫
子さんにも惚れてしまいましたわー。」

「そういえば刹那さんに異常な執着をみせていましたね。……お願

いがあるのですがこれから刹那さんを狙わないでくれませんか？別に代わりに私を狙ってもいいですから。」

「??？どういことですか？」

「私は木乃香さんの護衛はあまり長くする予定はないのですが彼女は一生かけて守っていくんです。できれば辞める前に憂いの一つくらいは絶っておきたいでしょう。」

「うゝん。代わり撫子さんを狙っていいんでしたらそれでもかまいません。」

「わかりました。」

（アホ抜かすなです。護衛が終了したら余裕で逃げてやります。）

とりあえず敵だけと別れの挨拶をして、今度こそ木乃香の元へ奏は戻る事にした。

しかし次の瞬間、

奏の体は真横からの強烈な一撃で殴り飛ばされた。

22話

「最近はよく鬼に不意打ちをしかけられますね。」

10メートル程殴り飛ばされた奏は立ち上がる。

攻撃は回避出来なかったが自分で飛んで衝撃を幾分か吸収する事はできていた。

しかし確実に骨にひびくくらいは入っているだろう。それくらいの強烈な一撃でもあった。

（紅気を纏っていればあの程度の攻撃では傷一つつかなかったのですが…）

「無理やったか。致命傷与えられなかったら戻って来いって言われ
とるからな……いきなりですまんが帰るわ。」

言葉と共に消えていく3メートル近くある赤鬼。

完全に消えてから奏は戦闘態勢を解いた。

刀もなく左手も満足に使えなさそうなので、もし闘う事になっていたら苦戦していたかもしれない。

「撫子はん。うちの雇い主がごめんな。不意打ちなんてしたって何も楽しくないのに。」

「雇い主ってあの眼鏡の呪符使いの事ですか？だとしたら勘違いですよ。」

あの赤鬼を送ったのはあの呪符使いではありません。……とりあえず私は戻ります。約束忘れないで下さいね。」

倒れ伏している月詠と別れ、今度こそ木乃香の下に向かう。

その際、5、6名のクラスメイトがその他の観客と一緒に先の戦闘を見ていた事に気付くが、会釈だけしてその場を離れた。

観客も鬼を見てCGやらと騒いでいたのでここにいる朝倉和美以外のクラスメイトもそういう風に処理してくれるだろうと判断した。



刹那たちの所に着く。

彼女達は特に外傷も見られなく、少し離れたところに木乃香と彼女を守っている茶々丸もいた。

「どうやらそちらも大丈夫そうですね。」

「はい。襲われましたが呪符使いに召喚された鬼は私が、そして白髪の少年をエヴァンジェリンさんが対応していましたので特に問題

なく追い払う事が出来ました。」

「対峙しているだけであちらから仕掛けても来なかったがな。様子見だけだったようだ。」

エヴァがつまらなそうに言う。

「シネマ村だから色々騙せるとはいえ、こんなに白昼堂々鬼まで召喚するとは思いませんでした。」

「……奏さん、ここはお嬢様の実家に行きませんか？」

「総本山ですか……。そうですね。その方がいいのかもしれませんが。」

「だったら私たちも連れて行って下さい。」

（ん？）

声のするほうを見ると、月詠との戦闘を見ていた綾瀬夕映と早乙女ハルナそして朝倉和美がいた。

（あれ？）

「あの夕映さん…ですよ？一つ聞きたいことがあるのですが、どこさんはどこに行っただのですか？」

彼女がいなかったのが気になった。はじめてきた土地を一人で移動できるような子ではないと思ったのだが。

「のどかはネギ先生と明日菜さんを追いかけていったみたいです。」

「そ、そうですか…。」

面倒な事になってないか不安になるが顔には出さないよう心がける。彼女達のお願いはもちろん木乃香が許可し、結果8人の大人数で木乃香の実家に向かうことになった。

木乃香の実家に向かう途中やたら夕映がこちらを観察しているのが気になった。



刹那 side

「「お帰りなさいませ。このかお嬢様ー!」」

沢山のお屋敷の人たちに出迎えられ初めて来た夕映達が驚いている。奏を見ているが彼女はあまり興味もないらしくエヴァンジェリンと雑談していた。

エヴァンジェリンの奏と話す表情は今まで見たことないほど穏やかだ。

(何だか最近怪しいんですね。エヴァンジェリンさん…)

そんな事を考えながら案内係について行き建物の広間に移動すると、そこにはネギに明日菜、そしてのどかが先に到着しており、ネギの傍には長である詠春もいて談笑していた。

ネギの体の所々に絆創膏が貼ってあるが、それでもその表情を見るにどうやら任務自体は無事に達成できたようだ。と刹那は判断する。

「これでひとまずは安心ですね。」

刹那が詠春に抱きついていている木乃香を少し離れた所で見守っていると、奏が寄ってきて話しかけてきた。

「そうですね。ここも麻帆良学園に負けず劣らず警備と結界にはかなり力を入れていますので、ここにいる限りお嬢様の安全は絶対でしょう。」

「そうですか。それならば私もするべき事に集中できます。」

（するべき事？）

「やあ…二人とも。」

刹那が奏を見ているといつの間にか詠春が二人の傍にやってきていた。

「お、長！ご無沙汰しております。」

「そんなに畏まらなくてもいいですよ。それよりもこのかから聞きましたよ。仲直りできたそうですね。」

「はい。奏さんに背中を押してもらいお嬢様と仲直りする事が出来ました。」

刹那は隣の奏を見る。

奏は今の刹那の言葉で少し照れていた。

基本的に奏は無表情だから、偶に魅せるそういう特殊な表情を見るのが刹那は好きだった。

そのまま照れてる奏を観察する。

刹那以上に華奢な体で常にほんの少し眠たそうな目つき。髪型も身長も違うが顔だけで見ればほんの少しだけ5班の綾瀬夕映に似ているかもしれない。

ふと気付くと奏もこちらを見ていたので微笑む。すると奏も照れながらぎこちない笑みを返してきた。

（かわいい…）

刹那が奏に萌えていると奏が詠春に話しかける。

「そういえば詠春、刀を一振りいただけませんか？上等な物を。先の戦いでお気に入りが沢山刃こぼれして使い物にならなくなりました。」

言われて初めて奏が刀を持ってない事に刹那は気付く。

「先の戦いって彼女との戦いですか？」

「はい。刹那さんに刀を斬られた後予備の刀を持ってきたみたいですよ。かなり危険な刀でした…名前忘れましたが…。」

「わかりました。あげることはできませんが『椿』を貸しましょう。」

夕風に並ぶ上質な刀です。このかの護衛をしている間無償で貸しておきます。」

聞いたことの無い刀がこの夕風に匹敵するような業物ならば名刀と呼ばれるものだろう。

夕風も名刀だ。

刹那は未だ夕風が自分には不相応な代物であると自覚している。

（いつかは長のように持つに値する剣士になりたいものだ…）

そんな事を考えていると奏が詠春に思いもしない事を言った。

「ああ、そうそう。詠春、木乃香さんの護衛の件ですが少し私を外してください。」



奏 side

「何ですか!!」

突然大声で刹那が奏に叫んできた。

「すいません。刹那さん。ですが護衛を辞めるわけではありません。今日だけ…もしくは最悪明日までその任を解いて欲しいのです。」

「理由を聞いてもいいかな？」

詠春が奏に言う。

「個人的な用事です。それに総本山にいる限り敵も仕掛けてくる事はできないのでしょうか？私の用事を終わらせるのは今京都にいる間しかできないのです。」

それに、安心してください。危機の時はエヴァさんが木乃香さんを守ります。」

契約ですので彼女も面倒に感じるかもしれませんが助けてくれるでしょう。」

正直今の彼女がいればどのような強敵でも相手になる気がしない。

「……わかりました。この二日間だけ護衛をしなくて結構です。」

「長っ！」

「刹那くん。君もわかっているでしょう？ここにいる限り敵は易々と侵入なんかできはしない。」

「そうですが…。」

「刹那さん。二日…二日だけです。戻ってからはまた共に木乃香さんを守ると誓いますので時間を下さい。」

刹那に頭を下げる。

「…わかりました。早く戻ってきてくださいね。」

未だ不安そうな顔をしているが奏の言葉で一応の納得はしてくれたようだ。

「はっはっは。奏君の護衛が決まった時にはあんなに怒っていたのですが…だいぶ刹那くんは変わりましたね。さて、では私は椿をとって来ますので二人はここで待っていてください。」

詠春がこの場を離れる。刹那を見ると今の詠春の言葉で恥ずかしくなっているようだった。

「刹那さん。刀を借りた後少し二人きりになれますか？少ししておきたい事があります。」

「え？…二人きり？…したい事？」

途端、刹那が顔を赤くし周りをきよろきよろ見回してからこちらにコクコクと頷く。

どうやら少し勘違いさせてしまったようだが、さっきの刹那の叫びで注目を浴びてしまい木乃香がこちらに近づいてきたので今この場で訂正するのは避けておいた。

23話

詠春が持ってきた日本刀『椿』はあまり刀の良し悪しがわからない奏でも上等な業物だと感じる事が出来た。夕風ほどの長刀ではなく前の刀と違って鰐もある。

奏はよく切れて頑丈であればあまりほかの事は気にしないのだが、その見事な反りや刃文には思わず息を呑んで見惚れた。

刃先の鋭さを見ていると思わず試し切りもしたくなり、柄でもない思考に苦笑して刀を鞘に戻した。

そして詠春から椿を受け取った後、奏と刹那は皆がいる建物から出て離れの酒蔵に来ていた。

「あの、奏さん：一体なんでこんな場所に？」

刹那が顔を少し赤くしながら奏に言う。

奏はそういえばまだ誤解を解いていなかった事を思い出す。

「ふふふ。護衛に関する話ですよ。刹那さん。」

刹那が勘違いに気付いてさらに顔を真っ赤にする。そんな姿を奏は可愛いと思いながら、彼女が落ち着くのを待ちそして用件をいう。

「刹那さん…私の血を舐めておきませんか？」

「…えっ？」

「だから血です。刹那さんさえよければ吸血しておいて欲しいのです。」

「いえ、奏さんの血は大S…お嬢様の護衛をしやすくなりますので舐めたいですが…でも何故今なのか？」

「刹那さんや詠春、そして私もここは安全だと思っています。…ですが今回の敵は魔法使いではなく呪符使いなのです。」

もしかしたらこの総本山に逃げられた時の策も考えているのではないかと不安になりまして…。ですが私はここを一時離れないといけません。ですから刹那さんにはもしもの時の為に万全を期して欲しいのです。」

私の血を摂取しておけば、短期決戦ではかなりの力を得ることが出来るでしょう？」

「……」

「どうかしましたか？刹那さん。」

「いえ、感服していました。こういう安全な場所でこそ体を休めながらも油断はしないよう心がけるのが当たり前のことなのに。護衛まだ10日程度の奏さんに教えられるなんて私もまだまだです。」

「そうですか…でも10日だからです。素人だからあれもこれもと無駄に考えてしまうんだと思います。そういう事していたら身が持たなくなるのは解っているのですけど…それでも気になりましたら不安で仕方なくて。」

「わかりました。…また奏さんの血を吸わせてください。」

「はい。遠慮しなくていいですよ。どうせこれから無駄に血を減らす予定ですので。」

「…どういことですか？」

「今は聞かないで下さい。」

これ以上は聞かないよう促す。

結局試し切りをしたかった椿で初めて斬った物は吸血させる為自分

の指になった。

お互い立ったまま奏は刹那に人差し指を近づけて血を吸わせたのだが、刹那の吸血行為は前回と同じくらい積極的だった。

ただ前回のように完全に我を忘れているという様ではなく、高揚からか頬を染めつつ血を吸いながらも、時折刹那は奏の顔をうかがって来た。

（刹那さんは座らせればよかったです。こうやって向かい合うと目をどこに向けたらいいのか解りません。）

半ば蕩けた表情を向けられ奏も心臓が高鳴りどうしていいかわからず、目を反らして奏の手を優しく包み込んだ刹那の両手と傷口を這う舌をただ感じていることしか出来なかった。

前回とは違い刹那は翼を発現させなかった。



午後6時。刹那に吸血させてすこしぎこちない会話をして別れた後、奏は真名に携帯で連絡を取っていた。

念話では距離がありすぎるため届かなかった。

「……わかった。だとしたら今すぐ向かわないといけないな。」

「はい。そして念を押しておきますが絶対に私の言うとおりに動いてください。勝手な行動だけはしないようお願いします。」

「ああ。奏の身の危険は否めないが約束しよう。近くになったら電話で連絡を取り合おう。じゃあまた後で。」

真名との電話を切る。

奏は椿を持つと真名と合流すべく総本山の入り口に向かった。



そして午後8時。真名と会い少し話をしてすぐに別れた奏は、関西呪術協会の総本山から数キロ離れた森を歩いている。

今頃刹那たちは夕飯も食べ終わりみんなで色々おしゃべりして楽しんでるかもしれない。もしかしたら広いあの実家を一々見回って遊んでいるのかもしれない。

そんな事を考えながら空を見る。

今夜は月も雲に隠れていなく夜の森とはいえある程度遠くを見通すことができた。

だから前方50メートルほど先に人外が大量にいるのも視認できている。

それは月だけでなく森とはいえそんなに木々も生い茂っていないというのと、奏が夜目を鍛えていたという理由もあったが。

（……前方だけではなく既に囲まれていますね…少なく見積もっても150はいそうです。思ってた以上に多いですが好都合です。これだと相手も違和感を覚えないでしょう。）

周りの人外達がゆっくりと近づき囲みが小さくなっていくのを感じる。飛行している烏族もいる。

「200の鬼や烏や狐に囲まれている割には落ち着いていて余裕そうだな嬢ちゃん。襲撃されるのわかってたんか？」

一匹だけ数メートル付近まで接近してきた赤鬼が奏に話しかける。月詠との戦いの後に不意打ちを仕掛けてきた鬼だろう。

「ええ。過去の二回も私を常に見張っていたかのような襲撃でした

からね。200匹は予想より遥かに多いですが、それでもたかだか雑魚200匹です。貴方に殴られた左腕もまだ痛いですがそれもいいハンデになるでしょう。」

「いうやないか。じゃあ早速殺り合おうか。嬢ちゃん。」

「ええ。貴方達を一匹残らず殺してあげます。」

奏は瞬時に鬼化し、居合いの要領で椿を抜刀する。そしてそのまま刀身から紅気の刃を空を飛んでいる烏族に向かって飛ばした。

奏は一切の反応も出来ず体が分断される烏族を確認する事も無く紅気を体にも纏い、今度は近くにいた赤鬼に神速のごとく接近し切り伏せる。

さらに間をあげず呆気にとられている人外達に紅気の刃を飛ばしまくった。

狙いをつけず適当に飛ばした攻撃だったが今は360度囲まれている状態。

それらの刃は囲んでいた人外、そしてその人外の後ろにいた人外達も切り刻んでいった。

本来地に着いている敵に紅気を沢山飛ばすのはあまり利口な戦い方ではない。紅気を刃と化し飛ばし続けるという事は、貧血症状に陥るのがそれだけ早くなるという事なのだから。

それに紅気を体と刀に纏うだけで普通の鬼等では反応できない速度と防げない威力の斬撃を放つことが出来るのだ。

そう考えると今の戦闘法は間違いで、正解はただ圧倒的なスピードと威力の近接攻撃で、相手を切り刻めばいいだけなのである。

しかし今回奏はそうしなかった。

今回の戦いにおいては遠慮なく、そして無駄に血を使い敵を屠ると最初から決めていた。

「いつまでぼーっとしているのですか？そんなに死にたいのですか？」

奏の言葉に鬼達が咆哮をあげ、四方八方からこちらに向かって突進してくる。奏もそんな人外達を待つことなく前方に向かって突っ込んだ。

24話

??? side

御門^{みかどしげぞう}繁蔵は自身が召喚した鬼達と羽藤奏との戦いを、遠見の術で数百メートル程離れた場所からのぞき見ていた。

繁蔵は関西呪術協会の重鎮で近衛詠春を支える幹部の一人でもある。しかし詠春に気付かれないよう数年前から鬼を召喚し、羽藤奏に送り続けている存在でもあった。

繁蔵は羽藤奏の贄の血の秘密を知っていた。それを知るきっかけになったのは繁蔵の召喚した鬼が羽藤奏の母を襲った事に起因する。

当時召喚した2メートルにも満たない細身で小柄な鬼がお札に縛られ苦しみながらも逃げ出したのを思い出す。

普通呪符使いに召喚された鬼族やその他の人外は、召喚の際のお札の効力により縛られ、召喚者に逆らえないようになっていて。無理に逆らおうとすると苦痛を伴いそれでも抗うと数分程で消滅する。

だが繁蔵から逃げた鬼は体が消滅するどころか追いつくと何故か莫大な力を手に入れており、詠春や忌々しい存在ではあるが実力は確

かな魔法使いどもの攻撃をその身に受けても死なない強さを手に入れていた。

そして倒されそうになると召喚者である自分の意思に関係なく、元の世界に自力で還っていった。

当時はそこで誰にも気付かれぬよう現場から退避して、その後知らず存ぜずを貫いた。

そして何もわからないまま十年ほど経ち、詠春が時折時間に余裕が出来たときに会いに行く子供が、繁蔵の召喚した鬼に当時瀕死の状態にされた女の娘、羽藤奏であると知る。

繁蔵はあの鬼の事件の際、羽藤奏の母親がどのような目に遭ったか詳細はわからなかったが、詠春が総本山に血まみれの彼女を抱えてやってきて、専門の部下に治療させていたのは知っていた。

羽藤奏があの子の娘であると知ったとき繁蔵は鬼を召喚したのが自分だとばれたのかと疑い、彼女が留守の時に家の中に盗聴効果のある札を隠し貼った。

そしてそこで話された詠春と羽藤奏との会話で血とその効力、過去のあの事件の詳細等を知ることになった。

それらを聞いたとき繁蔵は羽藤奏を危険視した。

通常鬼等の人外は呪符使用により向こうから召喚されたら縛られる。

こちらに反抗しようとするれば苦痛を伴うし、最悪消滅するのだ。

さらに勝手に元いた世界に還る事もできない。還れるのは召喚した呪符使いが死ぬか、人外自身がこの世界で殺されるか、もしくは呪符使いに還してもらった時だけである。

そのような逆らうと苦痛を伴う縛り、勝手に還る事のできない縛りが召喚された人外には存在する。しかし昔羽藤奏の母親を襲った鬼は召喚した繁蔵から逃げ出した時は苦しんでいたが、血を吸って強大な力を手に入れてからは一切縛れていなかった。

羽藤奏の贅の血は呪符使いと鬼との関係を破綻させる……繁蔵はそう危惧した。

彼女の血を鬼が飲めば力を増し、そして召喚したこちらが縛れぬ程の存在になるというのは、こちらにただ使われるだけの存在だった鬼が最悪敵にもなるという事だ。

（あってはならぬ…。）

それから繁蔵は羽藤奏を始末するため鬼を送り続けた。

単独犯である繁蔵にとって自分の行為は誰にもばれるわけにはいかなかった。

他の幹部に相談したら助力してくれたかもしれないが、羽藤奏が長である詠春に厚意にされている存在ってのが厄介で結局は己一人で

なす事にした。

離れで贅の血の特殊な業を使い少女が鬼共を圧倒している。

200はいた鬼達も今では20程度になっていた。

鬼達も奏の強さに賞賛しているようで攻撃の手を緩めないながらも、その顔には笑みが漏れている。

基本的に召喚された鬼達は戦闘を気楽に、そして心から楽しむ傾向がある。

それは召喚された人外が这个世界で殺されても実際に死ぬわけではなく、元の封じられた世界に還るだけという理由からだ。

召喚された彼らは基本的にこの世界で死ぬ事はない。例外は召喚者に逆らう等して消滅した時くらいだ。

（見事なものだ。）

また一匹武器ごと鬼を斬り伏せた奏を見る。

（しかし……）

血が足りなくなってきたのだろう。先ほどから時折紅気が霧散する。その際すぐに再度紅気を身に纏うが最早時間の問題だろう。

観察していると再び紅気が途切れる。

そして今度はその一瞬の隙に近づいた鬼が羽藤奏の左腕を切り落とした。

片腕を斬られながらも羽藤奏は鬼の首を右手一本で持った刀で刎ねるが、どう見ても限界は近そうだった。

(そろそろじゃな…)

元々神鳴流の剣士でもあった繁蔵は脇差を抜き、残りの鬼と戦っている少女の下へ近づいていった。



奏side

「ハアハア…。」

血が足りない。

鬼の速度は大した事無いのに体が鉛のように重く感じ満足に動けない。

正面から放たれる槍による突きに少し体を挟られながらも、体を捻るように回転して回避しそのまま鬼を切り伏せる。気付くと残りはたったの5匹になっていた。

「やるなあ。お嬢ちゃん。200もいたのにまさかこんなにやられるとは思わなかったわ。かなり苦しそうだけどもうちょっとだけ頑張ってわい達の相手もしたって…ん…これは…?」

こちらに襲い掛かろうとした鬼達とその肩に乗っていた狐女が消えていく。

「お主を倒した後血の存在を知ったりして舐められたら厄介じゃかな。」

声がした方を向けば脇差を抜いた老人がいた。

「ハアハア…なるほど、貴方が今まで私に嫌がらせをし続けてきた呪符使いですか?」

「いかにも。関西呪術協会に属する御門繁蔵という。」

「そりゃあそうですね。…あんなに大量の鬼を召喚できる…なんて呪術協会くらいしかありませんし。……ふう……詠春は知ってい

るのですか？」

「いや、奴は知らん。これはワシだけしか知らん事じゃ。」

「こんなにいたいけで儚い少女に何故こんなことを？」

「お主の血は危険なのじゃ。その血はワシらにとって、使われる存在である鬼共を敵に変えてしまう可能性を含んでおる。お主の存在は我らにとって許されぬ。」

「…そうなのですか？…ですがこんなに勝手に召喚しては足がついて詠春にばれるのでは？」

「今まではその点が一番厄介じゃったが、今回は別じゃ。どこかの阿呆共が総本山付近で大量に鬼を召喚しおった。勝手に持ち出したお札200枚じゃったが、反乱者が盗んで使ったものと捏造すればいいじやろう。それくらいの事はできる立場にある。」

「大した糞じじいです。」

「許してくれとは言わぬ。さらばじゃ。」

繁蔵が刀を抜き近寄ってくる。この期に及んでも油断もなく隙すら見せない。

呪符使いと言っていたが剣士としても優秀なのだろう。今の奏では確実に勝てる相手ではない。……だが、

「（真名…お願いします。）」

「ええ、さようなら。」

瞬間繁蔵の頭部が弾け飛んだ。



「大丈夫かい？ 奏。」

近づいてきた真名に声をかけられる。

「ええ。少し手伝ってください。」

奏は落とされた腕を取り横になる。そして真名に落とされた腕を切

断面にくつつける様お願いし、真名が言うとおりで腕を合わせるのを確認すると、旅行前にタカミチに買った最高級の魔法薬を飲んだ。

途端切断面が光だし腕が体にくつついてくる。

そして無かったはずの腕の感覚が戻ってきた。

さらに少し挟られたりした体の傷や顔の切り傷等も治る。

失った血が戻るわけではないから力は未だ入らないがこれで多分死ぬ事はないだろう。

「さっきの戦いは見ていて本当に肝を冷やしたよ。」

「ごめんなさい。ですが、呪符使いを誘い出すにはこうするしかない浮かばなくて。」

奏はわざと鬼達に苦戦した。

過去の二度の襲撃から呪符使いがどこかで監視しているのはわかっていて。

さらに一度目の襲撃なんて完全に予定外、イレギュラーの行動時での襲撃であり、それから居場所は判らないが常に自分を見張っている奏は確信していた。

だから相手を騙すため血を無駄に使っての戦闘を展開し、後半も覚悟を決めてわざと紅気を霧散させ鬼の攻撃を腕で受けた。
全ては召喚した呪符使いをこちらに近づけさせるため。

本来は最後の一匹と相打ちに近い芝居を見せ、死体確認に来たところを捕まえその後、真名に他の仲間がいないか拷問させる予定だった。

今思うと穴だらけで、さらには出血多量で確実に死んでいたなと酷い作戦に思わず苦笑するが、相手が予想外に剣士でもあったことが幸運だった。

自分で止めを刺しに来た繁蔵は警戒しながらも勝利を確信していたのだろう。冥土の土産にとでもいう様に軽口で喋ってくれた。

そして必要な事を聞いた奏は真名に念話で合図をし、真名に繁蔵を狙撃させた。

繁蔵が優秀な剣士でもあると判断できたが、真名の紅気を使った銃弾はエヴァでも反応できなかった速度。

飛び道具が通用しないと云われている神鳴流でも防げないと確信を持っていた。

「…このことは詠春には報告しないでおきましょう。私は彼に会った事はないですし見たこともありません。…さて真名、木乃香さんの所に向かいましょう。あちらもあちらで危険な状況になっているみたいです。」

「いや、奏はここまでだ。奏の変わりは私がやるから後は寝ていてくれ。どうせ今の動けない君じゃ足手まといになるだけだ。」

真名が奏を持ちあげながら言う。間違った事はいつていない。確かに今の奏では役に立たないだろう。

「ですが…」

「駄目だ！私は先ほどの戦いは奏の言う通り一切勝手な行動はしなかった。今度は奏が私のいう事を聞くんだ。」

「……わかりました。でしたら私は転移魔法符で戻りますので真名は私を置いて至急向かってください。」

「わかった。また後で会おう。」

了解した真名は奏をやさしく地面に下ろし、髪を掻き分け奏のおでこに優しくキスした後、関西呪術協会本部の方に向かって走っていった。

真名を見送り奏も転移魔法符を所々破れた制服のポケットから取り出す。

（……しかしどこに戻ればいいのか？総本山は危険ですし…ホテルにでもしましょうか。）

そんな事を横になりながら考えていると、ふと人の気配を感じた。
首だけ動かしてそちらを見る。

そこには笑みを浮かべてこちらを見ている月詠の姿があつた。

24話（後書き）

いえ、刹那がいたとされる里のようにどこかの山くらいでひっそり過ごしている烏族だっています。呪術協会の監視を含んだ庇護の下に（捏造）。

ただ大半は魔法世界とは違う、とある世界に封じられているって妄想設定です。

あまり深い突っ込みは遠慮願いたいです＞＜

その世界の詳しい話はある一匹の鬼が出てきた時にする予定です。

25話

「撫子はん。さがしましたえ。」

月詠が笑みを向けながら奏に近づいてくる。
右手には前の刀も所持している。

「再戦をこんなに早く希望しているとはさすがに思いませんでした。」

（とりあえず今戦って勝てる相手ではありません。魔法符でとんずらしましょう。）

転移魔法符を握り締める。

「勘違いしたらあきまへんえ。うちは全力の撫子はんと死合いたいです。今の状態の撫子はんと戦いたいわけやないです。」

あっけにとられている間に近寄られてお姫様だっこされる。

「うちが呪術協会まで運んであげます。」

「……あなたは本当に変わり者ですね。…それと私は羽藤奏です。撫子は偽名です。」

「奏はんっていうんや。いい名前ですね。」

「ところでなぜ貴方がここに？」

「いえ、うちの雇い主の千草はんが協会本部に結界を掻い潜りしかけたんですが、うちは刹那センパイと戦わないって奏さんと約束したからすることがなくて、ずっと奏さんを探していました。ちなみに千草はんは鬼神を蘇らせましたが結果的に作戦失敗していましたえ。」

「そうですか…安心しました。」

鬼神を復活させて失敗したのなら多分倒されたのだろう。倒したのは詠春かエヴァだと判断した。

（刹那さんと木乃香さんはちゃんと無事でしょうか…。）

敵の作戦は失敗に終わったようだが二人が無傷とは限らない。

奏は月詠に運ばれながら無事を強く願った。



「つきましたえ。」

「ええ：しかし鬼神が暴れたにしては本山は建造物の破壊が見られませんね。」

本山入り口付近に到着する。

呪術協会は離れた時と特に状態が変わっているようには見えなかった。

「鬼神と150の鬼を雇い主の千冬はんが召喚しましたが、戦闘場所事態はここではなかったんです。」

「そうなんですか：月詠さん。私はここでいいですよ。あなたは本部の人たちからみたら裏切り者にあたるのでしょうか？」

「そうですね。これもばれたら厄介ですのでここで逃げさせてもらいますわ。」

月詠が自身の刀を撫でるように触りながら言う。

「あなたはこれからどうするんですか？」

「ん。奏はんにまだ勝てないっていうのは解りましたので修行の旅を試みようと思います。強くなったらまた死合いしましょうね、奏はん。ではうちはこれで。」

月詠が奏を降ろす。そして本山とは逆の方向に歩いていった。

月詠を見送り、奏は念話で刹那を呼び出す。

「（刹那さん。刹那さん…聞こえますか？）」

「（奏さん!! 無事ですか？）」

どうやら刹那は無事なようで少し安心する。

「（よかった：真名が戻っているはずと言っていたのですが見つからなかったので心配していたんです。今どこですか？）」

「（呪術協会本山の入り口付近です。できれば出迎えてもらっていいですか？歩くのもしんどくて：）」

「（今すぐ向かいます）」

連絡を終え奏は立ちくらみを覚え、その辺に座り込む。
思考するのも難儀で奏はただぼーっと静けさ漂う暗がりの中、目を閉じて響く虫の鳴き声を聞き入った。



「奏さん。大丈夫ですか!？」

数分後、刹那が迎えに来た。
制服は破れ、顔に切り傷も見える。
どうやらかなりの激戦だったようだ。

「ええ、私は。そちらも相手を退けたそうですね。月詠さんから聞きましたよ。」

「月詠が!？」

「私も別の場所で戦っていたのですがその戦いが終わって歩けない私をここまで運んでくれたのは彼女なんですよ。」

「彼女に何かされませんでしたか？」

「元気でしたら仕掛けられたかもしれませんが、この通り立つのもままならない状態ですからね。また次にという事になりました。」

「……そうですか。」

答えながら刹那が奏を抱き上げる。

さっきの月詠に抱き上げられた時と同じお姫様抱っこだ。

しかし月詠の時は何も感じなかったが刹那にされるとすこし恥ずかしく感じた。

「血の件はありがとうございました。あれがなければ最悪死んでいたかもしれません。」

刹那が奏を見ながらお礼を言ってくる。

話によると鬼神はエヴァが倒したそうだが、鬼族や烏族に狐女等、

150匹の人外を明日菜と二人で相手したそうさ。さらにはフェイト・アーフェンクルスなる強い白髪の少年。

多分シネマ村でエヴァが言っていた少年の事だろう。

対峙したことも見たこともないので、いかほどの強さなのかは判らなかったが話を聞く限りかなり危険な存在だったらしい。

「奏。」

話を刹那から聞いているとエヴァと茶々丸がやってきた。

後ろには真名もいる。

「こんばんわ。エヴァ。大活躍だったそうですね。」

「当然だ。私は最強だからな。これで不甲斐ない詠春とじじいに恩を売る事も出来ただろう。当分金に心配しなくても良さそうさ。」

（いいなー。）

「それより何があった？かなり衰弱しているようだが。」

エヴァが近づき刹那に抱きかかえられている奏の頬を優しく触る。とても悪の魔法使いとは思えない。

（これも主から従者にたいする寵愛のようなものなのでしょうか。）

「いえ、私が数年前から命を狙われていた事は知っていたと思いますが、その犯人が判ったので懲らしめていました。…もうこれから狙われることはないでしょう。安心して木乃香さんを護衛できます。」

「犯人はどのような存在だったのですか？」

刹那が奏に質問してくる。

「わかりません。殺し屋のような存在でしょう。……何も喋らなかったのです。」

刹那に本当の事をいうのはやめておいた。

正直に話して呪術協会の上役を殺した事を詠春に言わないようお願いしたら刹那は奏の為に思い黙ってくれるだろう。

だが刹那は詠春も尊敬、敬愛している。

元々木乃香を守るため西を抜けた刹那だが、拾ってくれた詠春に対する忠義の精神は残っているはずであり、今回の事実を知ると板ばさみのようになって多少苦悩するのは目に見えていた。

「（私もそれでいいと思うよ。）」

真名が念話を送ってくる。

真名を見るとこちらに優しく微笑んでいた。

「まあ、この話はその辺にしておこう。そんな事より刹那。お前結構怪我しているだろう。私が奏を連れて行くからお前は先に戻るといい。」

真名が刹那の肩に手を置く。労っている様な感じは一応するが…。

「かまわない。私が奏さんをゆっくり眠れる場所まで案内する。」

刹那が奏を渡さないように真名に背中を向ける。

抱きかかえられた刹那の横から真名の表情を見る。真名は刹那の後姿を少し不満そうに見ていたが、奏と目があったら再度笑みを向けてきた。

どうやらここで喧嘩のようなものをする気が無いとわかり安心する。
が…

「おい桜咲刹那。奏をこちらに寄越せ。私が運ぶ。」

力を戻した最強の魔法使いが突っかかってきた。

「エヴァンジェリンさんのいう事でも聞けません。私が運びます。それに態々エヴァンジェリンが運ぶ理由など無いでしょう。」

「理由ならある！ 奏は既に仮契約で私の従者になっている。仮契約していないお前こそ関係ないだろう。こちらに渡せ。」

（ああ：せっかく真名が引き下がってくれたのに：それに二人に仮契約の事は黙っているようお願いしたのに：）

エヴァの後ろでは茶々丸がエヴァの様子を録画している：何となく焚き付けたのは茶々丸だと予想した。

「と、とりあえず戻りましょう。疲れていますので。」

「そうだね。まずはゆっくり落ち着ける場所に移動しよう。その後今のエヴァンジェリンとの仮契約の事について詳しく話してもらおう。」

「そうですね。私も納得できる理由を知りたいです。では逝きましよう。：それとエヴァンジェリンさん。私は仮契約で奏さんの従者になっています。関係なくありませんので。」

刹那がエヴァに軽く余裕の笑みを見せる。

「おい…奏。」

もうとりあえず奏は目と口をを閉じて一切の反応を示さない事にした。

どうせ何を言っても状況が好転する事などないだろう。

（はあ…この中で一番弱っているんですけどね…私。）

25話（後書き）

京都弁わからないです＞＜

26話

「奏様。鉄のサプリです。気休め程度ですが飲んでおいて下さい。」

「あゝ…何というか……だるいです。」

布団で寝ながら茶々丸から薬をもらい水で流し込む。

修学旅行最終日、いきなりのダウンスタートだった。未だ貧血状態で、さらに昨日は弱っていたのにも関わらず布団に横にされてからは説教に次ぐ説教。

そして究め付けは今日木乃香とネギの仮契約を知った事。

もう今日は何もしたくなかった。

奏は木乃香がネギと今は仮契約を結んだ事を良しとは思っていないかった。

英雄の息子と娘…二人が仮契約を結んだと知られば裏で知名度がより上がり、木乃香の危険度も跳ね上がるだろう。

呪術協会の長の一人娘だからいつかは裏の事を知ったとは思いますが、それでもネギと仮契約を結んで欲しくは無かった。

幸い木乃香の魔力はかの英雄達をも上回る量だという。鍛えたら誰も敗れない障壁や治療魔法など覚えるかもしれない。性格的に攻撃魔法は無理だろうが…せめてそういう自分を守る術を身につけて欲しいと思った。

「……エヴァさんは行かなくて良かったんですか？学園長から聞いてますよ。惚れていたんでしょう？ネギ先生の父親に。」

茶々丸と一緒に看病してくれているエヴァに話しかける。

今この部屋には奏と真名とエヴァに茶々丸の4人しかいない。

クラスメイトやネギはその父であるナギ・スプリングフィールドの別荘に行っている。

刹那は行かないで看病するつもりのようにだったが木乃香に誘われたのと、奏が大丈夫だからと促したらしぶしぶ向かって行った。

「死んだ奴を思い出しても悲しくなるだけだ。そ、それに「マスターは失恋して今は新しい恋に全力投球です」…おい。」

「でもマスター。本当のことでしょう？
言っておきますが状況は悪いんですよ。いつまでもその場で足踏みしていたらいつか本当に寝取られますよ？」

茶々丸の言葉にエヴァが固まる。

真名はため息をつきながら茶々丸を見ている。

「大丈夫ですマスター。S様はマスターの気持ちを受け入れてくれます。印象も好印象のようですし、何よりS様は向けられる好意にとても弱いようです。恋愛に関しては優柔不断マックスです。」

「お、おい！茶々丸。」

「……」

「真名様にも提案があります。S様を独り占めしたい気持ちは分かります。しかし転校して2週間程度で二人もの存在を惚れさせてしまったS様ですが、これから増えないといえますか？今回の戦いは狗族のオスのハーフだっていました。その血は色んな人外を惹き付けるもの。私は対策が必要だと思うのですが。」

「む…。」

真名が思案顔になる。

「って確実にSさん私じゃないですか！」

「ばれてしまいましたか。まあ、ばれるように話しまし、あっ…あっ…マスター…」

いつの間にか茶々丸の後ろに回ったエヴァが無言でネジを回す。

姿が茶々丸で完全に隠れていて見えないが、わざと隠れているように感じた。

「え、えーっとエヴァさんの事は一先ず置いて……なんで茶々丸さんが血の事しているんですか？エヴァさんが教えたのですか？」

エヴァに関することも冗談かどうか聞きたいが、その前に血の事に關しては黙ってはいられない。

（エヴァさんが教えたとは思えませんが。）

「い、いや私は教えてないぞ。茶々丸ということだ？」

茶々丸の横からこちらを少し見た後、茶々丸に顔を向けてエヴァが言う。一瞬目があったがその顔は真っ赤だった。

「……私としたことがこれは完全に墓穴を掘りましたね。……わかりました。説明します。

実は私はマスターの凛々しい姿、情けない姿、恥ずかしい姿等のデータ収集が唯一の趣味なのですが、そういうのを確実に撮る為に家には隠しカメラを至る所に仕掛けているのです。

……先日の話も見事音声付で録画されていました。てへっ。」

茶々丸が自分の頭を軽く叩く。コンコンと軽い音が場に響いた。

「こんのボケロボおお！メンテだ！今すぐ葉加瀬のところに持って行ってやる！貴様という奴は私を困らせるようなことばかりしおつて！」

エヴァが茶々丸の背中中のネジを巻きながら怒鳴る。

「そ、れはやめておいた方がいい、ですよ。そんな事し、ましたら最悪さらに奏様の秘密が知ら、れる可能性がでてきます。」

「…どういう事だ？」

エヴァが手を止め茶々丸を睨む。

「今は私が自身で設定変更し止めていますが、本来この体は自分で見たもの聞いたもの全てを向こうの研究室から閲覧できるようになっています。」

メンテでもして私が葉加瀬様や超様にとっての正常な状態に戻れば情報は筒抜けになりますね。

記録を消去するという方法もありますが、メンテの際復元される可能性もあります。マスター立会いの下、数十分の軽い整備程度ならかまいませんが私を彼女に長時間預けるのは危険かと思います。」

場が沈まりかえる。

そしてしばらくしてエヴァがこちらを見る。

「……とりあえず奏。約束したのに私のせいで秘密がばれてしまつてすまなかった。」

「……いいですよ。この件はエヴァさんに非はありません。もちろん茶々丸さんにも。……それに茶々丸さんは葉加瀬さんよりエヴァさんを一番に行動していますので安心して大丈夫でしょう。……大丈夫ですよ？ 茶々丸さん。」

「もちろんです。私はマスター命です。という事でさっきの話に戻りましょう。」

（全然悪びれてなさそうです…。）

「私はですね。真名様に刹那様、そしてマスターを加えた3人でチープな淑女同盟を結ぶべきであると思うのです。」

奏様はこのままいけばきっと人外ハーレムなるモノを形成すると私は予想しています。そんなことになるのを真名様だって望んでないはずです。

まずは刹那さんを含めた3人で手を組んで他を寄せつかないようにして、その上で奪い合えばいいのではないのでしょうか？」

「……………」

あまりの物言いに奏は何もいう事が出来ない。というより理解が出来ない。

（し、淑女同盟？じ、自分がハーレム？……………というかエヴァは…）

いつの間にか茶々丸の後ろに再度回ったエヴァは言いたい放題の茶々丸に何もいう事無く、ただ後ろからネジを回す音のみが聞こえる。その表情はこちらからはうかがう事が出来ない。

「奏様、不思議そう、な顔をしてい、ますね。でも本当なのですよ。マ、スターは奏様が好きなのです。」

過去を見たというのもあると思いますが、誰も持ち得ない上質な血をもち、呪いの解呪をなされて以降、意識して自分のものになりたいようです。奏様が女性というのが原因であり積極的な行動ができていないようですが…。」

最早主をないがしろにした完全な言いたい放題だが、エヴァが茶々丸を何故か怒ろうとしない。今はネジを回す音も止まっている。

（……………本当に…エヴァさんが…私を…。）

昨日の仮契約破棄の提案を頑なに拒否した対応、さらには買い物のペアネックレスのプレゼント。さらに転移魔法符を返してもらう自宅訪問の際、中々家に帰してくれなかった事等を思い出す。

（い、言われてみると……で、ですが…）

「とりあえず真名様。先ほどの件お考えになってください。マスタ―はオーバーヒートしていますし、どうやらネギ先生たちも帰ってきたようなので私たちは先にホテルに戻っておくことにします。」

茶々丸が固まって動けないエヴァを抱きかかえ歩いていく。

奏も真名も無言で見送った。去り行く際ある程度離れたところで、抱きかかえられたエヴァが茶々丸の横からこちらを少しのぞいて来たが目が合うとすぐに茶々丸の体に隠れた。

（あの可愛いのが本当に600年の生き物なのでしょうか…。）

その後、無言の真名から総本山を離れるまで常にねちっこい目で見られながら看病されることになった。

26話（後書き）

総本山襲撃はほぼ原作通り。

刹那の翼はネギや明日菜にばれています。

原作ほど、翼をだすのに躊躇はしなかったと思いますが…。

木乃香もナギの別荘に行く前に奏と詠春の二人から、奏が護衛である事を教えられています。

メインキャラ紹介

羽藤奏

主人公。

詳しくは最初に投稿した主人公紹介で。

面倒が嫌い。楽するのが好き。

刹那に言わせると顔つきだけはほんの少し綾瀬夕映に似ているらしい。

ネギを嫌ってはいないが、魔法使い達に目をつけられるのを面倒に思いあまり関わらないようにしている。

結構な優柔不断でさらにヘタレ。身近な人達のみにはれている。

現在真名と刹那が仮契約により奏の従者となっている。

エヴァとも仮契約をしておりエヴァが主。

今の最大の悩みはネギが奏の護衛している木乃香と仮契約を結んでしまった事。

もう一つの悩みは3人の想いを知り、どうしていいか完全にわからなくなっている。

エヴァとの契約によるアーティファクトはまだ試していないので不明。

龍宮真名

奏とは1年と半年くらい前からの付き合い。

顔には出さないが奏が転校してきて半月もたたない間に二人もライバルが増えた事に内心焦っている。

刹那を親友と思っているがそれでも奏を譲る気はまったくなく、さっさと自分のものにして諦めさせようとしている。

アーティファクトはイメージした銃を召喚できる。

おかげで銃の持ち運びは一切不要になった。

アーティファクトに銃弾を装填すれば撃てば普通の銃だが、装填しないで撃つと自分の魔力を使った魔力弾が飛ぶ。さらにその魔力弾を奏の紅気が包み込むように覆っており、威力と速度はエヴァでも対応できない程。

紅気は奏の血を使うので使いすぎると奏が貧血症状をおこす。だからあまり使わない。

桜咲刹那

奏が転校してきた時、事前に長である詠春により新しい木乃香の護衛と伝えられていたため嫌っていたが、木乃香との仲を取り持ってもらい、さらに奏の体質、香により欲情したのも重なり、たった一日で強烈に意識するようになる。

二日目には既に自身の気持ちを理解し、さらに奏と自分が似たような存在、自分と似たような半生から、奏に対してだけはあまり遠慮をしなく素直に気持ちを伝えるようになる。

今では前よりは白翼がコンプレックスではなくなっている。

アーティファクトは一見何の変哲もない腕輪。

しかし腕輪を付けるとその手の拳と剣にだけ紅気を纏わせる事が出来る。

紅気を纏った斬撃は上質な武器でもない限り軽く切り落とす程の威力を持つ。ほぼ防御不可の攻撃。

紅気は奏の血を使うので使いすぎると奏が貧血症状をおこす。だからあまり使わない。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

奏に登校地獄の呪いを解いてもらいその際勝手に過去を全て見て、奏の人間性や今まで生き方等に親近感を覚える。極上の血も味わい、さらにはナギが既に死んでいるという勘違いもあり奏を意識するようになる。

現在では惚れている事を自覚しているが、奏が女性であるのが原因で大した行動はできていない。しかし主を思う？茶々丸の暗躍により距離がどんどん縮まっている状態。

茶々丸の性格改変によりよくからかわれるが嫌ってはいない。

絡繰茶々丸

奏が転校する前に車に轢かれて以降何かが変わったガイノイド。自身を最終進化系ガイノイドと称し、ロボットといわれると相手が泣くまで殴る。

人の感情を理解している節があり、エヴァと奏をくつつけるよう暗躍する。

趣味はエヴァの一人の特殊な表情や姿を録音・録画すること。

現在エヴァに関するデータだけで500TBを超えているらしい。

完全にエヴァ命になっており、そのデータを守るため葉加瀬や超にもデータを勝手に見られないよう設定を自身で変更した。

今では葉加瀬と超でも電源をオフにしていじくりまわさない限り茶々丸の中のデータを閲覧する事はできない（昔は定期的に研究室にデータが転送される設定だった）。

27話

あんまり楽しくもなかった修学旅行も終わり、奏は修学旅行から10日経った今日エヴァの家で飛行魔法の訓練をしていた。

帰ってから刹那のお願いで1週間は何もしないで療養していたが一日昨日からエヴァに紹介された別荘で練習を開始した。

今日はもう一度別荘に入り向こうで24時間（11外での経過は1時間）過ごして訓練した。

一度入ると24時間（11時間）は出れないので門限の近い今はエヴァの家の庭で浮いている。

飛行魔法はエヴァの教えの良さも伴い浮くだけなら初日の数時間で成功していた。

エヴァの教えだけでなく奏が魔力を一般人よりは理解していたというもあるが。

奏は昔タカミチの戦闘術を魔法世界で見てから、習得方法を聞き一度咸卦法を身につけようとしたことがあり、魔力というものを素人よりは理解していた。

…咸卦法が成功した事はもちろん無い。

杖に乗っかり数メートルほど浮く。

今使っている杖はエヴァとの仮契約によるアーティファクトである。一見ただの魔法使い達が持っているような1メートルほどの杖であり、そして魔法を使用する際の媒体としての機能もあるが、実は仕込み刀にもなっている。

刀としては椿ほどではないがかなりの上質な刀だ。

持ち運びも必要ないので毎日椿を持ち歩かなくてもよくなり仕込み刀と知ったときは少し喜んだ。

アーティファクトとしての能力は杖・刀の遠隔操作。頭で意識する事で自由自在に動かす事ができ、さらには離れた場所にあるときでも紅気を纏わす事もできた。

しかし実際刹那と剣を交えながら使用すると思いのほか同時に意識する事は難しいと解りこれも訓練が必要だと感じた。

「奏。お前魔力量はタカミチレベルで糞だが、筋自体はかなりいいぞ。：まあ私が魔力を送らない限り空を飛ぶのと初級魔法がせいぜいだろうが。」

「別にかまいませんよそれで。空を飛べるだけで十分です。」

「他の魔法はいらないのか？」

「ええ。初級魔法くらいは知っておきたいですが……基本的に私の

戦闘法は気を使って闘う方法ですから。それに飛行魔法を覚える事は一つのステップアップにもなるのです。」

「ステップアップ？」

奏は咸卦法が成功しない原因は魔力と気を上手くコントロール出来てないからだと言測を立てている。タカミチのように何度も何度も合成に失敗し、痛い思いして繰り返し返して覚えるのも手ではあるが、残念ながら奏にそのような熱血根性はない。

そこでまずは合成するのではなく魔力を使って空を飛び、刀だけに気を纏わせ、的でも作って空からそれに向けて正確に気を飛ばすなどして、魔力と気を同時にコントロールできる訓練をしようと考えた。

咸卦法を昔練習していた事やそれらの旨をエヴァに話す。

「：確かに理に適ってはいると思うが：そもそもお前に咸卦法は必要あるのか？紅気を使えば咸卦法を使う以上の強さになるだろう」

エヴァが尤もな疑問をぶつけてくる。

「そうですね。一人身だったらそんなに熱心にはならなかったかもしれませんが、最近に従者2人に主まで出来てしまったんですよ。真名と刹那さんのアーティファクトは私の紅気を使いますし主は事あるごとに血を要求してきますし。この飛行訓練も対価は血ですからね。正直血をあまり無駄遣いしたくないのですよ。」

「ぐぬ…。」

わざと少し困らせる言い方をする。咸卦法を覚えたい理由は本当は決してそれだけではないのだがその理由は今は言わない。

そして反応に困っているエヴァを他所に一緒に別荘で訓練しに来ていた木乃香と刹那、そして真名を見る。

木乃香は刹那から陰陽道についての基礎を学んでいるようだった。奏は京都にいたが詠春から一切陰陽道については学んでいないから完全に範疇外だ。

真名はテラスで茶々丸に入れてもらったお茶を飲んで和んでいる。

奏はこの1週間はずっと部屋で寝ていたので解らないが、その間に彼女達3名で何かを話し合ったのか修学旅行3日目のような殺伐した雰囲気には一切なっていない。

そもそも奏にとっては茶々丸があの時いった言葉が未だ完全には信じられないのだが、それでも飛行の訓練中に偶に向けるエヴァの、赤くなり恥ずかしがっている表情等を見ると、やはり本当のことなのかとも思ってしまう。

「マスター。お客様ですよ。ネギ先生です。」

空に浮きながらそんな考え事をしているとテラスから茶々丸がやっ

てきた。後ろにはネギと明日菜、さらにはのどこかもある。

「坊やか…何かようか？」

エヴァがネギに問いかける。二人は修学旅行で少しは関係が改善したようで、ネギはそれまではエヴァを見るだけで震えていたが今はそれもなくなっている。

「はい。……僕をエヴァさんと奏さんの弟子にしてください！」

エヴァだけに用かと思っていたら自分も入っていておもわず集中が切れて1メートルの高さから落ちる。

「痛たた…わ、私もですか？」

「はい。奏さんからはエヴァさんにも一度勝った剣術を学びたいのです。」

（ああ…そういえばあれからこの子に尊敬の眼差しで見られているのを忘れていました。）

「えーと、申し訳ありませんがお断りします。」

「ちょ！何だよ。教えるくらい別にいいじゃない！」

隣の明日菜が少し大きな声で奏に言う。のどかもほんの少し不満そうだ。

「あれです。戦い方の違いですかね。私は基本相手が全力を出す前に仕留めたり、隙を作り出してそこをつくという様な戦い方しかしません。不意打ちもします。

いわばあまり正々堂々では無いんですよ。

エヴァさんにもその方法で勝ちましたし修学旅行でも鞘とか飛ばしたり、そんな戦いばかりしていました。それがネギ君に合う戦闘法とは思えません。

ですのでここはエヴァさんからのみ師事してもらってください。」

「おい！勝手に私を師匠にするな！嫌だぞ私は……せつかく邪魔もなく二人きりで教えることができるのに。」

後半声が小さくて聞こえなかったがどうやらエヴァは大反対なようだ。

気持ちは奏にもすごいわかった。

尤もな理由を付けて断ったが奏だって一応刹那ほどではないが京都神鳴流を詠春直々に習っている。基礎剣術くらいは教える事は出来るのだ。

断った理由はただただネギと関わるのが面倒で嫌なだけだった。

「お願いします。エヴァさん。この通りです。」

ネギが正座して額を地面に擦りつける。奏や明日菜だけでなくここに
いる全員がいつの間にかエヴァを見ていた。

それに気付いたエヴァがネギを見て少し後ずさる。

「うっ……し、試験だ！試験に合格したら教えてやらないでもない
！」

（まあの雰囲気では嫌とは言えませんよね。）

その後茶々丸と戦い一発でも入れる事ができれば弟子にするという
条件になった。

奏はあまり興味も無かったのでそれからの数日も変わりなく放課後
別荘で修行の際は、同じく修行中の刹那と木乃香の傍にいつつ、飛
行しながら気を同時に扱う練習に力を入れた。

だから知らなかったが、どうやらネギは古菲から二日ほど中国拳法
を学んで茶々丸に満身創痍ながらも一発いれたとのことだった。



おまけ

茶々丸 side

「マスター。奏様は気付いていないと思いますが、奏様の飛行訓練中から制服のスカートの中見てしまい顔を赤くするのは、さすがにムツツリすぎて従者として引いてします。」

「ちちち、違どうぞ！見えそうだったけど見てはいないぞ！」

あたふたしているエヴァを茶々丸は見逃すことなく録画する。

（今日もいい画が撮れました。……しかしそろそろ葉加瀬に頼んで容量増やしてもらわないといけないかもしれません。）

28話

ネギがエヴァの弟子のような形になってから2週間ほど経っていた。その間に夕映が魔法の事を知りネギをそっち方面で手伝うという事になったが、奏は自分には関係のないことなので何も言わなかった。

まだ何も知らない身でありながらも本人が自分の意思で裏の道を選び、ネギが責任を持つというのなら言える事はなにもないだろう。

基礎魔法を別荘内のどこかと一緒に学んでいる夕映はとても楽しそうだった。

（魔法に憧れる気持ちは解らないわけではないんですがね。）

エヴァの特殊な別荘でここ2週間奏は気と魔法の同時使用に精を出し、今日もこれまでずっと別荘で訓練していたのだが、訓練が終わり別荘を出ようとしたところで、ネギと明日菜が魔方陣の上に膝立ちで額をくっつけ合っているのを見かけた。

（明日菜さんはネギ先生に鞍替えしたのでしょうか……タカミチよりはかは楽に落とせそうです……オッサンからシヨタとは中々の雑

食っぷりですね…。」

「いや、多分がお前が想像しているのとは違うぞ。」

エヴァに後ろから声を掛けられた。

話を聞くとどうやら過去を見せる魔法らしい。

エヴァは退屈からのどかを焚きつけて、彼女のアーティファクトで自分達もネギの過去を見ようとした。そしてそこにはのどかだけでなく木乃香、刹那、真名、和美、夕映、古菲もいた。

奏は自身の過去や秘密を勝手に知られるのは絶対嫌なので、逆にネギの過去を勝手に見るのを悪い気がしてそこを離れる事にした。

しかし黙ってこっそりと離れたつもりだったが後ろには真名がついて来ていた。

「私もあまり興味が無いからね…。二人で偶には水入らずのデートでもしようじゃないか。」

幸いかどうかは解らないが別荘に入って24時間経っていたので先に出ることができた。

◆
まあそんな台詞を吐いた真名だから今は少々機嫌が悪いようで、目の前の老紳士な悪魔を睨んでいる。

二人でエヴァの家から出てからは特に大した話をすることなく、手を繋いで（真名が勝手に繋いできた）夜の麻帆良学園を歩き、色々寄り道しながら時間を潰した。

そして寮に戻ったところでこの悪魔に偶然鉢合わせした。

勿論奏は最初気付かなかったが真名の目を誤魔化すことはできない。

「とりあえず悪魔さん、何で女子寮付近でうろちよろしているんですか？変態紳士ですか？」

「ぬ？……上手く気配を消していたと思ったのだが…。」

「生憎私の連れは見抜くのが得意でして。」

「ふむ。私はヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン伯爵。伯爵などとたいそうな事を言っているが没落貴族でもある。して君たちとは？」

「教えてあげません。」

「ふむ。最近の若い子は教育が行き届いていないようだ。」

ため息をつきながらこちらに構える。無手が彼の戦闘法らしい。奏も周りを確認して鬼化し刀を抜く。

そして真名もアーティファクトの銃を両手に出し弾を装填した。

「ほう…どうやら君たちは二人とも人間ではないようだね。」

ヘルマンがこちらを見て驚いた瞬間真名がヘルマンの顔、眉間に向かって狙いをつける間もなくノーモーションで連弾を撃つ。

完全に隙を突いた攻撃だったがヘルマンはその弾を手で掴む。

真名が銃を撃った瞬間に奏も瞬動で接近し、ヘルマンの自身の手で隠れてしまった視界の死角から首を刎ねる一閃を放つ。

しかしこちらの見えてないはずの一撃を腰を落とし首を下げて交わしながらヘルマンは一步奏に踏み込んできて、そして右のストレートを放ってきた……

奏の刀を持つ右拳に。

（なるほど。）

奏は右手の刀を手放し、その手でヘルマンの伸びきった右手首を掴みそのまま一本背負いのような形で投げた。

普段なら体重差もあり難しいが、今は常とは力も素早さも数倍に増している鬼状態。さらには相手の勢いも利用した投げ。浮いたヘルマンの体を背中から打ち付けるよう投げる。

そしてヘルマンを地面に打ちつけ、すぐに刀を取るべく距離を置いた瞬間に真名がヘルマンの顔に向かって再度銃弾を数発撃つ。

だがその銃撃はヘルマンが顔の前で両手をクロスさせる事によって防がれた。

奏はヘルマンが倒れている間に刀を拾い、真名とヘルマンを囲むように位置を移動する。

「顔を殴りに来ないのは貴族らしく紳士だと感心しますが、そういう余裕を見せれる立場なのですか？」

立ち上がったヘルマンに問いかける。

「依頼主から標的以外は基本的に傷つけるなと言われていてね。しかし大したお嬢さん達だ。強い存在と戦うのは私の数少ない趣味でもある。……しかし今回はここまでにしよう、仕事があるのでね。」

ヘルマンがポケットから符を取り出す。
そしてその符が何であるかを理解した瞬間ヘルマンがこの場から消えた。

「……転移魔法符。真名。私は木乃香さんの所に戻ります。あなたは学園長に知らせてもらえますか？」

「わかった。私も後でそちらに向かおう。」

真名が学園長の元に向かうのを見届けて奏もエヴァに念話を送る。

「（エヴァさん…聞こえますか？）」

「（奏か？お前いつの間にか消えよって…どこにいる。）」

「（その話は後にしましょう。そこにまだ木乃香さんや刹那さんはいますか？）」

「（…………いや30分ほど前に帰ったぞ。）」

「（そうですか…エヴァさん。先ほど麻帆良学園に上位の悪魔が侵入しました。木乃香さんを見つけたら保護してください。お願いし

ます。」

エヴァが何か言っていたが念話を切り今度は刹那に念話を送る。
しかし刹那からは反応がなかった。

（一体何がおこっているのでしょうか…）

「（奏：聞こえるかい？）」

「（真名？）」

「（学園長が悪魔を見つけた。あの悪魔は世界樹の近くの学祭のステージにいるらしい。そこに木乃香や刹那もいるとの事だ。捕らえられているらしいが…。）」

（初めて学園長が役に立ちました。中々あの人も仕事が早いです）

「（わかりました。先に向かっておきます。）」

真名からの念話を切り奏は世界樹に向けて走り出した。



学祭用のステージではネギと狗族の少年がヘルマンを戦っていたが、ネギの様子がおかしかった。

（あれは……暴走……？ いえ、今はそんな事より。）

奏はすぐにネギから目を離し、離れのステージ上の水牢に閉じ込められている刹那と明日菜以外の別荘にいた木乃香達5人の元に行き、刀で突き刺し牢を破壊する。

「デメエ……いつのマニ！」

水で出来ているような可愛い生物が二匹ほど奏に向かって攻撃を仕掛けてくる。

奏は二匹の水の鞭のような攻撃をよけながら二人を通り過ぎ今度は一人だけ別に閉じ込められていた刹那を囲む水牢を破壊した。

そして刹那の容態を確認する。

（ふう……どうやら眠らせているだけで窒息するわけではないようですね、この水牢は。……しかし木乃香さんと刹那さんを危険な目に

合わせた報いは受けてもらいます。」

奏はみんなの視界に入らないところで鬼と成り紅気を刀に纏わす。ネギも正常に戻ったらしく今はヘルマンと距離を置いている。

ヘルマンもネギに集中しておりこちらには一切意識を回していない。

（死になさい。）

奏はヘルマンに向かって椿を振り下ろし紅気の刃を飛ばそうとした。しかしすんでの所でいつの間にか近づいていたエヴァによって止められる。

「やめておけ。鬼状態を見られたくないとはいえ、あまり不意打ちによる殺しをクラスメイトの目の前でやるな。木乃香の護衛としての印象が本人からも悪くなるぞ。」

「エヴァさん……。解りました。…というよりさっき木乃香さんの居場所知らない振りしたでしょう。ずっとここにいたくせに。」

「まあな。坊やを師事することになったからには一応真剣にやろうと思っとな。」

この戦いは修行の一環だ。なに、木乃香に手を出そうとしていたら私がどうにかしていたさ。だがあの悪魔は坊やにしか興味がないようだった。それにもう決まるぞ。」

エヴァが目で指し奏も見る。ネギと狗族の少年のコンビネーションによる攻撃にヘルマンが翻弄され、そしてネギの放った雷系の強烈な魔法の一撃がヘルマンに直撃する。

頭に血が少し上って忘れていたが、木乃香達も水の生物を彼女達で封印していた。

魔法が直撃したヘルマンを見るともう戦う気もないようなので奏は角と刀を収める。

そして傍の刹那を頬を軽く叩いて起こす。木乃香も刹那のところにやってきた。

「…ん……ここ、は…?」

「大丈夫ですか？刹那さん。」

「せっちゃん！大丈夫?」

「奏さん。お嬢様…私は…。」

「刹那さんは眠らされていたみたいです。でももう大丈夫ですよ。ネギ先生が犯人を片したようです。」

ネギの方を見ると既に悪魔は還ったらしくその姿は跡形も無く消えていた。

「どうやらもう終わっているようだね。」

真名も遅れてやってきた。

「ええ。しかし、はあ………訓練の後にこの騒動……さすがに疲れ
ました。もう帰りましょう。」

奏は木乃香を、そして刹那を水牢に閉じ込めた悪魔を自分で殺せな
かった事に未だ少しの苛立ちを感じながら、寮に戻る事にした。

（木乃香さんも護衛で、そして友人ですので当然ですが………どうや
ら私は自分で思っている以上に刹那さんを大切に思っているみたい
です。）

29話

茶々丸side

「茶々丸ー。最近何か設定とキャラが全然違う気がするんだけど：久々にあなたをばらして整備点検したいから放課後研究室に寄ってくれないかな。」

超包子で手伝いをしていたら茶々丸は葉加瀬に頼まれる。

もちろん返答は決まっている。

「お断りします。葉加瀬は興味を持ったら相手の事を考えないで失礼な事を平気でやる人ですから：：：私にだって誰にも見せたくない記録というものがあります。：：：：：そうですね。マスターが同伴して記憶領域に関しては一切触らないというならその提案を受けなくてもありません。」

（マスターの恥ずかしい姿や情けない姿に照れてる姿etc：：：それらは私だけの物です。）

「ええええー！ やっぱり茶々丸おかしいよ。エヴァンジェリンさん

を主と設定しているとはいえ前までこんな子じゃなかったよ!」

「きっとあれです。私は進化したのです。いつまでもあなた達の手の中で踊っていると思っっているのなら大間違いですよ。

葉加瀬は私を作ってくれた大切な存在ですがマスターはエヴァ様です。勝手にマスターの情報を見れると思わないで下さい。という事でまずはマスターにお願いしてきてください。」

昔は葉加瀬が好きなときにデータを閲覧できていたが、今はそれを茶々丸がブロックしていて葉加瀬に渡してはならない情報は一切閲覧できないよう設定している。

(何故私がそういう事が出来るようになったかはわかりませんが、出来るようになったからにはマスターの個人情報、そしてマスターが惚れている奏様の秘密を漏らすわけにはいきません)

手伝いを早めに切り上げて茶々丸はこの件の事をエヴァに報告するべく超包子をあとにした。



奏side

「何読んでいるんですか？奏さん。」

放課後、奏が麻帆良スポーツ新聞を読んでいると後ろから刹那に声を掛けられた。

「世界樹伝説です。何でも学祭最終日に世界樹の下で告白したら受け入れられるそうで…。」

「へ、へえ。それって本当なんですかね？」

「わかりません。まあ本当だとしても驚きはしませんが…：認識障害魔法満載の学園ですからね。恋心を植えつける何かがあってもおかしくはありません。惚れ薬の延長のようなものです。」

奏は新聞を半分に折り机に置く。
教室を見渡すとみんな学祭のクラスの出し物であるお化け屋敷の下準備で大忙しだった。

（今日はエヴァさんの別荘での練習は無理そうですね。）

奏は修学旅行から戻って体調が良くなってからは一日も休まずエヴァの別荘で気と魔力を使う練習をしてきたが、今日から数日の練習は難しそうだ判断する。

明日菜から10分ほど休憩を貰ったので休んでいたがあまり休むのも何か悪い気がするので5分程度で休憩を終わりにし木材を切る作業に戻ることにした。

声をかけなかったが教室を見回した際、離れて真名が少し憂いの表情でこちらを見ていたのが気になった。



「奏。これから時間あるか？」

下校時間になったがクラスの半数が夜までこっそり残り続をするようなので、奏も特に用事が無いから手伝いをしようと思ったところ、エヴァに声をかけられた。隣には茶々丸。

「はい。大丈夫ですよ。護衛の時間自体は終了してますし。」

「そうか。ならば場所を移そう。」

刹那に一言声を掛けてから女子中等部を出て寮までの道をエヴァ、茶々丸と3人で歩く。

「実は葉加瀬が茶々丸をメンテをしたいと言ってきてな。茶々丸は私が立ち会わない限り了承しないと聞いたそうだが…」

「それで立ち会ってあげるんですか？」

「いや辞めておこうと思っている。こいつは昔と違ってロボ…ガイノイドらしくなくなっているが別に命令を聞かないというわけではないしな。こいつも昔に戻りたくないらしい。」

「そうですか……今日呼び出した用事はそれだけですか？断るつもりでしたらわざわざ私に伝えなくても良かったのに。」

「……そ、それだけではない。」

心なしか緊張を含んだ声質に感じたのを奏はエヴァの顔を見る。

しかしエヴァは俯いており、元々奏より小さい体なのでその表情をうかがい知る事は出来ない。

「マスター。がんばがんばー。」

エヴァの後ろでは茶々丸が、どこの国かもわからない小さい国旗をくるくる回しながら応援し、同時に撮影もしている。

奏がやっぱりエヴァ立会いの下メンテさせたほうがいいんじゃないだろうかと考えているとエヴァが顔をあげた。

「奏！…学園祭1日目クラスの出し物が終わったらその後私と一緒に学園を回らないか？」

「えーと…二人ですか？私は木乃香さんの護衛がぁr」「それは代わりに私が勤めましょう。」茶々丸さん？」

「ですのでマスターと二人で楽しんで下さい。私からもお願いします。」

「茶々丸さん…わかりました。刹那さんに当日は連絡しておきます。」

「そうか！約束だぞ！なに、午後ずっとは言わん。夕方からはまほら武道会の予選もあるからな。だけどお昼から夕方までは絶対にあけておけよ。」

「わかりました。…ところでまほら武道会とは？」

初めて聞く言葉である。

「麻帆良学園で一番強い存在を決める大会のようなものだ。今年も

魔力は封じられているが一応私もある。そして奏、お前もあるぞ。」

「私：出場用紙とかそういうの出した覚えありませんが。」

「お前とは一度戦ってみたかったから私が出した。お前は確実に自分からは出ようとしなからな。」

さっきまでのらしくない姿から一転して今はいつもの唯我独尊の彼女に戻っている。

武道大会というのは話を聞き限り出たくないが、エヴァのその姿に少し安心する。

しばらくエヴァと話しながら歩いていると寮に着いた。

先ほどからずっと少し興奮気味のエヴァにお別れの挨拶をしてその場で見送ると、気付かず先に行くエヴァを他所に茶々丸がこっそりと一人だけ戻ってきた。

「奏様、マスターが学園祭と一緒に回ろうと誘うという事、わかっていると思いますが今一度真剣に考えてくださいね。」

茶々丸がお辞儀をしてエヴァを早歩きで追いかけていく。

判ってはいたはずだが無意識に考えないようにしていた事を茶々丸に指摘され、学園祭と一緒に回ろうと誘われる事がどういう事なのか考えてしまう。

（やっぱり……デートなんですよね。）

先日も途中で悪魔に襲われたが、それまでは真名曰くデートをした。冷静に考えたらデートなんてものをしたのは前の真名とが初めてである。

しかし真名にはもっと過激な事もされているし、彼女の場合一々の過激な言動に慣れすぎてその程度では最早あまり意識することはない。

（しかし……）

エヴァの余裕のない誘いを思い出す。そして承諾した後の興奮気味の姿。

そして日は学園祭。

考えると少し頬が高揚していくのを感じる。

茶々丸にしっかり考えろといわれたが、とりあえずこれ以上考えても眠れなくなりそうなので奏は思考を断ち切り部屋に帰る事にした。

30話

寮の部屋に向かう。

エヴァの話がすぐに終わったので学校に戻りお化け屋敷の準備を手伝う事も考えたが、ここまで来て戻るのも難儀だったのでやめておく事にした。

（大浴場を独り占めするのもいいかもしれませんが。）

そんなことを考えながらドアを開けると、部屋には既に帰宅していた真名がいた。

「ただいま、真名。……しかし人の事いえません。真名も不良ですね。出し物のお手伝いをしないなんて。」

ベッドに座りこちらを見ている真名に話しかける。だがいつもは目があっただけで微笑んでくれる真名だが様子が少しおかしい。その顔は放課後見たときと同様少し不安顔だ。

「どうかしたんですか？ 真名。」

「いや……依頼を受けてね。どうしようか迷っているのさ。」

「報酬が高いのなら受ければいいんじゃないですか？それでこそ守銭奴の渾名を持つ真名でしょう。」

「失礼だね。」

そこで初めて真名が少し笑う。

「そうだね。報酬は破格で、さらに個人的にも受けたい依頼ではある。でもこの依頼は君と敵対する可能性があるんだ。それがちよつと迷いの元だね。」

「どういう依頼なんですか？」

「すまないが、それは詳しくは依頼主との約束でいう事はできない。ただこの依頼の内容そのものに関しては奏にとつてどうでもいい事だと思う。いや、もしかしたら賛成するかもしれない。……だけど今の奏の学園での立場を考慮すると、敵対を余儀なくされる可能性があるというわけなんだ。」

「という事は木乃香さんに関係があるというわけですか……。」

「直接的には関係ないかな…。ただ君がこの土地で近衛木乃香の護衛をするという事は…。」

「なるほど。魔法使い達と敵対する内容の依頼なんですね。」

真名が頷く。

確かに奏は魔法使い達のピンチになるような非常事態になると、半ば強制的に問題の解決に協力させられるだろう…。もちろんお金はもらうが。

関東魔法協会の長である学園長の孫を護衛するという事は学園にいう限り、そういう立場なのだ。

魔法使い達は学園の、そして世界の平和を守っているのだから、木乃香の護衛をしている限り関係ないと一蹴して逃げる事はできないだろう。

「真名の好きにしていいますよ。話を聞く限り木乃香さんには関係ない事なのでしょう？でしたら問題は特にありません。木乃香さんが傷つく依頼でしたら主として命令してでも辞めさせますが。」

「いやその件に関しては大丈夫だろう。依頼人は魔法使いを含め誰かを傷つけるつもりはまったく無いようだ。」

「でしたら受けてください。」

「…しかし。」

「真名。依頼の内容は詳しく判りませんから、もしかしたら真名が言った通り敵対を余儀なくされるかもしれません。ですがそれはその間だけで、私たちの関係が変わるわけではありませんし、変えさせません。」

「真名は私にとって大切な存在です。一時仕事でその関係が変わったからといって手放すつもりなどありません！わかりましたか？」

「あ、ああ。」

「ん。よろしい。」

真名の悩みも解決したと判断し、奏はクローゼットからパジャマを取り出し、浴場に行く準備をする。少々らしくない言葉を吐いた事で恥ずかしくもあり、早く部屋を出たかった。

「……まいったね。」

「??? どうかしましたか？」

真名の方を見るとベッドから立ち上がりこちらに近づいてきていた。その表情はいつもの奏に見せる微笑の表情だが、いつもより艶がある気がする。

「1年あったら落とすなんて簡単だと思っていたが、実際一緒にいればいるほど私が夢中になるばかり。その中でも今回は破壊力抜群だ。」

さらに縮まる距離。

「……すまない。奏。小言は後で聞くから。」

「ま、真名！」

近寄ってきた真名に抱き寄せられ、顎に手を添えられて軽く顔を持ち上げられる。

瞬時に次に何をされるか理解した。

前までだったら無意識に抵抗しそうだが、今は奏も抵抗する気なんてなれない。さっきは半分無意識だったが『大切な存在』と真名に言った。前までならそこも友達と言っていた台詞だろう。

先日刹那が悪魔に気絶させられてから奏は真名と刹那、そしてエヴァを見る目が少し変わったのを自覚していた。

今までそういうことはあまり考えないようにしてきたが、3人とも一般人と比べてはるかに命の危険性を伴う立場にあると先日解らされてからは、自分がどう思っているのか考える機会が少し多くなったように思う。

ほんの少し見詰め合っていたが真名の顔が近づいてくるのを確認した奏は目を閉じて真名を待つ。

そして唇に柔らかい感触が伝わる。

「ん……」

真名からはいつも半ば無理やりの激しいキスしかされたことないので今回のような優しいキスは初めてだった。30センチ以上の身長差のため、完全に見上げる形でのキス。

そして前回よりもより満たされていく思い。

（真名だけじゃなく……やっぱり…私だって夢中みたいです…。）

キスされながら奏も心の中で呟く。

口には出せなかった……想いが真名だけに向いている訳ではなかったから…。

それは真名にも既にばれていると思うが、それでもちゃんと想いを伝える事の出来ない自分の優柔不断さに内心ため息が出た。

「ねえ…奏。」

「ん？」

真名が一端キスを止め奏の耳元で優しく呟く。

真名の息が耳に掛かるだけで少し震える。

「角だしてもらえないかい？」

「え？…どうしてですか？」

「奏の全てを見たいから…：チープな言い回しだが、本音だからそれで納得してくれ。」

奏は真名のいうとおりに2本の角を出す。確かに安い台詞だがそんなことを言われて断る事など今の奏に出来るわけが無かった。髪を掻き分けて突き出た2本の角を真名が見つめる。しかしそれも一瞬。

真名は奏の角にキスしてきた。

「ひゃん!!ま、真名あ!!」

体に力が入らなくなり地に膝を着きそうになるがその前に両手を後

ろに回され真名に支えられる。奏も倒れないように真名の背中に手を回す。

「ちゅ…ちゅ…」

抱き寄せながらも真名が角にキスの雨を降らせてくる。

「だ、駄目です。真名あ…お願いですから…あっ！…それ以上は…」

体全体が痺れるような感覚の快楽に襲われながらも真名に懇願する。だが真名は止めてくれない。

奏は快楽に溺れそうになりながらも、なけなしの理性を振り絞って角を引っ込めた。

「はあ…はあ…」

「奏…今とてもいい顔している。かわいい。」

真名が再度唇にキスしてくる。奏は完全に蕩けておりもう何も考える事は出来なかった。

それ以降は真名に首筋や耳たぶをアマガミされたり、もう一度角を出すようお願いされて出したり、されるがままに真名から与えられる快樂を受け入れた。

その日、奏に二度目の角を出して以降の記憶はない。



真名 side

真名は奏の至る所にキスをして楽しみ、慎ましやかな胸も触ったりもしたがそこまでするにして、完全に理性を失っている表情の奏をベッドに横たわらせる。

本当はこれ以上の事もしたかったが、茶々丸が仕切った、刹那とエヴァンジェリンの3人で結んだ協約のようなモノを思い出して止めておいた。

協約：茶々丸が名づけた淑女同盟。

内容は実に単純だ。他の人外が奏に興味を持たないよう協力する。そして互いにチャンスがあれば奏に吸血もキスもしていい。だが抱いてはいけない。ただそれだけだった。

実に馬鹿な約束事をしてしまったものだと思名は思う。

確かに修学旅行最終日に茶々丸が言った通り、たった数日程度で奏が面倒くさそうなタイプを二人も惚れさせた事から少し焦っていたが、それでも結ぶべきではなかった。

真名だけじゃない。奏だって真名に夢中になっている。

先ほどのまでの一連の出来事で真名はそう確信していた。

（まあ、奏は刹那やエヴァンジェリンにも同様に惹かれているだろうが。）

しかし、だからこそ今日で古臭い物言いだが自分にメロメロにさせたかった。

（これは茶々丸にしてやられたな……あれはあの時の私の心理を読んで、そしてどちらかといえば3人の中で一歩抜きん出ている私の次の行動を防ぐための策でもあったのか……。）

人の感情を詠み、そして己のご主人に有利になるような策を考える
ロボットに少し感心しつつも舌打ちが漏れる。

とりあえず過ぎたことを考えても仕方がないと判断して風呂に入り
に行く準備をする。

部屋から出る前にもう一度だけと、いつの間にか寝ていた奏の唇に
キスをした。

31話

「本当にあれから何もしていないんですよね？」

「本当だって…しつこいな。」

朝からこのやり取りはもう4度目だ。奏は昨日の記憶が2度目の角を出してからまったくないので不安だった。

「わかりました。ここは真名を信じることにします。」

「ん。それより今日は刹那と一緒に学園長に呼ばれているんだろう？ 刹那は先に行ったぞ。奏も早く準備したほうがいいんじゃないかい？」

今日は学園祭の前日で、一日中学園祭の準備に時間が与えられているので授業はない。

それ故に奏と刹那は朝から世界樹のある近くの学祭のステージ、先日ヘルマンと戦った場所に呼び出されていた。

「私はもう出ますが真名は依頼人の下へ？」

「そうだね。依頼を受けると決めたからね。もし敵になっても容赦

しないからそのつもりでね。奏。」

「はい。それでは行ってきますね。」

奏は靴を履きドアを開ける。

真名に手を振ろうと振り返ったらいつの間にか目前に真名がいて優しくキスされた。

「行ってきますのキスというやつだ。他人がやっているのを見ても殺意しか沸かないが当事者になるとやりたくなってしまうものだ。」

真名の笑顔を見ていると恥ずかしくなって外に出てドアを閉める。

奏は時に頬を両手で押さえながら少し蒸気しているのを自覚しながら呼び出しの場所に向かった。



「奏君、遅かったな。みんなそろっておるぞ。」

呼び出された場所にいると刹那やネギに狗族の少年、さらにはタカミチまでいた。その他にも色々いる。

（まあ裏の関係者なのでしょーうね…ヘルマン事件に関連しての呼び出しと思ったのですがどうやら違ーうようですね。）

「子供がいると思えば学生にダンディズムにシスター、果ては妖怪まで大集合ですね。仮装大会でも開くんですか？気が早いですよ。祭は明日なんですから。」

「誰が妖怪なのかは聞かないでおくわい。とりあえずよく来たの。最悪お主はドタキャンする可能性もあると思っっていたからの。」

「どういう印象!？」

「お主はよく居留守とかするって聞いておるからの…誰からとは言わんが。」

（詠春……）

「まあ全員揃ったから説明しよう。先ほどからネギくんや小太郎君も理由が知りたくてうずうずしているようじゃからの。……さてネギ君は世界樹伝説というのを知っておるかの？」

奏はネギと学園長の話を聞く。

どうやら先日新聞で読んだ世界樹の前で告白すると恋人になれるというのは本当だったらしい。魔法関連の事なのでありえないことではないと思っていたが、本当なら本当でやはり少し驚いてしまう。学園長はどうやらネギに、そして奏や刹那にも、学生が世界樹の前で告白する行為を妨害して欲しいそうだ。

さらには不審者の排除等もお願いに入っていた。

話を聞いてネギが快く承諾している。

「学園長の言いたい事はわかりました。ですが私は木乃香さんの護衛があるので……こういう祭の時こそ危険が増すと個人的には思うのですが……。」

「いや、ここにいる裏の関係者達は学祭の際は教鞭をとるのではなく、常に不審者の警戒などに力を入れることになる。じゃから木乃香の安全は保障されているようなものじゃ。」

学園長が木乃香を大切にしている事など知っているから、奏や刹那が傍を離れる際そういう対策をするのは知っている。

奏は今回ただ働きになりそうだから遠まわしに嫌と言ったつもりだったのだが、どうやら伝わらなかったらしい。

「空気読んで下さい学園長。私を働かせるのなら出すもの出してくださいという意味です。私は刹那さんやネギ先生のようにはいきませんよ。貧乏なんですから。」

あまり沢山人のいる前でお金お金言いたくないが、それでもただ働きなんて冗談ではない。

「まあ！あなたは学祭を成功させようとは思わないんですか？ここにいる人たちは皆さん今回は無償で請け負っているのですよ。」

突然大声を張り上げた金髪で長髪の学生が奏に怒鳴る。

「立派な心がけだとは思いますが。ですが私は事あるごとに学園長から給料を引かれているのです。学園長だってかなりせこいんですよ。そんな学園長に対しては私だってもらうものはもらう精神でいきたくありません。関係ない人は引っ込んでいてください。」

返答に金髪の女性はすごい剣幕で怒鳴り散らしているが学園長に止められる。

「わかったわかった。これに関しては別途報酬は出す。それでいいな？」

「はい。あとで学園長室で報酬に関して話しましょう。それでは私はクラスメイト出し物の準備がありますのでここで失礼しますね。後でネギ先生や刹那さんから詳細は聞いておきます。」

ここで話を聞いてもいいが、半数くらいから睨まれたのでさっさと退散する事にする。

（やっぱり立派な魔法使いを目指す人たちはお堅いですね。友達になれそうにありません。正当な行為だと思ったのに……。）



学園にゆっくり歩きながら戻っていると、ネギと狗族の少年、そして刹那が誰かを抱き上げながら奏を追い抜いて逃げていく。

（あれは確か…超鈴音…。）

そして遅れること数秒、先ほどの集合の時にいて、奏を睨みつけていた金髪の学生や黒人の先生らが刹那達を追いかけていく。

（穏やかではありませんね……。ならば私のすることは一つです。）

とりあえず厄介ごとはスルーの精神で無視する事にした。

（刹那さんは修学旅行以降、木乃香さんと仮契約をしたネギ先生にそこそこ協力的ですね。私としてはそこは怒る所だと思ったのですが。……彼に関わると碌な事にならないのは目に見えてますので、私はすいませんがお手伝いできません。頑張ってください刹那さん！）

学園に戻ってからは珍しく準備を手伝っているエヴァや真名と雑談しながら、前夜祭に間に合うように一生懸命出し物の準備を手伝った。

その時にはもう完全にネギや超鈴音の事は忘れていた。

31話（後書き）

前の少しえっちな話から始まった感じの超編も修学旅行編同様、ネギでんてーに深く関わらない予定です。

しかし比較的バトルは多くなりそうです…。

超編終了41話目予定。

32話

「只今より第78回麻帆良祭を開催します！」

外から聞こえるアナウンス奏は気を引き締め直す。

とはいえ奏の仕事はお化け屋敷に入る人に順番待ちチケットと他のクラスの宣伝チラシを渡すだけだが。

仕事をクラスで決める際、奏にはこれくらいしかできるものがなかった。

お化け屋敷だからみんなコスプレしていて、奏は無難に古臭い着物に選んで着ている。

クラスの出し物は大人気のように行列は長い廊下はもちろんのこと、階段にまで及んでいる。

楽なのを選んだつもりだったがあまりの人気ぶりに他のお仕事にすれば良かったかなと少し後悔した。

しかし麻帆良祭はあまり祭に行った事がない奏にとって、高揚感を抑え切れないイベントでもあり、何だかんだで楽しみながら仕事をこなした。



麻帆良祭1日目午後3時

委員長による本日の終了がお客さんに伝えられる。

並んでいる人達は少し騒いでいたが、配られたチケットを所持していると翌日以降優先して入場できる事を説明されて、しぶしぶ解散していった。

委員長もここまで人気が出るとは思っていなかったのだろう。喜びながらも少し疲れた表情でため息を漏らしていた。

ともあれ、今日の部は終了なのでここからは夜まで自由時間になる。特に見たいものなどないが、それでも早く外を歩いてみたかった。

「か、奏。」

声をかけられ振り向くとエヴァがいた。
今日一緒に回る約束をしていた相手。

エヴァもゴスロリな服を着てコスプレしているが、どちらかと言うと奏には私服といった印象を受けた。
最近の訓練のためよくエヴァの家に行くのでこういう彼女のゴスロリな服装は見慣れていた。

「エヴァさん：お昼とりましたか？私はまだですのでできたらお昼をとりながら回りたいのですが。」

「いいぞ。」

エヴァもまだ昼食を食べていないらしく、とりあえずは一緒に昼食を取りに行こうと外に出る。

そして適当に並ぶ屋台を見ながら何を食べようか考えているとエヴァが手を繋いだ。

修学旅行前の買い物でも手を握られた事があったが、あの時とは違い意識している自分を自覚する。原因は言わずもがな茶々丸だろう。修学旅行最終日にエヴァの気持ちを彼女が暴露した事と、さらには先日別れ際に言われて言葉を思い出す。

（何というか…あの従者は何者なんでしょう…。）

奏は真名や刹那を想うとこれでいいのかと思ってしまいが、それでも握ってきたエヴァを拒否できるわけもなくこちらからも握り返す。エヴァを見ると、少し安堵の表情とぎこちない笑みを向けてきて、その可愛い容姿も相まって思わず頭を撫でてしまう。

（これが萌えというやつなのでしょ…。）

「お、おい！」

「ごめんなさい。行きましようか。」

昼ごはんはホットドッグやらたこ焼きやら屋台ならではの食べ物を
買って歩きながら一緒に食べた。エヴァをみると一々の言動が可愛
くて、自称悪の魔法使いにはまったく見えなかった。

茶々丸の言葉で確かにエヴァを意識していたが、何とか妹的な
感じもして、たこ焼きをはさんであげたりした。

その時に魅せる嫌々ながらも食べる姿もまた破壊力があつた。

その後、奏はエヴァと様々なアトラクションやゲームなどを楽しみ
つつ祭を満喫した。

600年も生きてきたエヴァだから、こういう遊びには冷めている
のではないかと思っていたがそんなことも無く、エヴァは遊んでい
る間は終始笑顔で心から麻帆良祭を楽しんでいるようだった。



「それで？何で貴方がここで油を売っているんですの？」

そんなエヴァとの楽しい学園祭だったが、2時間ほど回っていると
唐突に終わりを告げられた。

目の前の金髪とその従者の様な子によって。

（前に魔法使い達の集まりでいちゃもんつけてきた人ですよね……
確か。）

急激に気分が沈んでいくのを自覚する。エヴァも二人を無言で睨んでいる。

「油を売っている訳ではないですよ。ただ先約があっただけです。エヴァさんとは仕事を請け負う前から学園祭と一緒に楽しむ約束をしていたのです。学園長には初日午後は無理そうだと言っておいたのですが。」

奏は学園長と報酬の件で話し合った際、初日の午後の自由時間だけは手伝えない旨を伝えていた。

「ところで前々からすごい勢いで絡んできますが貴方の名前は何ていうんですか？」

「高音です。高音・D・グッドマン。こちらが愛衣。」

赤い髪の子が無言で頭を軽く下げて挨拶してくる。どうやらこの子

にも既に嫌われているようだ。その表情は少々険しい。

「約束があつたのは解りました。ですが何故！学園長の孫の護衛をしている貴方が稀代の悪である吸血鬼と仲良くしているのですか！？」

（稀代の悪…）

少し笑いそうになったが向こうは至って真剣なため我慢する。

「えーと、あれです。お互い友達がいなかったんで意気投合したとか、そんな感じです。」

「まあ！彼女と仲良くなるなんて此度学園の秩序を守る関係者として「もうお前は黙れ！」」

適当に相手して撒こうと思ったがエヴァが高音・D・グッドマンに喋りかけたと思ったら彼女が倒れた。

（……眠らせる魔法か何かでしょうか？…っと、ボヤつとしている場合じゃありません。）

他の魔法先生やシスター等と呼ばれたら厄介なので、愛衣と呼ばれていた子が倒れた彼女を支えている間にエヴァの手を取りその場から離れた。

とりあえずエヴァの手をとり彼女達から離れるべく何も考えないで数分走っていると、いつのまにか世界樹の近くまで来ていた。少し離れたところでは学祭のステージで高校生がライブ演奏をしている。

「エヴァさんとの約束が無かったら私はこの辺でお仕事していたかもしれませんね。」

「……奏。お前にはあの樹から漏れ出している魔力が見えるか？」

「いえ…やはり私は魔力関係は駄目ですね。」

エヴァには見えているのだろう。ここに来た時からずっと世界樹に魅入っている。

エヴァがそこから動こうとしないので、エヴァが満足するまでとりあえず待っていると、彼女が突然こちらを向いた。その表情は真剣そのもの。

「どうかしたんですか？」

「なあ…奏。私にキスしてくれないか？」

突如耳に響いたエヴァの言葉で奏の意識は途切れた。



エヴァ side

エヴァが言葉を紡ぐとその瞬間、世界樹が光だしあふれ出た魔力が奏を覆った。

そして突如奏の目が虚ろになる。元々いつも少し眠たそうな目はしているがそれでも今の状態が常の奏じゃない事がわかる。

エヴァも15年間この学園にいたから、勿論世界樹の伝説自体は知っていた。

この15年間そんなことは無かったから半分冗談とも思っていたが、この魔力を見たら嘘ではないと解った。

今回そんな事するつもりは無かったが、世界樹の漏れる魔力を見て、そして奏を見ると半分無意識にお願いしてしまった。

奏が一步一步こちらに向かって歩いてくる。目に光はなく間違いく意識は失っているだろう。

（か、奏とキス……しかし……いいのか？これで……。）

奏が虚ろに微笑みながらエヴァを肩に手を置く。

間近に綺麗な奏の顔があり鼓動が高鳴るが、それでも満たされない気持ち。

そして理由はとづくにわかっていた。

だからエヴァは、

奏の頬を軽くたたいた。そしてその際奏が取り込んだ世界樹の魔力をレジストした。

「へ？…え、エヴァ？……あれ？…どうしてこんな事に？」

「動くなよ。」

奏の意識が戻ったと理解したエヴァは、こちらを見下ろしている奏の首に手を回し背伸びしてキスをした。

600年間生きてきて自分がこういう乙女チックな行為に出ているのを少し客観的に不思議に感じながら、それでもこういうのも悪くないと実感する。

「……これが私の気持ちだが……返事は今は要らん。だが私は欲しいものは絶対手に入れるまで諦めん。今まで諦めた事は一度だけあるが今回諦めるつもりは無い。」

返事は聞かなかったのは茶々丸の助言から。
昨日の夜の茶々丸の言葉を思い出す。

『せっかくのシチュですので告白するのがベストですが、その際奏様の返事は聞かないで下さい。受け入れられることはほばないと思います。』

少し滅茶苦茶な言い方だったが言いたい事は解る気がした。
奏はヘタレだが鈍感ではない。真名と刹那の気持ちを知っている……だから彼女らの気持ちを無視してエヴァの気持ちに答えられないだろう。そもそもまだ自分に対してそういう想いがあるとも思えない……。

（修学旅行終了日から意識はしているようだが。）

想いを伝える事でより自分という存在を意識させる事……それが昨日茶々丸の考えた作戦。

だがエヴァは想いを伝えられただけで少し満足していた。
奏を決して諦めたわけではないが、初恋の男相手に告白する事も出

来なくずつとここに閉じ込められ、果てにその男の訃報の知らせ。

ずっと苦しかった。

今では呪いも解けて前に進む事が出来ているが、今日はその中でもより自分が前に向かって歩いていると実感できた日だった。

それは15年前ここに閉じ込められ、そして途中からは死んだように生きてきたエヴァにとって、久しぶりの事だった。

（この女は私のモノだ。）

一人満足したエヴァは未だ少し現実逃避している奏の手をとり、まほら武道会までの時間を目一杯楽しむ事にした。

32話（後書き）

次回からバトルが多くなりそうです。

33話

「ここだ。私とお前は既に手続き済みだから受付に行く必要は無いぞ。」

エヴァと麻帆良祭を楽しんで今は午後6時。

まほら武道会に参加するべく二人は来ていた。

二人で遊んでいる……デートしている間はずっと手を繋いでいたがここにつく頃にはさすがに離れた。

「……たつみやじんじゃ? ……1000万!？」

見過ごせない二つの事柄に思わずエヴァをみやる。

「ここは龍宮真名の実家だ。あと、まほら武道会の優勝賞金は今年1000万らしい。……去年は10万だったが…。」

「神社の娘が守銭奴とは……まあそんなことはいいです。ふふ…1000万ですか。目立つのは嫌ですがこれは優勝しなければいけませんね。」

「……お前も龍宮に引けをとらない守銭奴だ。」

超鈴音が主催者挨拶をしている。

（呪文禁止とかグレーゾーンの発言もしているが大丈夫なのでしょうか？）

参加者も続々と集まってきており、ネギに古菲に楓……さらには真名もいた。

（大金ですからね……。ですがこの面子なら出来ない事もないです…）

「私も鬼化、紅気も使えませんが、エヴァさんも魔力をほとんど結界で封じられていますしこれは望みあります。」

「…お前は何か勘違いしていないか？私を魔法だけが取り得の吸血鬼だと思っているのか？」

途端、体が動かなくなる。

「え？あれ？……何ですか？これは………糸？」

「気付くのが遅いわ。これでは優勝は無理だな。タカミチも出るみたいだしな。」

「タカミチもですって!?!?.....やる気なくなりました。もう帰っていいですか?」

優勝は無理と瞬時に判断した奏はあつという間に大会に興味がなくなった。

「駄目だぞ。確かに鬼化も出来なければ万が一にも勝てる相手ではないが、せめて私に負けろ!この大会で私が仮契約の主であるとお前にはちゃんと身を以って知ってもらわないとな。ほれ、お前はHブロックらしいぞ。さっさと行け。」

エヴァにお尻を蹴られる。予選は舞台上で各ブロック2人になるまで20名で闘いあうルールのようなのだ。

奏はクラスの出し物が終わってから一度も寮に戻っていないので未だ着物のままで、さらには刃のある武器が禁止とはいえ木刀すら持っていない。

(まあ：負けたらそれまでということでは。。。)

名簿にクラスメイトやタカミチ等の名前がなくて安心する。

(ん? 佐倉愛衣?)

名簿をみてHブロックの舞台を見る。既に舞台上に十数名上がっているがそこに昼に絡んできた二人のうちの赤髪がいた。どうやら彼女と戦わないといけならしい。

（昼睨まれていましたからねえ。もしかしたら全力でこっちを狙ってくるかもしれません……隠れていましょう。）

とりあえず奏は人ごみにまぎれる事にした。



AとGの強い人たちも事前に調べておきたかったが同時開始のためそれも出来なく、予選はあれこれ考えているうちにあつという間に開始された。

開始された途端殴りあう有象無象。

奏はこの中で魔法関係者故に、一番危険と判断した愛衣の死角に隠れながらこちらに攻撃してくる素人らしい学生の攻撃を回避し続ける。

Hブロックでは愛衣と口からビームを出す人間とは思えないサングラス男の独壇場だった。

というか後者は確実にロボットだろう。次々と二人にやられて20名いた舞台上が数名に減らされていく。

ある程度人数が減ったところで初めて奏は愛衣の視界に入った。とりあえずスマイルで手を振ってみる。

もちろん愛衣は武器である箒を片手にこちらに突っ込んできた。

（えゝ…まずは遠距離からビーム飛ばしている彼に近距離戦闘しかけるべきだと思うのですが…もう舞台上の人数も少ないですし狙われちゃいますよ？）

ロボットに背中を向けてでも奏に突進してくる愛衣にかなり嫌われている事を自覚しつつ、奏は叩かれたら痛そうな上から振り下ろされる一撃を横に移動し回避する。

刹那や月詠には遥かに及ばないが中々鋭い一撃であると判断しつつ、離れにいるサングラスの男も意識する。

奏と愛衣以外をビームで吹き飛ばした彼の口は奏にむいており、どうやら次のターゲットは奏に決まってしまったようだった。

幸い茶々丸のように有能じゃないようで、奏は照準に入らないように移動しながら愛衣の攻撃も回避する。

余裕も少しあるので隣の舞台とかも視野に入れてみたが、どうやらもう他のブロックは全て終わっているようだった。

エヴァや真名がこちらを見ていた。離れたところで刹那もこちらを見ている。

（刹那さんも出場していたのでしょうか？）

余所見をしていると愛衣が突きの初動、構えをこちらに向けた。

奏はここで初めて離れの真横にいるサングラスの男に少し隙を見せる。

途端口から放たれる光線。

奏は2メートルほどバックステップする……そしてそれを逃がすまいと突進しながらこちらに突きを放つ愛衣。

突きの最中に愛衣は横から来る光線に気付いたようだったが奏ばかり見ていて反応が遅れ、光線をもろに喰らい舞台上から吹っ飛んでいった。

（なむ……。……ですがこれで万事OKです！）

奏は魔法禁止のルールなら彼女に負けることはありえないと最初の攻撃から判断していたが、殴ったりしてさらに恨みを募らせたくもないのでとりあえずは舞台上で3人になった時に、彼に倒してもらおうと作戦を立てていた。

結局避けているだけで本選出場が決まり、これでいいのかと思わなくもなかったがあまり考えない事にした。



「お前はもう少しやる気をだせんのか？」

舞台を降りてエヴァの下へ向かったのだがいきなりの一声が批判だった。

「大会に出ただけで十分やる気は感じられるでしょう。それにしてもブーイングもありましたね。少しショックです。」

AとGの試合があまりにも速く終わったため残りの観客の目は自然とHに向かったのだが、その際何もしないで勝った奏にマグレ勝ちと少々冷やかす者もいた。

まだ中学の少女にブーイングなんてさすがは体育会系の集まりだと思う。

魔法関係の人もいたが……。

舞台から降りようとした時、愛衣の親分である金髪がものすごい罵倒しながら睨んでいた。というかまだ睨んでいる。

「偶然勝ったとしか判断できない奴らなど放っておけ。それと私は少し用事があるから外すぞ。……明日の本選では私と当たる事を祈

っているがいい。」

エヴァは言いたい事だけ言って離れていった。

奏はエヴァを少し見送り、することもないので真名や刹那のところに向かうことにした。



エヴァ side

「久しぶりだな。」

奏と別れたエヴァはある男の下にやってきていた。

顔を隠す外套をはおりって大会参加の際に馬鹿らしい偽名を使い、さらには魔力等うまく隠しているつもりのようなだがエヴァにはすぐに誰か判った。

「おや、久しぶりですね。エヴァンジェリンさん。っというかやっぱりばれてしまいましたか。」

「何故お前がこんなところにいる？」

「いえ、大会を通じてネギ君に伝えたい事があって。エヴァンジェリンさんこそこのような大会に出るなんて珍しいですね。暇人なんですか？」

「退屈ではあるが……そんなことはどうでもいい。今日は忠告に来た。」

「はい。なんででしょう？」

「今日日本戦に出場が決まった羽藤奏という女がいる。そいつの半生を知ることには許さん。そのアーティファクトを使い覗き見たら多分お前であろうと殺すぞ。」

「……そいつの秘密を知っているのは私と龍宮真名と桜咲刹那と茶々丸だ。……わかってるな？ 私たちの過去も覗くなよ？」

「珍しいですね。貴方がここまで誰かを守ろうとするのも。」

「奴は私の従者だからな。それより理解したか？ アルビレオ・イマ。」

「うーん…わかりました。エヴァンジェリンさんが守ろうとする少女は気になりますますが私もまだ死にたくないのでコピーしない事を誓いましょう。」

エヴァはイマがあまり得意ではなかった。形に合わず向こうもそこそこ長寿なせいかもしれない。エヴァを子供扱いしてくる。

しかも他人の半生を魔法書にコピーするとあってはかなり性質が悪い。

故にイマが了承したのを確認してエヴァはさっさとここを離れようとしたが、

「あっ！そうそう。エヴァンジェリンさんに伝えておく事があったのを忘れていました。……ナギの件です。」

イマの言葉に足が止まる。

「ふふふ。貴方にとっては朗報ですよ。貴方は死んでいると思っています。いるでしょうが彼は生きています。」

「な…んだと？」

（ナギが…生きている…。）

——光に生きろ。

かつての言葉がフラッシュバックする。最近まで何の魅力も感じなかった言葉。

今歩んでいるのが光の道かなんて知らないが少なくとも闇ではないだろう。未来に対して希望を持って生きているのだから。

「そうか：奴が生きているか：フフッ。」

「うれしそうですね。」

「うれしいさ。最近はうれしい事だらけだ。……生きているというのなら会って色々伝えないとな。」

「妻子持ちの彼に告白でもするのですか？」

「告白ではあるがお前の思っているようなことではないさ。じゃあな、もう戻る。」

エヴァはかつて恋していた存在が生きている事を喜びながら真名や刹那と雑談している奏の下へ戻った。

34話

麻帆良祭二日目。

奏と真名と刹那の3人は早朝からまほら武道会の会場である龍宮神社に向かっていた。

刹那が出場していたのには驚いたがそれよりも16名の本戦参加者のうち同部屋の3名が本戦に勝ちあがったというのもすごいことだと感じた。

「村上小太郎…ね。」

先日渡されたトーナメント表を見る。

奏の一回戦の相手は最近ネギとよく一緒にいる狗族の少年。

ヘルマン戦を見る限りでは強いが、それでも鬼化できなくとも負ける相手ではないという印象だったが数発は殴られるのかなと思うと嫌になってくる。

「彼はネギ先生をライバル視していて今も急激に強くなっていきます。ネギ先生との勝率も半々くらいあると思います。」

「そうなんですか？」

「はい。私もお嬢様に陰陽道の基礎を教えつつ偶にネギ先生に剣術指南をしたり、時にはネギ先生と彼の戦っている姿を見たりしてい

ますので。」

「ぼこぼこに殴りあう展開は遠慮願いたいのですが…。」

「そんな展開にはならないぜ！ねーちゃん。」

後ろを向くと本日 of 対戦相手に加えてネギと明日菜がいた。

「今日は手加減してやるから安心しな。」

「それは嬉しい言葉です。ですが何で手加減してくれるんですか？」

「女を殴るのは気がひけるし、それにねーちゃんが弱いからさ。昨日の勝ちもマグレでの勝ち抜きだったし、ヘルマンのおっさんの時も戦いを見ているだけだったし、修学旅行でもネギのクラスの生徒なのに一切戦っているところみなかったからな。」

「なるほど…。」

確かに小太郎には一切戦いを見られたことはなかった。よくよく考えたらネギだって奏の戦っているところは今まで見たことないのかもしれない。

明日菜がエヴァとの戦いを茶々丸と闘いながら少し見たくらいだろうが……それでもエヴァとの戦いはチャチャゼロを分断したくらいで大したことをしていない。

修学旅行も自力で立てないくらい衰弱して、戻ってきた情けない姿を見られただけだった。

小太郎を見る。

小太郎はまるで一回戦突破は当然かのように余裕の表情で奏を見ていた。

「決めました。今日の一回戦は無傷で勝つことにしましょう。」

奏の言葉に小太郎が一瞬固まる。

「おい、ねーちゃん。自分が何言っているかわかってんの？ さっきはきつそうみたいなこと言っていたじゃん。」

「いえ、実際間近で見ると何か余裕そうだなーと思って。相手がネギ先生じゃなくて良かったです。」

「へ、へえ。どこからそんな余裕が出て来るんだか……。」

「強いて言えば小太郎さんが子供だからでしょうか……。」

「…………ええ度胸や、ねーちゃん！試合で吠え面かくなよ。基本的に女は傷つけない主義やけどねーちゃんには遠慮無しや！行くで！ネギ。」

たった2，3の掛け合いで怒った小太郎があたふたしているネギの手をとり会場に早足で去っていく。

「奏さん。どうしてあんな挑発するような事言っただんですか？」

小太郎達3人が去ったあと刹那が奏に問いかけてきた。

「もちろん、樂をするためです。刹那さんは先ほど彼がネギ先生をライバル視していると言いましたが、どうやら彼にはネギ先生にはない欠点がありそうなので、試合ではそこを攻めることにしました。」

刹那はわからないようだったが真名は解っているらしく、性格が悪いと言奏に苦笑しながら言ってきた。



「ただいまよりまほら武道会一回戦第一試合に入らせて頂きます。」

朝倉和美のアナウンスで、木刀の奏と無手の小太郎が舞台上にあがる。

第一試合は嫌だったなと思いつつも、やるからには痛い思いをしたくないので木刀を構える。

目の前で対峙する小太郎は奏を睨んでいる。

せっかくだからスマイルを返して、ついでに握りこぶしを作り親指だけ下に突き立てると、小太郎の顔に青筋が出来た。

「それでは試合始め!!」

開始と共に小太郎が瞬動で奏に接近してくる。

その速さは鬼化しない奏の瞬動と同レベルの速さはあった。

奏は腹への拳による突きを右によけ小太郎に向かって、木刀による剣撃ではなく蹴りを放つ。

それは一般人レベルの速くもなく威力もないただの蹴り。

「ハハッ！何やその蹴り。馬鹿にしとんのか？」

小太郎は奏の蹴りをバックステップで回避して、足が地に付いた途端すぐに接近し、今度は腹に中段蹴りを放ってくる。鋭い蹴りだったが奏は難なくそれも回避した。そして小太郎のそのまま回転するように放ってきた回し蹴りも回避する。

「へっ！避けるのは上手いやないか。」

「これくらいは私だってできます。相手がネギ先生だったらきつかったかもしれませんが…。」

ネギを強調した奏の言葉を聞いた小太郎が怒りを露にした。

「だったらねーちゃんでは絶対避けられない攻撃を見せてやるよ！」

途端小太郎が10人ほどに分裂する。

その光景に観客と実況が沸く。

奏も素直に初めて見る分身の術そのものには感嘆した。その質は褒められたものではなかったが…

10人となり勝利でも確信しているのだろうか、不敵な笑みを浮か

べながら小太郎達が180度色んな方向から奏に向かい飛び掛ってくる。

しかし奏は9人の小太郎には目もくれず、右斜めから飛び掛ってくる小太郎に対して木刀に気を纏わせその鳩尾に向けて木刀を投擲した。

「がっ!!」

飛び掛ってきている状態だったため避ける事もできず、木刀の先がもろに鳩尾に突き刺さり小太郎は悶絶する。
分身は小太郎が維持できない状態なったため既に霧散していた。

「これで終わりですかね…。」

カウントも既に半分に差し掛かり残り5秒で立たなければ奏の勝ちである。

しかし10カウントの前に膝が笑っている状態ながらも小太郎が立ち上がった。

「……アホ、拔かせ。このまま終われるかよ。……けど体術も使えない剣士が剣を投げるなんてアホなミスしたな。ねーちゃん。」

立ち上がった小太郎が傍に落ちていた木刀を場外の池に投げ捨てる。

「……これでわいの勝ちや。あんな蹴りしか放てないねーちゃんに
もう勝ちはないで!!」

最早恐れるものはモノは何もないと判断したのだろう、息を整えた
小太郎が勢いよく突っ込んでくる。
しかしまだダメージで膝に来ているようで、試合開始ほどの速さは
なかった。

「…アデアット。」

奏はエヴァとの契約でできた杖のアーティファクトをだし、接近し
てくる小太郎の額に向かって木刀同様投擲する。

突如出現して自分に向かって投げられた杖に、接近しながら驚いて
いる様子の小太郎。

しかし瞬動の速度が少し低下していたのが幸いしたようで、小太郎
は突進しながら顔を下げてそれを回避した。

奏の奥の手を回避した事で、今度こそ勝利を確信したらしい小太郎
が笑みを見せながら奏に接近してくる。

しかしその油断が避けた筈の杖が後ろから小太郎に向かって飛んできていたのを気付かせず、勢いよく戻って来た杖の先が小太郎の後ろ首を突いた。

奏の杖であり仕込刀でもあるアーティファクトの能力、遠隔操作。奏の事を何も知らない小太郎がその能力を知っているわけがなかった。

「ガッ……!!」

小太郎がうめき声を上げる。

そして奏は後ろからの一撃をくらい倒れそうになる小太郎の顔めがけて、倒れる前に上段の蹴りを放つ。

その蹴りは気を纏い、速度も威力も先ほどの蹴りとは次元の異なる強烈な一撃。

奏の蹴りは小太郎の側頭部に直撃し、首を後ろから突かれて脳を揺らしていた小太郎の脳を更に揺らした。

小太郎が10メートル程蹴り飛ばされそのまま倒れる。

そしてカウントが開始されたが、奏はまず立てないだろうと判断した。

過去の経験から狗族がタフなのは知っていたが、だからこそ一切遠

慮のない蹴りを頭に放った。

（肉体がどれだけタフでも脳をあそこまで揺らされたら10秒程度で立つことはできません。）

そして案の定ピクリとも動くことなく10カウントが終了した。

「あなたの敗因は油断と驕りと……ん、試合開始前にも言ったとおり（メンタルが）子供な点です。」

まだ意識が飛んでいる小太郎に奏は言う。

試合前の挑発には引っかけり、ネギと比較されることに過剰に反応し、裏の関係者なのに活躍してないから弱いと決め付け、女だから基本傷つけないというつまらない矜持から顔は殴らず攻撃は全て腹へ集中させる。

そして弱い蹴りを一度見て剣がなければ何もできないと簡単に決め付け、さらには分身の術はできる範囲で抑えておけばいいものを己の強さを見せ付けるため大量に作って襲う。

確かに分身の造形は皆同じだったが、気を纏う密度だけは本物だけが高く、あとはすかすかだった。完全な練習不足である。

それにその時に投げた木刀だって油断をしていなかったら体を捻ってでも鳩尾を回避する事くらいは出来たはずである。

結局それらの油断や驕りが力をまったく発揮させる事なく負けた敗因となった。

（ネギ先生の目標は父親のようになることで、常に父親を追っていますし、さらに守る生徒達も増えました。ですので油断や驕りはあってもありすぎはしません。

ですが小太郎さんの目標は試合前に刹那さんから聞いた話では、ネギ先生に勝つこと。そして今でもネギ先生に半々の確率で勝つほどの実力者。

それは既に半分目標に届いているということ、目標に届いているという事は自己満足の頂でもあります。自分が強者だと驕りもするでしょう。

今回格下と思っていた私に負けた事で変わるといいのですが。）

未だ昏倒している小太郎を最後に一目見て、奏は舞台から降りた。

34話（後書き）

刃のある武器は武道会では禁止だけど、抜いていないため審判団の誰もが仕込み刀とは気付いていないから、使ってもいいよね。

次話はすごい短くなると思います。

35話

一回戦を無傷で勝手、幸先の良いスタートに奏は1000万を少し夢見たが、次の1回戦第2試合、すなわち勝者が次の相手になる戦いを見て、その後すぐに受付に行き棄権手続きをした。

（無理無理。あれには絶対そのままでは勝てません。）

クウネル・サンダース……棄権しなかったら闘う事になる相手だったが、このままで勝てる気はしなかった。
ふざけた名前で一回戦の試合もすぐに終わったが、それだけで恐ろしく強い相手であることはわかった。

「おい奏！勝手に棄権するなんて何考えているんだ！」

棄権のアナウンスに傍ではエヴァが怒っている。

（そんなに私をボコボコにしたかったのでしょうか……。）

「いえ、ケンタのフライドチキンに米は有りか無しか考えていまし

た。」

「ねーよ！……じゃない！そんなことじゃない！この糞従者め。」

エヴァは見事一回戦を勝っていた。

真名は古菲に負けたがどうやらわざと負けたようだった。最後は不意打ちのような形でやられたが、本来の彼女ならば最後まで一切の油断はしない。

刹那も明日菜に勝っていた。その際明日菜が咸卦法を使っていたのに少し嫉妬した。

そして一番予想外だったのはネギ。

彼がタカミチに勝利した事だ。今まで奏は、ネギのちゃんとした戦闘をヘルマン戦でしか見たことなく確かに強いと感じたが、それでも咸卦法を使ったタカミチに勝つとは思っていなかった。

もちろんタカミチが油断したってのもあるだろうが。

（やはり今の小太郎君とは見ているものが違うからなのでしょうね。もっと強くなるでしょう……ですが木乃香さんの主になったのならそれくらいは当然です。）

「おい！聞いているのか！奏。」

「はいはい。聞いていますよ。そんな事より次のエヴァさんの相手は刹那さんですね。」

小言を言われ続けるのも疲れるので話題をそらす。

「奴か……あいつはここ最近で急激に強くなった。もちろんお前の血による恩恵もあるだろうが……。……そうだ！このやり場のない怒りはお前の従者であるあいつにぶつけてやろう。いい機会でもある。」

「いい機会？」

「別に詳しく話すようなことではない。ただ誰が一番強いかをその身を以って解らせてやるだけだ。ハンデを与えた上でな。」

（刹那さんボコボコフラグです。ごめんなさい。刹那さん。）

エヴァと別れ、心の中で謝りとりあえず奏はもう敗者なので観客席に移動して、観客として観戦する事にした。

学園長が安全とは言っていたが、することも無いので観戦している木乃香の傍で一緒にみる事にした。

「木乃香さん。隣いいですか？」

夕映やのどかと一緒に観客席で立ち見している木乃香に話しかける。

「あ、奏。一回戦は格好よかったで。でも何で棄権したん？」

「2回戦の相手が絶対に勝てない相手でしたので……痛い思いするのは嫌いなんですよ。」

木乃香の隣に立ち会場を見る。今数分前にネギが高音・D・グッドマンに勝利して、これからエヴァと刹那との対戦が始まる。魔力を結界である程度封じられており、さらには詠唱不可の試合。確実にエヴァが不利な試合に思えるが、朝の糸の巧みな使用や先ほどの不適な笑みを思い出すと刹那に同情もしたくなった。

朝倉和美のアナウンスでデッキブラシの武器を持った刹那と鉄扇を持ったエヴァが登場する。

選手紹介の最中エヴァがこちらをちらりと見てきた。

あまり深く考えず手を振ると彼女も少し恥ずかしがりつつ控えめに手を振ってくる。

それに気付いた刹那もこちら側を見て小さく手を振ってくる。

刹那に木乃香が手をぶんぶん振り、奏も手を振るかえした。

選手紹介が終わると両者が睨みあう。

二人からは只ならぬオーラのようなモノを感じた。

（ふ、二人とも死なない程度に頑張ってください。）

そして試合開始の合図が会場に響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7397t/>

贅の血の少女

2011年7月18日10時09分発行